



平成二十七年 度

日南町・鳥取大学

連携の歩み

10th Anniversary 2005-2015

日南町・鳥取大学 連携のあゆみ

平成二十八年三月

鳥取大学

表紙写真撮影：岡田 純

平成 27 年度

日南町・鳥取大学 連携のあゆみ

平成 28 年 3 月

発行・編集

鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ

鳥取大学 研究・国際協力部 社会貢献課

〒680-8550 鳥取市湖山町南 4 丁目 101 番地

TEL (0857) 31-6777 FAX (0857) 31-6708

E-mail koken@adm.tottori-u.ac.jp

日南町 企画課

〒689-5292 鳥取県日野郡日南町霞 800 番地

TEL (0859) 82-1115 FAX (0859) 82-1478

E-mail info@town.nichinan.lg.jp

【目次】

鳥取大学長あいさつ	1
日南町長あいさつ	2
鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ座長あいさつ	3
鳥取大学地域連携担当理事あいさつ	4
産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 部門長あいさつ	5
★平成27年度までの主な経緯	
平成27年度までの主な経緯	6
鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターに関する協定書	9
★連携事業ワーキンググループ会議	
鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議について	11
平成27年第1回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議	13
平成27年第2回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議	14
平成27年第3回鳥取大学・日南町ワーキンググループ会議	16
★平成27年度連携事業	
教育・文化	
コミュニティ力向上に向けたワークショップスキームの開発（地域貢献支援事業）	17
地域学部 准教授 筒井一伸、教授 福田恵子、准教授 関耕二	
「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室2016（大学開放事業）	32
医学部准教授 中本幸子	
鳥取大学・日南町連携講座「にちなん町民大学」	38
日南町教育委員会	
国際理解講座「外国の文化に触れよう」（大学開放事業）	39
国際交流センター講師 御館久里恵	
地（知）的好奇心育成のための早期体験学習	40
地（知）の拠点整備推進室講師 天野圭子、産学・地域連携推進機構准教授 清水克彦	
日南小・中学校「サマー・ウィンタースクール」	41
日南町教育委員会	
医療・福祉	
発達障害児の包括的支援ネットワークの構築（地域貢献支援事業）	43
医学部教授 前垣義弘	
シミュレーションを用いた認知症教育プログラム（地域貢献支援事業）	45
医学部教授 山本美輪	
嚥下検診における高齢者の嚥下障害スクリーニング（地域貢献支援事業）	50
医学部助教 藤原和典	
生活・環境	
放置される財の解消に向けた戦略的研究：条例の作成を目指して（地域貢献支援事業）	53
農学部助教 片野洋平	
日野川源流域における水質・生態系調査（地域貢献支援事業）	54
地域学部准教授 寶來佐和子	
オオハンゴンソウの除草を中心とした森林資源の維持・有効活用について	
（地域貢献支援事業）	57
地域学部教授 永松大、農学部教授 日置佳之、農学部助教 片野洋平	
産業	
日南町森林活用プロジェクト会議	62
地域学部教授 永松大、農学部教授 日置佳之、准教授 藤本高明、助教 片野洋平	
★その他	

連携事業報告会	63
鳥取大学協定5町連携事業	80
新聞記事	82

日南町、南部町、大山町、琴浦町、智頭町

★連携協定締結十周年記念コーナー

日南町地域づくり大会	
～鳥取大学日南町連携協定10周年・まちづくり協議会設立10周年記念～	85
・日程	85
・記念講演	88
・まち協からの活動報告	100
・トークセッション	148
・写真集	155
とりりん・オッサンショウオ木彫パネル贈呈式	160
WG会議が鳥取大学学長表彰「地域貢献賞」を受賞	160
寄稿文集～連携10周年によせて～	161

学長あいさつ ～連携協定締結10周年を祝して～

日南町と本学の連携協定締結10周年を記念した「日南町地域づくり大会」が平成27年9月5日、日南町総合文化センターにおいて盛大に開催されました。地域の方々を中心に250名を超える皆さまにご来場いただけたことをもちましても、日南町との10年に及ぶ連携が如何に充実したものであったかを示していると思います。改めて、今日に至るまで本学との連携事業にご支援・ご協力いただきましたすべて皆さまに心からお礼申し上げます。



鳥取大学長

豊島良太

少子・高齢化の著しい日南町の活性化を図るため鳥取大学の「知」の力をお貸し願いたいとの矢田前町長の熱心な要請を受けて、平成18年3月、「鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター」設置に関する協定が締結されました。

「知と実践の融合」を基本理念に掲げる本学としても、教育と研究に現場（フィールド）主義を取り入れることができること、また、大学の使命の重要な柱の一つである地域貢献を具体化することができること等から、日南町との連携事業に積極的に取り組むこととしました。

連携協定の締結以降、オオサンショウウオの研究やヒメボタルの生態調査をはじめ、森林資源の活用、名水調査などによる地域の名物、名産や誇りの発掘・活用、そして住民の皆さんの生きがいづくりや健康増進などを目指した様々な連携事業を行なってまいりました。こういった取組みが、人口減少、少子・高齢化に適応した地域づくりや地域再生のしくみづくり、空洞化しつつある地域の活性化に少しでもお役に立てたのならば嬉しい限りです。

また、日南町との連携において忘れてはならないのが、地域の皆さまへの感謝です。3年前、私が学長に就任したおり、心の中では「学生が迷惑をかけ、住民の皆さんは困っておられるのではないかと心配しておりました。そういった心配は杞憂に終わったのですが、地域の皆さまには食事や布団を用意してもらっただけでなく、挨拶や礼儀作法まで教えてもらい、本学が標榜する「人間力」までつけていただきました。心より感謝を申し上げます。

本学は、高等教育を広く一般化しようということで設立された新制大学であり、その使命の1つが社会貢献です。18歳人口が年々減少する現状で、各県に1校ずつ大学を置いたという意味をしっかりと理解し、地域貢献・社会貢献に尽力していきたいと考えております。その意味におきましても、日南町の皆さまには引き続きご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成28年3月



町長あいさつ ～連携協定締結10周年によせて～

平成27年度は、鳥取大学と本町の連携協定締結10周年を迎えると同時に、共に歩んだ「まち（むら）づくり協議会」設立10周年を迎える記念すべき年でした。これら活動を記念した「日南町地域づくり大会」が9月5日、日南町総合文化センターで開催され、250名を超える皆さま方にご来場を賜り、光栄に存じております。ありがとうございました。



日南町長
増原 聡

感謝と同時に、10年という歳月の中で、他の自治体では見られないほど実りのある連携事業を数多く実施することができたと実感しています。例えば、地域と協働で行ってきた自然環境保全調査やフィールド調査では、町の自然に関する膨大なデータが蓄積されただけでなく、住民が地域資源を再発見するきっかけを作ることになりました。「福万来のヒメボタル」などは町の一大観光資源にまで成長しました。また、こういった本町の自然や文化を紹介するために養成していただいた観光ガイドは今も活躍しています。

このような成果が観光振興にとどまらず、生活環境の整備、教育・文化、医療・福祉、産業など様々な分野で挙げられましたのは、連携事業に熱心に関わっていただいた鳥取大学の皆さまのご尽力によるものと存じており、感謝いたします。

続いて忘れてはならないのが、本町の親切で開放的な町民の存在です。10年もの長きに渡って鳥取大学と良好な関係を育んでこられたのは、地域の皆さまが先生や学生を快く受け入れ、積極的にサポートして下さったからにほかなりません。地域の皆さまには引き続きご支援ご協力賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

本町は引き続き教育・研究のフィールドをご提供し、「知と実践の融合」を目指す鳥取大学の学術研究および人材育成に寄与すると共に、大学の持つ高度で専門的な知見を活用させていただき、地方創生に向けた連携事業に取り組んで参りたいと考えております。

最後に、本日に至るまで本町と鳥取大学との連携事業に関わり、ご支援、ご協力いただきましたすべての皆さまに改めてお礼申し上げます。

平成28年3月



WG会議座長あいさつ ～地方から時流をつくりましょう～

鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ座長／農学部 日置佳之

日南町・鳥取大学連携事業は、2006年（平成18）年3月に正式に開始されたので、2016年（平成28）3月で満10年を迎えました。この間、町民・町内事業者・町役場の方々と大学側の教員・事務方の積極的なご参加とご支援、さらには鳥取県の関係部局のご支援を得て、連携事業は質・量ともに充実してまいりました。2015年9月5日の連携事業・町づくり協議会10周年記念行事では増原日南町長からワーキング座長の私を表彰していただき、また、2月29日には豊島鳥取大学長からワーキンググループが表彰を受けました。いずれも個人の功績ではなく、参加して頂いた全員を代表しての受賞と感謝しております。



さて、これからどうするかです。現在、中央の政策として、地方創生の掛け声が盛んです。しかし、地方創生の内容は自分たちで考えなければなりません。そこがかつての政策とは異なるところでしょう。

歴史的に振り返ると、1960～70年代の拡大人工造林政策、1980後半～90年代のリゾート（総合保養地域整備）政策などは、地方に長期にわたる大きな影響を残しました。前者は、極めて画一的な政策メニューで、結果的に広大なスギ・ヒノキ人工林を生み出し、資源量増大といった正と、生物多様性減少といった負の両方の遺産を残しました。後者のリゾートは、さまざまなリゾートタイプの選択肢はあったものの、結果的には負債や不良インフラを残してしまい、「あの時、もう少しよく考えればよかった・・・」と悔やんだ地方自治体の方が多かったと思います。

一方、90年代初頭の時点では、少子高齢化、地球温暖化など今日最大の政策課題はまだほとんど影も形もありませんでした。

整理すると、1) 中央政府がその時々提唱する政策が正しいとは限らない、2) 客観的データ分析にもとづいた一定の未来予測・先取り政策化が必要である、ということになります。幸い地方創生は、上記の2つの政策事例とは異なって比較的自由度が高いので、地方側の創意工夫を活かせる余地はあると思います。

これから必要なことは、中央から流れてくる時流に乗ることではなく、地方初の時流をつくることです。そのために町に必要なのは、1) 人（ひと）、2) 技（わざ）、3) 資源（もの）です。そして、「ひと」と「わざ」は密接に結びついており、「技ありのひと」の率が高ければ、人口自体は増やせなくても少数精鋭での地域活性化も可能です。大学がこの10年間ある程度お役に立ててきたことは、技の開発や伝授と資源の発掘・評価・可視化でした。これらはこれからも続けて行きます。けれど、それだけでは時流をつくるどころまでは行かないように思います。ひと、わざ、ものを統合し、政策や事業を興していく「次の段階」への移行が次の10年では強く求められます。それは大学にとっても未知数で、最大の弱点でもあります。連携事業も困難な課題の解決を通して、さらに成長していきたいと思えます。

理事あいさつ ～連携協定締結 10 周年を迎えて～

鳥取大学は、平成 18 年 3 月に日南町と地域活性化教育センターに関する協定を締結して以来 10 年に亘り、医療・福祉、教育・文化、生活・環境、産業振興といった日南町の全方位の課題解決に向けた教育・研究活動を推進してきました。日南町から派遣いただいた歴代の職員を中心にした緊密なコミュニケーションに基づき地域課題を抽出し、町職員や住民の皆さんと大学教職員が協働して、にちなん町民大学、サマー・ウィンタースクール等の教育事業、福万来ヒメボタル、森林の F S C 認証、まめな水生産事業等の地域資源の発掘・活用、大宮地区住民の皆さんの生きがいつくり事業など多くの仕事に取り組むことができました。私自身は参画させていただいてから 3 年間という新参者ですので、井戸を掘っていただいた諸先輩方や共に取り組んでいただいた皆様のご尽力に敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。

奇しくも平成 18 年 12 月には教育基本法が改正され、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」という条項が新設されました。教育、研究、社会貢献が大学の使命とされる所以ですが、協定はこの改正の精神を先取りしていたといえます。

地方の国立大学は国立大学改革の嵐の中で、「人材育成や地域課題を解決する取組などを通じて地域に貢献する」ことがより一層強く求められています。その流れの中で「地(知)の拠点整備事業(COC)」や「地(知)の拠点大学による地方創生事業(COC+)」が事業化されて、日南町と鳥取大学が先鞭を着けた「日南町ワーキング」「持続的過疎社会形成プロジェクト」等の取り組みを時代が追いかけてきました。

目も眩むような変化の激しい時代にあって 10 年という歳月は一昔どころではなくなっています。少子高齢化が進展し遂に我が国全体が人口減少の時代に突入し、これから人類が経験したことのない急激な人口減少社会を迎えようとしています。多くの自治体が消滅の危機を指摘される中で必死の思いで地方創生に取り組んでいます。

日南町は両義的にそのフロントに立ち、役場が果たすべき使命は益々重いものになっています。増原町長のリーダーシップの基に、職員の皆さんが風通し良く結束して課題に真正面から立ち向かい、既成の概念にとらわれないしなやかな発想で創造的に解決していかれることを期待しています。鳥取大学は日南町の地方創生の疾走に伴走しながら、小さくともこと始め・こと起こしができる人材の育成と定着に努めます。

若者が「志を果たしに帰る故郷づくり」に共に励みましょう。



鳥取大学理事／副学長

法 橋 誠

平成 28 年 3 月

■□■ 学生達が地域で学ぶことの意味 ■□■□■

産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 部門長／地域学部 福田恵子

鳥取大学地域学部は、「地域学」という学際的な理論を構築し、地域の公共的な課題を環境、文化、教育および政策の4つの視点から教育・研究する学部です。設置から12年が経過し、近年、全国に地域学系の学部や学科が新たにできていますが、その一步先行く学部として成果が問われています。学部教育においては、地域に密着したフィールドワークを重視しています。特に2年次では「地域調査実習」(必修科目)が設定されており、一年間かけて調査を行い、調査・研究のスキルを身につけることはもちろんのこと、地域の環境や人々の暮らしを見つめ、課題を把握し、実際の生活に寄り添いながら課題解決に向かう姿勢を育てます。私と日南町とのつながりは、この科目から始まりました。2012年度から日南町大宮まちづくり協議会の皆様や地域の方々のお世話になり、調査研究を実施しています。それでは、学生達の調査をご紹介します。

2012年度は、高齢者の方々への身体測定と栄養状態の調査のほか、日々の楽しみをうかがいました。その結果、高齢者の身体能力や栄養状態は心の健康と関わっていることがわかりました。特に、この地域では80歳の男性のほとんどが自動車を運転されていますが、運転をあきらめることで楽しみが減少し、栄養状態も悪くなり、足腰も弱るといった悪循環に陥ることもわかりました。この調査結果を受けて、2013年度は、高齢者の方々の生き甲斐について聞き取り調査を行いました。そこでは、すでに生き甲斐をもつ気力もない方が少なくない現状が明らかとなりました。しかし、学生達に自身の人生について語り、若者の未来に夢を馳せることが楽しみや生き甲斐になりうることへの気づきが得られました。それ受け、2014年度と2015年度は、高齢者のもっておられる昔の生活文化や知識・スキル(地域資源)をうかがいながら映像として記録し、高齢者も学生も地域に貢献する喜びや達成感が得られる取り組みを行いました。

これらの一連の取り組みは、前年に調査経験のある3年生がサポートしています。学生にとっては継続して課題に取り組めるだけでなく、後輩をサポートすることで専門性も人間性も豊かに育っていきます。学生の中には、高齢者の生き甲斐調査から地域資源の記録のサポートを経て、卒業研究では日南小学校のご協力のもと、高齢者と子ども達が関わる「ふるさと学習」について取り組み、この4月から小学校教員として羽ばたく者も

います。このように、地域での学びは、身につけた学問上の専門性を社会の中で自らが生きることや自らを活かす力へと結びつけ、学内だけでは教育し得ない価値をもっています。これまでの学生教育へのご支援とご協力に心より感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導を賜りますようお願い申し上げます。



2012年度：高齢者の食と健康に関する調査
2013年度：高齢者の生き甲斐調査
2014・2015年度：消えゆく地域資源の記録
(ドキュメンタリー映像制作)



平成二十七年までの主な経緯

【平成 27 年度までの主な経緯】

【平成 16 年度】

- (1) H17. 2. 8 矢田日南町長、内田課長 鳥大訪問
- (2) 3. 23-24 岩崎理事外日南町訪問（情報交換会、にちなん環境林視察）

【平成 17 年度】

- (3) H17. 4. 21 本名農学部長、日置教授外日南町訪問、視察（県庁林政課同行）
- (4) H18. 2. 21 矢田日南町長、内田課長来学 学長、岩崎理事、林監事外訪問
- (5) 2. 28-3. 1 岩崎理事、林監事外 日南町訪問（意見交換会、町内小学校等視察、協定の調印式）

【平成 18 年度】

- (6) H18. 4. 20 第 1 回ワーキンググループ会議 ～H19. 3. 24 第 4 回WG会議
- (7) 7. 7 地域活性化教育研究センター開所式及び記念講演会（能勢学長講演）
- (8) H19. 3. 25 鳥取大学・日南町連携事業成果報告会（日南町役場交流ホールにて）

【平成 19 年度】

- (9) H19. 4. 1 鳥取大学社会貢献推進課における日南町職員の派遣研修（手嶋主事）
- (10) 4. 16 30 年後プロジェクト有識者会議
- (11) 4. 20 第 1 回WG会議 ～H20. 3. 2 第 3 回WG会議
- (12) H20. 3. 2 連携事業成果報告会（日南町生涯学習まちづくりフォーラム共催）

【平成 20 年度】

- (13) H20. 4. 1 鳥取大学社会貢献室における日南町職員の派遣研修（高橋主任）
- (14) 4. 19 30 年後プロジェクト有識者会議
- (15) 5. 8 第 1 回WG会議 ～H21. 2. 15 第 3 回WG会議
- (16) H21. 2. 15 連携事業成果報告会（日南町生涯学習まちづくりフォーラム共催）

【平成 21 年度】

- (17) H21. 4. 1 鳥取大学社会貢献室における日南町職員の派遣研修（荒金主事）
- (18) 6. 9 第 1 回WG会議 ～H22. 3. 12 第 3 回WG会議
- (19) 9. 9-11 明治大学「M-Navi プログラム」による日南町訪問
- (20) 9. 16 「日野郡フィールド実践による地域づくりセミナー」過疎プロジェクト報告会開催
- (21) H22. 1. 22 「大学連携によるまちづくり」能勢学長講演会／連携事業報告会
- (22) 2. 18-19 明治大学菊地ゼミによる日南町訪問・意見交換

【平成 22 年度】

- (23) H22. 4. 1 鳥取大学社会貢献室における日南町職員の派遣研修（荒金主事（2 年目））
- (24) 4. 19 第 1 回WG会議 ～H23. 3. 12 第 3 回WG会議
- (25) 9. 9 日南町議会による鳥大視察、研修会

- (26) 11. 24 日南町議会・教育委員会合同研修会
- (27) H23. 2. 1 明大・鳥大合同セミナー「日南町地域活性化への提言」
- (28) 3. 12 「地球温暖化と日南町の挑戦」中村名誉教授講演、連携事業報告会

【平成 23 年度】

- (29) H23. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（石倉主事）
- (30) 5. 6 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～12. 2 計 10 回開催
- (31) 6. 15 第 1 回WG会議 ～H24. 3. 3 第 3 回WG会議
- (32) 10. 24 日南町議会による鳥大視察、研修会
- (33) 11. 20-22 明治大学菊地准教授ゼミ生による日南町訪問・意見交換
- (34) H24. 3. 3 連携事業成果報告会（同日、日南町環境フォーラム開催）

【平成 24 年度】

- (35) H24. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（石倉主事（2 年目））
- (36) 4. 28 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～12. 8 計 10 回開催
- (37) 6. 8 第 1 回WG会議 ～H25. 3. 2 第 3 回WG会議
- (38) 8. 20 インターンシップ受入（～8. 31 のうち 10 日間）
- (39) 10. 24 日南町議会による鳥大視察、研修会
- (40) 11. 16 にちなん「農家楽」セミナー開催
- (41) H25. 1. 25 日南町自治協議会・自治会長会合同研修（乾燥地研究センター見学）
- (42) 3. 2 連携事業成果報告会（日南町総合文化センターにて）

【平成 25 年度】

- (43) H25. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（川上主事）
- (44) 5. 17 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～翌 26. 3 計 11 回開催
- (45) 6. 11 第 1 回WG会議 ～H26. 3. 9 第 3 回WG会議
- (46) 9. 9 インターンシップ受入（～9. 13 工学研究科 学院生 3 名）
～H25. 11. 11 報告会を開催（日南町役場にて）
- (47) 10. 2 日南町森林活用プロジェクト会議の立ち上げ
第 1 回日南町森林活用プロジェクト会議 ～H25. 12. 5 第 2 回会議
- (48) 11. 12 四町連携（日南、南部、大山、琴浦）合同企画
鳥取大学連携シンポジウムを開催（琴浦町にて）
- (49) H26 3. 9 連携事業成果報告会（日南町総合文化センターにて）

【平成 26 年度】

- (50) H27. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（川上主事（2 年目））
- (51) 5. 16 鳥取大学連携講座「にちなん町民大学」～翌 27. 3 計 12 回開催
- (52) 6. 1 鳥取大学知（地）の拠点整備事業シンポジウムを開催（増原町長出席）
- (53) 6. 10 第 1 回WG会議 ～H27. 2. 28 第 3 回WG会議
- (54) 7. 31 第 1 回日南町森林活用プロジェクト会議 ～H26. 11. 5 第 2 回会議
- (55) 9. 9 ハーブの利用に関する研究会が解散
- (56) 9. 29 オーダーメイド型インターンシップ開催（～10. 3 工学研究科 6 名）
～H26. 12. 1 報告会を開催（日南町役場にて）

- (57) 10.12 鳥取大学風紋祭に炊き込みご飯を出展（四町連携事業）
- (58) H28. 2. 9 4 タウンストーリーズ（地域の課題解決に取り組んだ学生たち）
研究展示会を開催（～2.26 鳥取大学広報センター）
- (59) 2.24 日南小学校にて高齢者疑似体験学習を開催（医学部山本教授）
- (60) 2.28 連携事業成果報告会（日南町総合文化センターにて）

【平成 27 年度】

- (61) H27. 4. 1 鳥取大学社会貢献課における日南町職員の派遣研修（古川主事）
- (62) 5. 9 学生が日南町での体験活動（「地（知）的好奇心育成のための早期体験学習」にて）
- (63) 6. 26 第 1 回WG会議 ～H28. 2. 27 第 3 回WG会議
- (64) 7. 17 古川派遣職員が鳥取大学との連携について講義（「地域学入門」にて）
- (64) 7. 15 とりりん・オッサンショウオ木製パネル贈呈式（鳥取大学広報センターにて）
- (65) 7. 15 増原町長が『「創造的過疎」のまちづくり』と題して講演（「公共政策論 I」にて）
- (66) 7. 30 放置財研究会が発足
- (67) 8. 20 子ども支援連絡会議を開催（計 3 回開催）
- (68) 9. 5 日南町まちづくり大会
～まち（むら）づくり協議会 10 周年・鳥取大学日南町連携協定 10 周年記念事業～
（日南町総合文化センターにて）
- (69) H28. 2. 27 連携事業報告会（日南町総合文化センターにて）
- (70) 2. 29 WG会議が学長表彰「地域貢献賞」を受賞

鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターに関する協定書

国立大学法人鳥取大学（以下「甲」という。）と日南町（以下「乙」という。）とは、甲と乙が共同で設置する地域活性化教育研究センターに関し、次のとおり協定する。

（設置）

第1条 教育研究活動を推進する施設として、鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター（以下「センター」という。）を設置する。

（目的）

第2条 センターは、乙の地域活性化に資する研究及び実践活動並びに甲の教育研究活動を行うことを目的とする。

（活動内容）

第3条 甲と乙は前条の目的を達成するため、相互に連携しながら、農林業の振興、自然環境の保全、都市との交流と住民の定住に関する研究及び実践活動を行うとともに、甲の学生のフィールドを活用した実践教育を行うものとする。

（センターの利用目的）

第4条 センターの利用目的は次のとおりとする。

- （1）甲の教員及び学生による研究及び実践活動並びに学生の教育
- （2）前号に掲げる活動に関連した普及啓発活動
- （3）第1号に掲げる活動のための宿泊
- （4）町民等との交流

（役割分担）

第5条 甲は、センターを利用した積極的な研究及び実践活動並びに教育に努めるものとする。

2 乙は、センターの設置場所を提供するとともに、研究及び実践活動並びに教育に対する支援に努めるものとする。

（費用の負担）

第6条 センターの維持管理に要する費用については、別途、甲と乙が協議して定めるものとする。

（協定の期間）

第7条 本協定の有効期間は、平成18年3月1日から平成19年3月31日までとする。

ただし、期間内に両者が異議の申立てを行わない場合は、1年ごとに期間が更新されるものとする。

（その他）

第8条 この協定書に定めるもののほか、必要な事項は、甲と乙が協議して定めるものとする。

上記のとおり協定した証として、この証書2通を作成し、両者記名押印の上、各自1通を保管する。

平成18年3月1日

甲 国立大学法人鳥取大学

学 長

能勢隆之



乙 鳥取県日野郡日南町

町 長

矢田 浩美





鳥取大学と日南町の協定



▶ 大学連携の経緯とねらい

(平成17年2月)

町長ほかが鳥取大学を訪問し、日南町との連携を要望。大学側が日南町を訪問し、町内視察や意見交換等を行った。

(平成18年3月)

県内の自治体として初めて大学との連携協定を締結。直面する課題解決に向けて、自治体と大学のパートナーシップに基づいた連携事業を行う。



「鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター」設置に関する協定締結 (H18.3 日南町役場)

▶ 鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターの設置

(平成18年4月)

廃校舎（旧大宮小学校・旧花口分校）を再利用し鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センターを設置。

鳥取大学スローガン → 「知と実践の融合」

「現場（フィールド）主義の実践」が可能に。



「地域活性化教育研究センター」開所式 (H18.7 花口)

連携事業ワーキンググループ会議

鳥取大学-日南町連携事業ワーキンググループ会議

▶ 行政ニーズと大学シーズのマッチングの場

(H18年4月)

「鳥取大学－日南町連携事業ワーキンググループ会議」を設立。

日南町が抱える諸課題の解決と、将来を見据えた学生教育と研究に対応するため、鳥取大学教職員と日南町職員及び県職員が参画し、連携事業の立案から協議検討、評価、意見交換などを行っている。（※座長に農学部の日置教授）

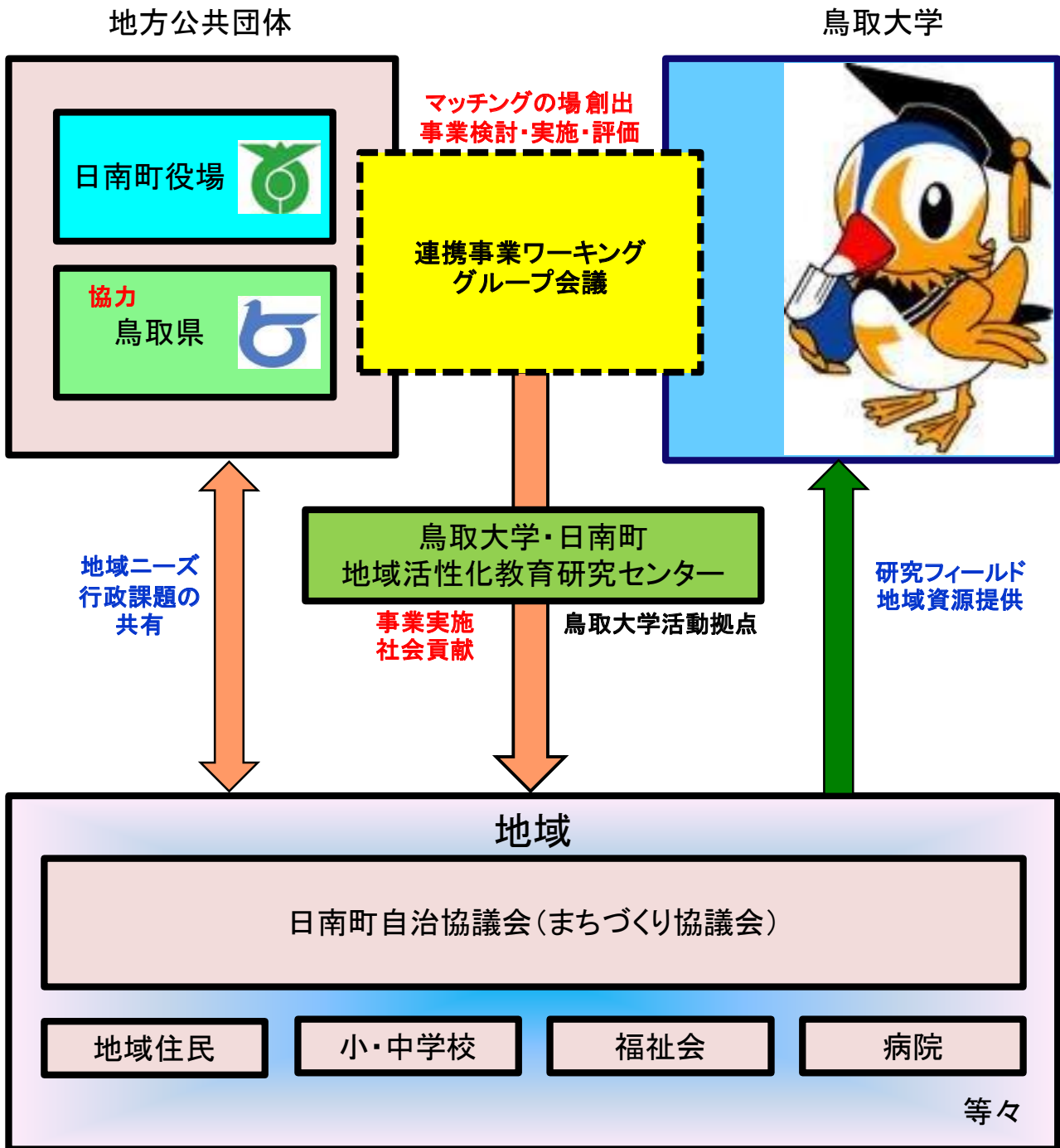
- ・第1回・・・該当年度の連携事業の内容やスケジュールの確認
- ・第2回・・・連携事業の進捗状況確認（中間報告）と新年度事業の立案
- ・第3回・・・連携事業の実績報告と評価及び新年度事業の確認

「鳥取大学と日南町の連携」を先進モデルとして県内でも産官学連携をスタートする動きが見られ、琴浦町（H21. 3）、南部町（H24. 4）、鳥取市（H24. 11）、鳥取県（H25. 1）、大山町（H26. 3）が鳥取大学との協定を締結。



「鳥取大学－日南町連携事業WG会議の様子」（H26. 6 日南町役場）

連携事業推進体制フロー



平成27年度 第1回 鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ会議 出席者

H27.6.2

所 属 ・ 職 名		氏 名
鳥取大学	理事(地域連携担当)・副学長	法 橋 誠
	農学部 附属フィールドサイエンスセンター 教授 (本会 座長)	日 置 佳 之
	大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 社会経営工学 教授	谷 本 圭 志
	地域学部 地域政策学科 公共政策学 准教授	筒 井 一 伸
	地域学部 地域環境学科 循環型環境学 准教授	寶 来 佐 和 子
	医学部附属病院 頭頸部診療科群(耳鼻咽喉科、頭頸部外科) 助教	藤 原 和 典
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命教授	山 内 有 明
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命講師	天 野 圭 子
	産学・地域連携推進機構 機構長(工学部付属地域安全工学センター センター長) (大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 土木工学 教授)	松 原 雄 平
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 産官学連携コーディネーター	奥 村 和 敬
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 副部門長 (大学院 医学研究科 機能再生医科学専攻 遺伝子再生医療学 准教授)	栗 政 明 弘
	研究・国際協力部 社会貢献課 課長	原 田 剛
	研究・国際協力部 社会貢献課 係長(鳥取県派遣職員)	喜 多 川 香
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員	森 田 将 悟
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員(智頭町派遣職員)	山 田 憲 昭
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員(鳥取銀行派遣職員)	入 江 洋 希
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員(南部町派遣職員)	赤 井 沙 樹
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(日南町派遣職員)	古 川 則 仁	
鳥取県西部総合事務所 日野振興センター	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 副局長 (日南町担当コンシェルジュ)	池 内 富 久
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 地域振興課 係長	金 子 聡
日南町	副町長	中 村 英 明
	福祉保健課 保健師	岩 佐 詩 織
	福祉保健課 保健師	松 本 朋 子
	教育課 学校教育室 室長	橋 本 康 雄
	教育課 図書館主任司書	福 田 範 子
	農林課 林政室 主任	鳥 山 圭 介
	住民課 住民生活室 主事	吉 田 博 一
	企画課 課長	木 下 順 久
	企画課 企画振興室 室長	浅 田 雅 史
	企画課 自治振興室 室長	出 口 真 理
	企画課 自治振興室 主事	山 中 さ ゆ り
	農林課 農政室 主事	田 辺 良 太

平成27年度 第2回 鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ会議 出席者

H27.12.3

所 属 ・ 職 名		氏 名
鳥取大学	理事(地域連携担当)・副学長	法 橋 誠
	農学部 附属フィールドサイエンスセンター 教授 (本会 座長)	日 置 佳 之
	農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 助教	片 野 洋 平
	大学院工学研究科 社会基盤工学専攻 社会経営工学 教授	谷 本 圭 志
	大学院工学研究科 情報エレクトロニクス専攻 知能情報工学 教授	菅 原 一 孔
	地域学部 地域政策学科 公共政策学 准教授	筒 井 一 伸
	地域学部 地域環境学科 循環型環境学 准教授	竇 来 佐 和 子
	国際交流センター 日本語・日本事情教育分野 講師	御 館 久 里 恵
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命教授	山 内 有 明
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命講師	天 野 圭 子
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 副部門長	清 水 克 彦
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 産官学連携コーディネーター	奥 村 和 敬
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 部門長 (医学部 医学科 感染制御学 ウィルス学 教授)	景 山 誠 二
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 副部門長 (大学院 医学研究科 機能再生医科学専攻 遺伝子再生医療学 准教授)	栗 政 明 弘
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 産官学連携コーディネーター	坂 下 誠 司
	研究・国際協力部 社会貢献課 課長	原 田 剛
	研究・国際協力部 社会貢献課 係長(鳥取県派遣職員)	喜 多 川 香
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員	森 田 将 悟
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(智頭町派遣職員)	山 田 憲 昭	
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(鳥取銀行派遣職員)	入 江 洋 希	
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(日南町派遣職員)	古 川 則 仁	
鳥取県西部総合事務所 日野振興センター	西部総合事務所 日野振興センター 所長	藤 本 好 正
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 副局長 (日南町担当コンシェルジュ)	池 内 富 久
鳥取県西部総合事務所	西部総合事務所 生活環境局 局長	松 本 康 右
	地域振興局西部振興課 係長	松 原 誠
	福祉保健局福祉企画課 係長	三 谷 鈴 子
	生活環境局環境・循環推進課 係長	山 本 浩 康
	町 長	増 原 聡
	福祉保健課 課長	梅 林 千 恵
	福祉保健課 保健師	岩 佐 詩 織
	福祉保健課 保健師	松 本 朋 子

日南町	教育課 学校教育室 室長	橋 本 康 雄
	農林課 林政室 主任	島 山 圭 介
	住民課 住民生活室 主事	吉 田 博 一
	農林課 農政室 主事	坪 倉 昂 平
	企画課 課長	木 下 順 久
	企画課 企画振興室 室長	浅 田 雅 史
	企画課 地方創生専門監	山 中 慎 一
	企画課 自治振興室 室長	出 口 真 理

平成27年度 第3回 鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ会議 出席者

H28.2.27

	所属・職名	氏名
鳥取大学	理事(地域連携担当)・副学長	法 橋 誠
	農学部 附属フィールドサイエンスセンター 教授 (本会 座長)	日 置 佳 之
	農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 助教	片 野 洋 平
	農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 助教	芳 賀 大 地
	地域学部 地域環境学科 共生型環境学 教授	永 松 大
	地域学部 地域環境学科 循環型環境学 准教授	寶 來 佐 和 子
	医学部 保健学科 看護学専攻 成人・老人看護学 教授	山 本 美 輪
	地(知)の拠点整備(COC)推進室 特命講師	天 野 圭 子
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 部門長 (地域学部 地域教育学科 教授)	福 田 恵 子
	産学・地域連携推進機構 地域貢献・生涯学習部門 産官学連携コーディネーター	奥 村 和 敬
	産学・地域連携推進機構 米子地区地域連携部門 産官学連携コーディネーター	坂 下 誠 司
	研究・国際協力部 社会貢献課 課長	原 田 剛
	研究・国際協力部 社会貢献課 係長(鳥取県派遣職員)	喜 多 川 香
	研究・国際協力部 社会貢献課 課員	森 田 将 吾
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(南部町派遣職員)	赤 井 沙 樹	
研究・国際協力部 社会貢献課 課員(日南町派遣職員)	古 川 則 仁	
鳥取県西部総合事務所 日野振興センター	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 副局長 (日南町担当コンシェルジュ)	池 内 富 久
	西部総合事務所 日野振興センター 日野振興局 係長	金 子 聡
日南町	町 長	増 原 聡
	副町長	中 村 英 明
	総務課長	高 見 正 司
	住民課長	久 城 隆 敏
	福祉保健課 主任保健師	長 谷 川 照 子
	福祉保健課 保健師	岩 佐 詩 織
	福祉保健課 保健師	松 本 朋 子
	教育課 学校教育室 室長	橋 本 康 雄
	住民課 住民生活室 主事	吉 田 博 一
	農林課 農政室 主事	坪 倉 昂 平
	企画課 課長	木 下 順 久
	企画課 企画振興室 室長	浅 田 雅 史
企画課 自治振興室 室長	出 口 真 理	

平成二十七年 度連携事業

コミュニティ力向上に向けたワークショップスキームの開発・・・ 17
地域学部 准教授 筒井一伸、教授 福田恵子、准教授 関耕二

「にちなんふる里まつり」に連携する出前科学実験教室 2014・・・ 32
医学部准教授 中本幸子

鳥取大学・日南町連携講座「にちなん町民大学」・・・ 38
日南町教育委員会

国際理解講座「外国の文化に触れよう」・・・ 39
国際交流センター講師 御館久里恵

地（知）的好奇心育成のための早期体験学習・・・ 40
地（知）の拠点整備推進室講師 天野圭子
産学・地域連携推進機構准教授 清水克彦

日南小・中学校「サマー・ウィンタースクール」・・・ 41
日南町教育委員会

コミュニティ力向上に向けたワークショップスキームの開発

■連携する自治体等

鳥取県日野郡日南町・大宮まちづくり協議会

■実施組織

地域学部地域政策学科 准教授 筒井一伸

(農村地理学・地域経済論／まちづくり協議会(新しいコミュニティ)のあり方検討)

地域学部地域教育学科 教授 福田恵子

(生活科学・家庭科教育学／女性・子供の住民活動の把握)

地域学部地域教育学科 准教授 関 耕二

(健康科学・体育教育学男性・子供の住民活動の把握)

I 事業概要

日南町では旧村(旧中学校区)ごとに「まちづくり協議会」の設立が2005年より進められ、新たなコミュニティのかたちを模索してきた。しかし10年が経ち、住民の高齢化の進行と減少により活動内容やそれを支える体制などを再検討する時期に入ってきている。また、まちづくり協議会と既存の住民活動との関係の新しいあり方も検討をする必要が出てきている。

全国的には総務省を中心に集落の地区力点検技法の開発が進められてきた一方で、コミュニティ内にある住民活動を有機的に結び付けて把握するスキームは十分には議論されてこなかった。本プロジェクトでは体育委員など男性中心の活動と、ボランティア給食など女性中心の活動の実態、また子供を介した住民活動を把握するとともに、それを有機的に結びつけるまちづくり協議会のあり方をワークショップの手法を用いて検討をする。

II 農山村再生における大学と地域の連携

(1) 農山村再生に向けた地域づくり

農山村における地域づくりのフレームワークとして一般化したものが図1であり3つの局面があるとする(小田切, 2004)。第1の局面は「参加の場づくり」であり、地域づくりは地域住民の参加によって成り立つことが前提としてあるが、住民参加は何もしないと生まれない。そのため地域に参加の「場」を意識的にセットする必要がある。第2の局面は「暮らしのものさしづくり」であり、地域に住み続けることを支える価値観が必要であることが前提としてあるが、現実には都市的な画一的価値観が支配をしている。そのため、地域住民独自の価値尺度の形成を促す必要がある。第3の局面は「カネとその循環づくり」であり、経済面の振興だけを強調するのは不適當であることが前提であるが、経済面の活動の重要性は存在している。そのため、地域資源の利活用した経済循環を生み出す必要がある。

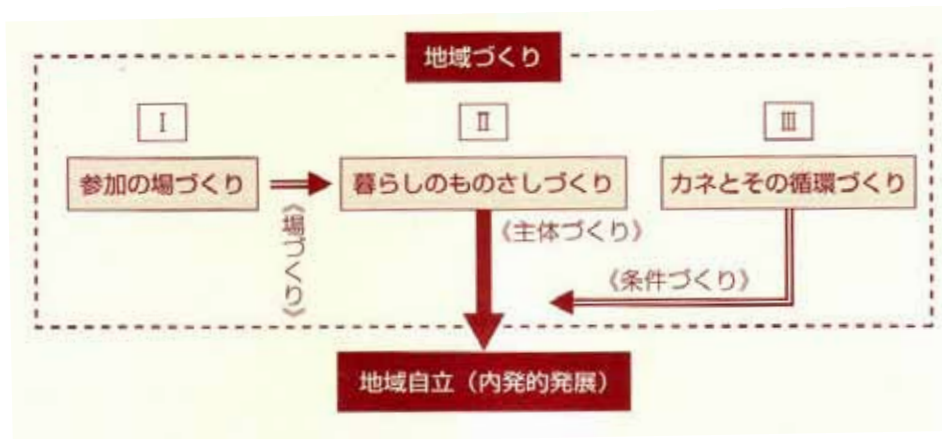


図1 地域づくりの3つの局面
(小田切, 2004, 298 頁より転載)

この3つの局面のうち、住民参加を促すことと、地域に対する住民独自の価値尺度の形成が、コミュニティ力に結びつくと考えられ、その“仕掛け”としてワークショップが注目されている。ワークショップとは創造的な話し合いの場であり、「構成員が水平的な関係のもとに経験や意見、情報を分かち合い身体の動きを伴った作業を積み重ねる過程において、集団の相互作用による主体の意識化がされ、目標に向かって集団で創造していく方法(木下, 2007)」である。

(2) 大学と地域の連携の形

中塚・内平(2014)は「大学の専門性」と「地域の当事者意識」を軸に教員中心による大学と地域の連携のあり方(図2)と学生中心による大学と地域との連携あり方(図3)を整理している。

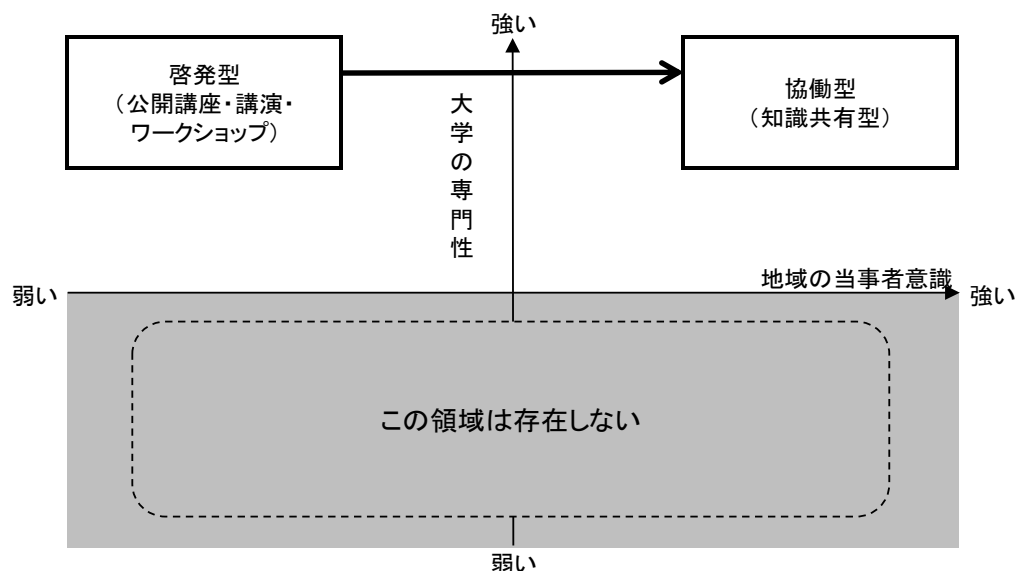


図2 教員中心の地域・大学連携
(中塚・内平, 2014, 58 頁より転載)

教員中心による大学と地域の連携の場合、研究者という特性から高度な専門性をもつての地域との連携となるため「大学の専門性」という縦方向の展開はない。それに対して横軸の地域の当事者意識、つまり地域づくりの段階に応じた水平方向の展開はみられ、たとえば「啓発型

(公開講座・講演・ワークショップ)」から「協働型（知識共有型）」へ展開などがある。

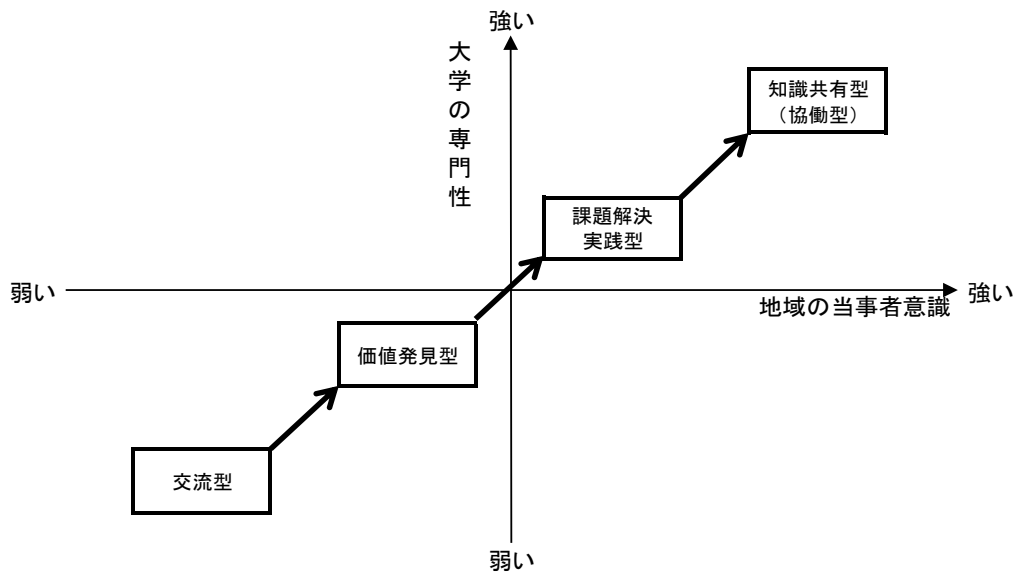


図3 学生中心の地域・大学連携
(中塚・内平, 2014, 58 頁より転載)

これに対して学生中心による大学と地域の連携の場合、1 年次生をはじめとする各専門分野の初学者は専門性が低く、一方で大学院生などになると一定水準の専門性を有するなど、縦軸にあたる大学の専門性において多様性が見られる。また地域づくりの段階(地域の当事者意識)においてもさまざまであり、これらを複合して専門性が低く、また地域づくりの初期段階で有効な「交流型」から「価値発見型」、「課題解決実践型」、そして教員(研究者)に近い大学院生等を想定した高い専門性を持った連携「知識共有型(協働型)」にいたる展開モデルを提示している。ここで重要なのは地域づくりの段階を見極めながら、連携する形態を意識的に選択することである。

(3) 学生中心の大学と地域の連携とワークショップの位置づけ

さて学生中心の大学と地域との連携(図3)において、左下から右上に展開していくための“力”が必要である。それを模式化したものが図4であり、展開のベクトルを水平方向のベクトルと垂直方向のベクトルに分解をして考えてみる。

まず発揮される「大学の専門性」を垂直方向に引っ張り上げる“力”は、住民の「地域づくり」への関心、つまり地域の総合戦略であり、それが強められていくことで垂直方向への展開が生まれる。これに対して水平方向の住民の「地域づくり」への関心(地域の当事者意識)を引き出す“力”は大学側が提供するものであるが、そのかかわる学生の特性によって用いられる専門性は異なる。

まず交流型から価値発見型へ展開する際の水平方向の“力”として大学が提供する専門性に「住民の「地域づくり」への関心を引き出す大学の専門性=ワークショップ技術」が挙げられる。前述のとおり、農山村再生に向かう地域づくりの三要素のひとつに「参加の場づくり」があり、小田切のいう農山村再生のスタートラインでもあり、また住民参加という極めて重要な要素と結びつくものである。

価値発見型から課題解決実践型に展開する際の水平方向の“力”として大学が提供する専門

性には、ワークショップ技術に加えて科学的根拠を与える大学の専門性＝学生の普遍的スキル・知識が挙げられる。既存の学問分野では科学的根拠を得るための調査や実験のスキルを身に付けことが求められる。しかしながら、地域づくりにおける参加の場は絶えることなくあり続ける必要があることから、このような調査や実験のスキルとワークショップ技術が併用されることが必要である。そして課題解決実践型から知識共有型（協働型）への展開には、これまでのワークショップスキルや学生の普遍的スキル・知識に加えて、研究を行うための高度なスキルや知識が求められ、学部学生ではなく大学院生や必要に応じて教員（研究者）がかかわることによって、この展開がなされる。

模式的にはこのように提示できるが、大学が連携することで住民が「地域づくり」に継続して関心を持ってもらう必要があり、その根底にあるのがワークショップである。

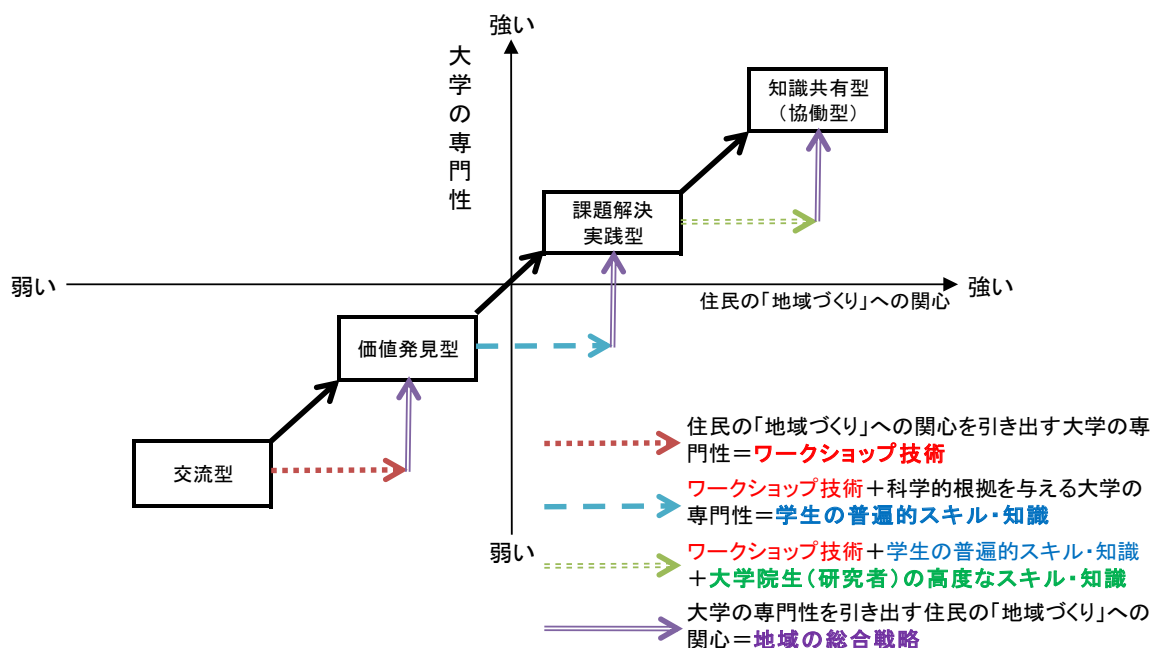


図4 学生中心の地域・大学連携に求められる大学の専門性
(筒井作成)

(4) 学生と地域の協働によるワークショップスキーム

図4に挙げた展開を行うために図5のようなワークショップスキームを開発した。このスキームは学生が持つ「ワークショップ技術」という専門性（図5で枠付きのもの）と、地域住民の地域づくりへの関心、その双方を向上をさせるために学生と地域との協働を目指したものであり、学生の地域づくりにおける位置づけをワークショップ技術という専門性とヨソモノという特性から明確にしたものである。

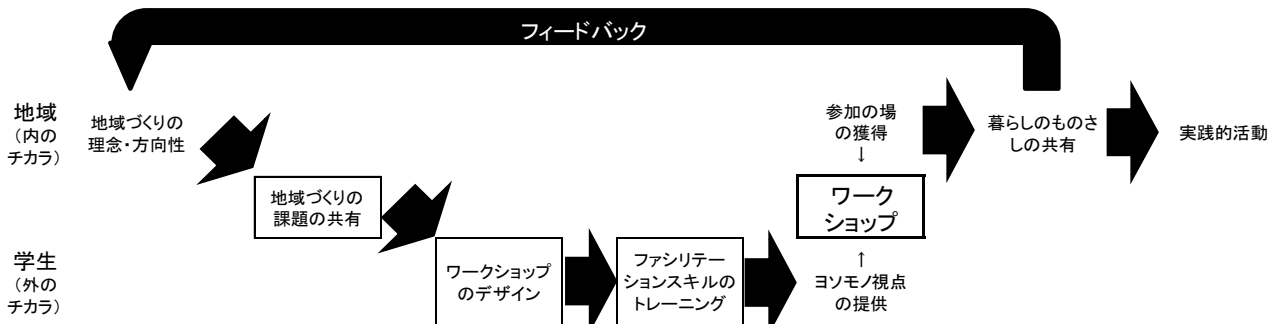


図5 学生と地域の協働によるワークショップスキーム
(筒井作成)

Ⅲ ワークショップスキームを用いた実践 (1)

—インターネットを使って、大宮地区を世界の人にアピールしよう！—

(1) 目的

大宮のアピールしたいポイントを改めてみんなで考え、今ある資料を踏まえながら整理する。

(2) ワークショップについて

まず、前半 25 分で大宮のアピールしたいことを参加者の方に考えてもらう。そして、後半 60 分で過去の資料も用いながらアピール内容を考える。

1) 概要

<実施期日>2015年9月28日(月)19:00~21:00

<参加者>大宮を盛り上げたいと考える方たち(50代2人,40代1人,20代1人)4名

<実施場所>鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター(大宮地域振興センター/旧大宮小学校)

<準備物>ポストイット(赤・青),ペン,ネームフォルダー,模造紙2枚,ホワイトボード,プロジェクター,テープ,マグネット,大宮に関する記事が載っている資料(DVD,観光マップ,冊子,本など),お菓子,ジュース,ぬいぐるみ(大宮のこと知らない星人)

2) 活動内容

19:00 開始

○自己紹介:自己紹介のときに,初めて大宮に来た大宮のこと知らない星人が誰であってほしいか?(大宮にどういう人が来て欲しいか)という質問に答えていただき,4つの回答を模造紙に記入した。

○ワークショップの説明:これからするワークショップの流れとワークショップを行なう目的を簡単に説明する。

19:20 前半開始

○参加者の方にそれぞれ挙げてもらった“大宮に来て欲しい人”が仮に大宮にきた場合,その人に知ってもらいたい大宮の魅力をそれぞれ考えてもらい,青のポストイットに記入してもらう。

○何故,この魅力を知ってもらいたいのかを一人一人発表してもらう。

上記の内容で,4回同じことを行なった。

19:50－休憩（10 分間）－

20:00 後半開始

- 現在すでに存在している大宮に関する記事が載っている資料（DVD、本、大宮地区の冊子、観光マップなど）の紹介し、参加者の方が持ってこられた資料の紹介もしていただいた。
- “大宮に来て欲しい人”が大宮を訪れるためには、現存のどの資料を使うのが効果的かをそれぞれ考えてもらった。
- “大宮に来て欲しい人”が大宮を訪れるために、今足りないこと、伝えられていない情報は何かを考えてもらった。

20:45 まとめ

- ワークショップの振り返りを簡単に行い、成果発表の概要の説明を行なう

21:00 終了。そのあと少し雑談と写真撮影など…

3) ワークショップの結果・考察結果

ワークショップの参加者それぞれに、どのような人が大宮に来て欲しいかを挙げてもらった。

<大宮に来て欲しい人>

- ①50代の元気がない人
- ②大宮のことが好きになりそうな素直な子
- ③農業好きの若い女性
- ④定住してくれる人

上記の4つを、大宮をアピールする際の“対象者”とし、下記の3つについてそれぞれ話し合ってもらった。

<話し合う内容>

- I 大宮のアピールしたいところは何か、
- II アピールする際に使えるような現存の資料はどれか、
- III アピールする際に足りない情報、これから必要な情報は何か

ワークショップで話し合った内容を、それぞれ対象者別に、紹介していく。

①50代の元気がない人

<考察>

「50代の元気がない人」に来て欲しいという意見を出したワークショップ参加者は、意見と同じ50代の男性であった。彼は、「仲間が欲しい」というように述べていたことから、大宮には彼と同じような年代の人数が少ないのではないかと考えた。また、観光地を目的に大宮地区に来て欲しいというよりは、ふらっと大宮に来て欲しいという意見が出たこと、さらに「II 使えるような現存の資料」の中にも、「自然」に関するものが多かったことから、観光地としてではない「ありのままの大宮」を感じて欲しいという気持ちを強く持っているのではないかと感じた。

さらに、驚いたことは元気が“ない”人に来て欲しいという意見についてだ。私たちの感覚では、大宮のように人口が減ってきている地区に住む人は、元気が“ある”人に来て欲しいのではないかと考えがちだが、実際は全く逆であった。“ヨソモノ”の価値観で考えてはいけないということを実感した。

②大宮のことを好きになってくれそうな素直な子

<考察>

「大宮のことが好きになるような素直な子」について話し合っている参加者の様子から、誰でもいいから大宮に来て欲しいというわけではなく、純粋に大宮っていいなあって思ってくれる人に来て欲しいと考えているような印象を受けた。

また、大宮の住民のあたたかさに触れて欲しいという意見が出た。これは、ただ大宮を訪れるだけでは感じる事が出来ないだろう。そのため、大宮を訪れた人が大宮に住む人と触れ合う機会を設けなければならず、その方法が今後の課題になると考えた。

③農業好きの若い女性

<考察>

農業をする女性に来て欲しいという意見が挙げられたことから、現在大宮にはそのような女性が少ない、もしくは存在しないのではないかと考える。ワークショップの中でもよく名前が挙げられていた「ファームイング」は、参加者の方の意見を聞く限りだと、気軽に農業体験できるような場所という印象を持っていたが、実際に訪れて話を聞いてみると、今いる従業員だけでも仕事の手一杯で外部者の対応を快く思っていない様子だった。また、「かつみや」は以前から農業体験を受け入れているが、店主が単独で進め、町との連携があまり上手くいっていないのご意見も聞いた。このような「ファームイング」「かつみや」の例より、1つ1つの施設の連携が上手くいっていないのではないかと感じた。

④定住してくれる人

<考察>

定住を考えている人は、より詳しい大宮での生活の様子を知る必要がある。そこで、等身大の大宮での生活がわかる動画または映画を作ろうという意見が出た。それに付け加えて、私たちが考えたこれから増やしていきたい情報は、公共施設（病院や学校など）に行くまでの距離と手段と時間がわかるようなマップの作成や、自給自足の生活に憧れを持つ人への理想と現実のギャップを埋める事が出来るような情報（家、畑、移動手段など）の発信が必要なのではないかと考えた。

<ワークショップを終えて 全体の考察>

それぞれの対象者に向けて、アピールしたい大宮の魅力にはどれをとっても、「自然」というキーワードが出てきた印象があった。しかし、アピールしたい相手によって、その自然の活用方法が少しずつ異なってきたと感じた。例えば、①50代の元気がない人だと、大宮の自然を感じて欲しいというように対象者の心を癒すような役割で自然をアピールしたいと言っているが、④定住してくれる人に対しては、自然の中で遊べること、自然を使えば生きるうえで必要な物は何でも作れることなど、実際に触れて楽しむことも出来るということを実践したいと言っていた。このことから、大宮のアピールしたいポイントの根底には、「自然」というキーワードが重要であるが、アピールしたい対象者によってその自然のアピール方法は変わってくると考えた。

また、ワークショップの参加者の中には映像関係の職業に就いておられる方が多く、動画を使ってアピールしたいという意見が多かった。さらに、参加者の中には写真を撮ることが好きな人や過去にイベントのポスターのデザインを考えたことがある人がおられたことから、アピ

ールをする上でその経験を上手く活用すればより良いものが出来てくると感じた。

また、大宮には聖滝やいんがほうきょういんとうなど、すでにパンフレットなどで紹介されている観光地がある。私たち、学生はそれらの名前が必ず出るという風に予測していたが、実際ワークショップの中でそれらの名前が出ることがなかったことがなく、とても驚いた。観光地として推しているところと地元住民との意識の違いを強く感じた。

IV ワークショップスキームを用いた実践（2）—大宮 Times 若者編集部—

（1）お題

大宮まちづくり協議会 10 年の成果と課題を振り返り、今後の大宮地区の戦略を考えるに当たって、何をポイントとしていくかをあぶり出すワークショップ。

（2）目的

大宮地区の若者の皆さんと一緒に、まちづくり協議会 10 年の成果と課題を、参加者の 10 年のうちの大宮地区での思い出と共に振り返る。また、学生たちが大宮地区で行ったむらおこし論の 10 年の活動内容と成果もクイズ形式で紹介する。

それらの要素を踏まえた上で、若者の皆さんの目線で大宮地区の今後の戦略となり得るポイント（場所、イベント等）をあぶり出してもらうことを主な目的とする。その後、学生たちがポイントとしてあぶり出された場所に足を運び、今度は学生の目線で良いと思った点や活かし方を考える。

そして、これら全てをまとめて地域の皆さんにも伝えることが出来るように、地元密着型新聞「We Love 大宮 Times」を作成し、成果物とすることで皆さんに配布することとする。

（2）ワークショップについて

1) ワークショップの手法

地図上体験ゲームとして、大宮地区の地図上に参加者がそれぞれ持っている大宮地区に関する情報を地図に記して、ワークショップの参加者同士で共有していくゲーム。今回はより情報の位置関係を共有し易くするために、およそ、縦 1.5 メートル、横 3 メートルほどの地図を用意した。

2) 概要

＜実施期間＞9 月 27 日午後 14:30~17:00 2 時間 30 分のワークショップ

＜参加者＞まちづくりに関心のある 若者(30~40 代)3 名

＜実施場所＞鳥取大学日南町地域活性化教育研究センター(大宮地域振興センター/大宮小学校)

＜準備物＞・スケッチブック(クイズ用)・シール 4 色(地図に貼る印用)・カメラ(まち歩き撮影用)・模造紙(地図貼り付け用)・テープ(模造紙貼り付け用)・大宮地区の地図(WS で使う)・ペン(統一色を 2・3 本)・ポストイット(メモ用)・机・ネームホルダー・おかし・飲み物・座布団

3) 活動内容

14:30~開始：挨拶

○自己紹介 名前・出身地・年齢（実年齢ではなく、気持ちは何歳ですか？）（7 分）

○テーマ・目的の説明・今日の流れ (3分)

話し合い開始:

14:40～①参加者に大宮地区内での10年の思い出や遊んだ場所、好きな所を思い出しながら、それぞれでポストイット(青)に書き出してもらった後に、みんなで共有する。

15:00～②拡大した大宮地区の地図上(写真1)(以下『地図上』)に、上記のポストイットを貼り付けてもらい、位置関係を把握する。

15:10～③大宮まちづくり協議会が発行している地域誌「おおみや」を3か月分用意して、1か月ごとにその月の一番良い、一番好きと思ったNo.1の記事を選んでもらう。

15:30～④学生側からも気になる記事を取り上げ、その記事について、参加者に質問するなど、大宮まちづくり協議会の10年について、みんなで掘り下げる。

15:40～⑤取り上げた記事をポストイット(緑)に書き込み、催された場所を地図上で確認して、ポストイットを貼り付ける。

15:45～(休憩)

16:00～⑥学生が作成した三択クイズ「むらおこし論10年の軌跡」を、参加者に出題して10年間むらおこし論で行われてきた取り組みを知ってもらう。ここでは参加者が楽しく参加できるように親しみ易さを持たせたクイズにした。

⑦地図上でむらおこし論に関わった場所を確認する。

※地図上には、予めむらおこし論に関わった場所に赤色で書き込みを行っている。

16:00～⑧②,⑤,⑦で出てきた場所以外で、気になる場所を考えてポストイット(黄)に書き込み、地図上に貼り付ける。

16:30～⑨今までに挙げられた場所を参考にして、今後の大宮地区の戦略のポイントとなり得る場所を考える。

16:45～⑩参加者一人ひとりに、今後活かしたい大宮のポイントをそれぞれ考えて「〇〇宣言」として画用紙に書き込んで発表してもらう。

17:00⑪話し合い終了・写真撮影

4) 結果

今回のワークショップでは今後の大宮地区の戦略を考えるに当たって、過去10年間の大宮の動きを以下の3項目に分けて振り返った。

①参加者の過去10年間のうちにあった大宮での思い出。

②大宮まちづくり協議会が刊行する地域誌「おおみや」から見る10年。

③むらおこし論の成果から見る10年。

その後、今後の大宮地区の戦略のポイントとなり得る場所を取り上げ、「〇〇宣言」として活性化策を発表してもらうという流れになった。

①参加者の過去10年の中にあつた大宮での思い出

まず、3名の過去10年の中にあつた大宮での思い出を振り返ってもらった。思い出をそれぞれポストイット(青)に書き込んでもらい、全員で共有した後、あらかじめ用意しておいた大宮地区の拡大写真に、書き込んだポストイットを場所ごとに貼り付けた。

思い出の内容は、「里山まつり」「大宮十五夜」といった年に一度のイベントや、「小学校の廃校・閉校式」といった特殊な出来事も挙げられた。

「里山まつり」は、ダムまつりとも呼ばれており、現在こそ規模が縮小してしまったものの、以前は菅沢ダムを管理する国土交通省と大宮まちづくり協議会が協力してまつりを開催していたという。その頃は、お客さんも多く、企画も多かった。賑やかだった頃がとても印象に残っているという。

「大宮十五夜」は、お盆に帰省した人との忘年会のような雰囲気だという。屋台の準備は毎年似たような顔ぶれで行っている。

「小学校の廃校・閉校式」は、2006年に小学校の統合により大宮小学校が廃校になった時を指す。体育館で歴代OBと共に閉校式を行った。参加者の3名も通っていた小学校だったため、とても感慨深いものがあったという。

②大宮町づくり協議会が刊行する地域誌「おおみや」から見る10年

大宮まちづくり協議会が2ヶ月に一回発行している地域誌「おおみや」を基に、町づくり協議会の10年を振り返った。10年分全てを振り返ることは難しいので、学生が予め厳選しておいた3冊のみをピックアップして、記事を読み込んだ。その際1冊ごとに、NO.1の記事を決めてもらった。

【収穫祭】

大宮地区の運動会の後に行われる催しで、大宮で収穫した農作物を料理してみんなで食べるといったようなもの。運動会後の打ち上げのようにになっているが、今でも毎年行っている。

【ダムまつり】

里山まつりのことであるが、主に国交省と協力して行っていた時期のことで、ダムの見学会やダム内を遊覧船が運航するといったように、ダムに関わる企画が多く取り入れられていた。このころがお客さんの数もピークだったようで、今は徐々に減少している。企画の数も減っているとのこと。

【グランドゴルフ大会】

普音寺が主催のグランドゴルフ大会で、毎年行われている。優勝者には商品が出るなどなかなか本格的である。

以前はゲートボールが流行っていたが、個人で練習がしやすいグランドゴルフが現在では主流となった。年齢層は70～80代と高めである。

以上の3つが各冊子でNo.1になった記事の内容で、その他に気になった記事として「1人で住んでおられる家が多い」「空き家が増えている」といったものも挙げられた。

③むらおこし論の成果から見る10年

むらおこし論の報告書をもとに、三択クイズ「むらおこし論10年の軌跡」を作成し、クイズ形式で参加者の方とむらおこし論で学生が行ってきた活動を振り返った。

それぞれが1～3の回答札を持ち、全員が参加しやすい形態にしたことで皆が楽しみながら振り返りをすることが出来た。

5) まとめ

①②③で過去の10年を振り返りながら気になる場所をあぶり出してきたが、最後に今まで出てきた場所以外で気になる場所を考えてもらい、ポストイット(黄)に書き出してもらった。

出てきた個所を以下のように箇条書きに示した。

- ・米・トマト→食を使って何かできないか・・・
- ・聖滝の周辺→紅葉がきれい
- ・つり橋からの釣り→大宮にはつり橋があり、そこから釣りをする人が多い
- ・オオサンショウウオ→天然記念物であり、地域の人にはたまに見る
- ・大宮ダム→ダム周辺の紅葉がきれい、釣りスポットもある
- ・印賀川周辺→印賀川は水がとてもきれい
- ・そば処清水屋→おいしいそばを食べることができる

V ワークショップスキームを用いた実践 (3) —大宮まちづくりクリニック—

(1) 目的

大宮で暮らす女性たちのまちづくりへの意識を共有、参加を促進するために、女性ならではの視点でまちづくりの課題解決方法や参加の仕方を考える。

(2) ワークショップ

1) 概要

<実施期日>2015年9月29日(火) 19:00-21:15

<参加者>まちづくりに関心のある女性4名

<実施場所>鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター(大宮地域振興センター/旧大宮小学校)

<準備物>模造紙, ポストイット(2色以上), カラーペン, カメラ, 時計, 名札, セロハンテープ, お菓子, 飲み物, 机, 椅子, 養生テープ

2) 活動内容

19:00 (1)挨拶・WSの流れ説明

19:10 (2)自己紹介・アイスブレイク

自己紹介の際、アイスブレイクも兼ねて名前・出身地(生まれと育ち)・得意料理・好きな芸能人(異性)も話していただいた。

19:30 (3)井戸端会議式WS

まず大宮に住む住民として外部の人間に紹介したい大宮のまちづくりを挙げていただき、その中で自分たちが今後特に注目してほしいという取り組みを3つ指定していただいた。それぞれの取り組みに対する疑問点や足りないと思うものを考えてもらった上でポストイットに記入、張り出していただいた。1つの取り組みの課題の中で一番深刻だと思われるものを選んでいただいた。

20:05 休憩

休憩中に模造紙を黒板に貼り付け、次のWSへの準備としてそれぞれの取り組みに対して病名をつけ、課題をその症状とした。

20:15 (4)シミュレーション式WS

「女性ならではの」の議論を引き出すために、それぞれの取り組みの課題点(病名と症状)に対する処方箋を考えるという意味で「大宮病院ナースステーション ～ナースたちよ、急患を救え!～」という題目のシミュレーション式WSを行った。(3)で挙げたまちづ

くりの取り組みとその課題について、取り組みの現状に対して病名をつけ、課題点を症状とした。) 取り組みに対しての課題解決方法と、参加の仕方を議論していただいた。

21:15 終了

3) WS 結果と考察

<井戸端会議式 WS>

今回の WS の参加者は全員女性であった。女性は積極的に意見を述べてもらうより、話の中で意見が述べられることが多いと考えたため、井戸端会議式 WS を心がけた。まず大宮地区外の人々に紹介したいまちづくりの取り組みを挙げていただき、その中で特に注目して欲しい取り組みを 3 つに絞っていただいた。その後、それぞれの取り組みに対して不足している物事や疑問点などを挙げていただき、その中で優先して解決すべき課題を 1 つずつ決めていただいた。

表 1 外部の人に紹介したい大宮まちづくりの取り組み

まちづくり協議会の活動	まちづくり協議会以外の活動
ふるさとだより (発信)	十五夜盆祭り
防災部	のどか
危険箇所点検	もちっ子クラブ
啓発ポスター作り	つくし工房
ノルディックウォーク	伝説の絵本
炭焼き	かつみや
	消防団
	給食ボランティア

・ のどか：ルバーブジャムやこん

にやくなどを作っている団体

- ・ もちっ子クラブ：お祭りなどで餅を作る団体
- ・ ピザ窯：オーナー制度，誰でも使って良いと聞く
- ・ 里山まつり：かつて古民家「かつみや」やダムとコラボレーションしていたが，最近は規模縮小，方向性が変わった（ダムの工事で立ち入りできない等の関係で）

表 2 特に注目してほしい取り組み/その取り組みに足りないものと課題

注目してほしい取り組み	足りないもの/疑問点	課題
里山まつり	地域外への宣伝	コンセプトが不明確
	もっと展示	
	もっと販売	
	語り部減少	
	文化祭みたい	
ピザ窯	周囲の整備	使い方の体系化
	食べるスペース	
	講習会（窯の焚き方）	
	窯以外の使われ方	

	外から来てもらうには？	
	他の活動も宣伝できるのでは？	
	特産品（トマトなど）を活かす	
たたら	啓発	地元の人の知識
	看板などもっと説明を	
	他のたたら関連施設とつなぐ	

【各取り組みに対する意見】

<里山まつり>

以前は外向きのイベントで、ダムとのコラボ開催などでよく賑わっていたが、まつり実行委員会の総務が内向きのイベントにしようと言いだした流れから規模縮小が進んでいる。ダムでやらなくても他にいいイベントはたくさんあるので、せっかく2日間するのならもっと賑やかでもいいのではないかな。今では住民が作ったものを展示、販売（作品、野菜など）しているくらいで、村の文化祭的な要素が多くなっているから、果たして内輪だけのものにしてもいいのだろうかとは思っている。外部の人でも野菜とかを買い求める人はいる。夫に駆り出されて、「これ売って」と言われたこともある。まつりを今後どうしていきたいのかというコンセプトが不明確。

<ピザ窯>

基本的に休みの日しか使わないのに、みんなで何か作ろうという会は2ヶ月に1回くらいしかない。窯の近くにイタリアンカフェ、オープンカフェ等オシャレなものを作ればいいのでは。誰かが主体になって積極的に窯を使っているわけでもないから、外部の人に対して誰が窯の存在をアピールするのかが不明確。会員制（窯作成に出資した人が使える）のようになっているので、みんなが気軽に使いづらい。外部の人へ説明する人がいないと、初めての人がやっても難しい。学校内の調理室が使えるが、地域の人だからできること。使い方の体系化ができていない。使っているのかダメなのかわからないし、会員じゃない人が輪に入る余地がない。

<たたら>

看板がなんの説明もなくいきなりたっている。地域内の人で伝統を繋いでいく活動をするべきではないか。他の活動や物事と連携する必要がある。地元の人でも案外たたらのことを知らない。

<シミュレーション式 WS>

女性ならではの意見を引き出そうと考えた結果、WSの場を病院に例え、「女性＝ナース」「課題＝病気」、「課題の原因＝病状」、「課題の解決方法＝治療法」と置き換えてカルテを作成することとした。参加者には特に深刻であるとされた課題の原因を「症状」として取り上げ、それに対する課題解決方法を「治療法」として考えていただき、井戸端会議式WSで挙げられた課題の原因や解決方法について議論していただいた。

【それぞれの課題に対する意見】

<里山まつり：コンセプト不明確症候群>

以前は外向けにイベント告知のチラシを送っていたが、宣伝の費用対効果がみられなかったため、主催者だけのイベントになってしまい、参加の仕方がわからなくなった。まつりを行う際の会議で、内輪でやると決まったときは内心疑問を抱いていた。運営側が意見の取り込み方をわかっていないのではないかと感じ、役員などに所属していない人の意見を取り入れることも必要だと思った。消化行事としてやっているように感じられる。

<ピザ窯：使い方体系化炎症>

もともとの使われ方が内輪だけなので、つまりは閉鎖的になってしまう。「せっかくあるなら使おう」という意識がない。出資した人だけが使用できる雰囲気がある。自分から窯の存在を発信しようとししない。一家庭で使用するには規模が大きいため、複数家族と合同で使うと頻度が高くなる。まず住民が使い方を模索し、発信、その輪を広げる。まず今日集まったメンバーで食事会をしてみることで、自分たちが良い使い方を模索すればいいのではないか。そしていい結果が出ればその情報を発信することで、輪も広がっていくと思う。また、ピザ以外の料理の用途も検討してみることで、利用法を拡大できるのではないか。

表 3 取り組みに対する原因と課題解決方法

病気（課題）	症状（課題の原因）	治療法（課題解決方法）
里山まつりコンセプト不明確症候群	意識と目的の統一ができていない	負担を分散する
		外の意見を取り入れる
		住民全体の意見を募る場を設ける
		参加してみて意見（問題提起）をする
		何故開催するのか話し合う
		まず参加する
		呼び込みをかける
ピザ窯使い方の体系化炎症	住民が利用や発信に積極的でない	ポジティブな意見を発信できるメンバーと家族会や女子会
		色々な使い方を（ピザ以外にも）
		誘う！
		全員がまず参加
たたら地元の知識欠乏症	誇りという共通意識がない	まず参加
		もののけ姫みたいな伝え方の工夫
		行けばおもしろい
		文字以外の伝え方
		学ぶではなく体験
		外で体験してもらい大宮で深めてもらう
		たたら自体の理解を深める

<たたら：地元の知識欠乏症>

何をどう発信するかが不明確で、活動に力を入れているわりに発信する方向が定まっていない。住民でも、たたら歴史や伝統を本当に知らない人が多いため、外部にも発信できないの

ではないか。たたらに関する様々な痕跡があることは知っているが、実際に見ていない。歴史を知らない人が本当に多いし、地元の人でも案外知らない。たとえ聞いてなんの利益があるのかと考えると、やっぱりコアな層の支持しかないように感じる。「大宮の誇り」という意識の中の人を持たないといけないし、それがなければ外にも出せない。無形文化財として形が残っていないため継承しにくいし、敷居の高さも感じる。近年ではたたらの作業場とか歴史を巡るようになった。ジオラマなどあるものを見たり、知識を蓄えたりと、まず参加することが重要。また本場で体験などをして大宮で知識を学んでもらうことでたたら自体の理解を深めることも大事。

【参考文献】

- 小田切徳美（2004）「自立した農山漁村地域をつくる」大森彌ほか『自立と協働によるまちづくり読本』ぎょうせい。
- 木下 勇（2007）『ワークショップ』学芸出版社。
- 中塚雅也・内平隆之（2014）『大学・大学生と農山村再生（JC 総研ブックレット）』筑波書房。

にちなんふる里まつりに連携する出前科学実験教室 2015

鳥取大学医学部 中本幸子、藤原伸一、鈴木孝夫
 鳥取大学技術部 三谷秀明、森野慎一、足立昭子、堀江享史
 鳥取大学産学・地域連携推進機構 田中俊行
 鳥取大学医学部元教員 井元敏明、市川 修

1. 平成 27 年度事業報告

筆者らは、日南町で毎年開催される「にちなんふる里まつり」に連携して出前科学実験教室を開催した。平成 27 年 10 月 25 日（日）、日南町庁舎内を会場にして、液体のふしぎな現象、放射線に関する測定や味覚の不思議等の科学実験を中心に 7 講座を実施した。本年は「子供たち 会場に集まれ」を目指して、分かりやすい会場づくりや会場案内などに努めた。日南町職員及び大学職員の方々からは快い協力体制をいただき、多くの子供達が会場に集まってくれた。参加者の中心は小学生であるが、町民の方々や家族での参加も多く、楽しそうな親子の会話が目立った。これはこの事業が例年の行事の 1 つとして地域住民の皆さまに受け入れられてきたのではないかと感じている。

この事業では科学実験教室に対するアンケート調査を実施している。これらの結果は今後の活動に生かしていく。

(1) 科学実験教室の講座題目と内容

今回実施した科学実験教室の講座題目、講師名と概要は表 1 の通りである。

表 1 科学実験講座と実施概要

講座題目	講師	実施概要
血で光る液体	田中	犯罪捜査 <small>はんざいそうさ</small> で使われている血で光る液体（ルミノール液）を作って、人の血で光るかどうか試 <small>ため</small> してみます。他に、犬、魚の血ではどうだろうか？
光と色の反射の効果を楽しもう	中本	塩ビ板ミラーの保護膜を剥ぎ、ミラー面に傷をつけます。その隙間から光が通過します。塩ビ板ミラー 3 枚を三角錐に組み立てると隙間から入ってきた光は三角錐の内面に反射してちょっとした 3D を味わえます。傷をつけたところに好きな色を塗ると、複雑な色彩光が楽しめます。自分だけの光のアートを作ります
光センサの反応を見てみよう	藤原	光の点滅速度を変えるとき、どの程度の速さまで点滅を認識できるかの実験を行います。自分の目、光センサ(フォトトランジスタ)のそれぞれについて調べてみます。
放射線をみる、はかる	鈴木 三谷 堀江	私たちの生活において、放射線の利用は必要不可欠なものです。観察・測定を通して放射線を身近なものとして感じとってください。 ①霧箱を作成し、鉱物標本の鉱石および三朝温泉中に含まれる

		ラドンガスを用いて自然放射線の飛跡を観察する。 ②測定器（GM計数管）を用いて身の回り（食物など）の自然放射線を測定する。
キラキラバルーンスライム	森野 足立 堀江	PVA のりとキラキラしたラメのりを用いて、作る楽しみとしてキラキラスライムを作成する。また、作製したスライムにストローをさして膨らませ、風船感覚で楽しんでもらう。
味覚のふしぎ体験 ーすっぱいレモンがあまーいレモンに大変身!?	井元	あるものをなめておくと、すっぱいはずのレモンがどんどん食べられるミラクルな体験をします。
反応時間を計ってみよう!	市川	テレビ画面に図形が現れるので、すぐにボタンを押して下さい。どんなに早く押しても約 0.2 秒遅れます。これを反応時間といいます。反応時間は刺激のパターンや体調によっても変化します。

（２）各講座の実施状況

・ 血で光る液体

約 20 名の子どもと大人が、犯罪捜査で血痕の検出に使われるルミノール液（「血で光る液体」と呼ぶ）を調製する化学実験を体験した。

ヒト（私）の血液を希釈し、その少量を付着させたろ紙片に、血で光る液体を噴霧し、暗箱内で青白く光る様子を観察した。また、ヒト血液の他に、犬の血液、魚の血液でも青白く光ることを観察した。最後に、血液の赤い成分が発光物質のルミノールを光らせていることを教え、ヘモグロビン（ウシ由来）の少量に、血で光る液体を噴霧し、蛍光灯の下でも、明るく、青白く光る様子を観察した。また、ある大人から、自分の傷口の部分が光るかどうか試してみたいと要望があり、傷口に血で光る液体を噴霧したところ、見事に光ったので、大いに感動されていた。



・ 光と色の反射の効果を楽しもう

塩ビ板ミラーというプラスチックの板を 3 枚使って三角錐を作ります。この板にルーターやカッターで傷をつけ、光を取り込みます。光は三角錐の内面鏡に反射しちょっとした 3D です。

子供達は自分の好きな絵を描き、ルーターでゴシゴシ傷をつけます。中々上手くいかな

いとき、ちょっとしたアドバイスでうまくいくと、楽しそうです。さらに、削ったところにマジックで色をつけると、カラフルな宝石箱です。男の子も女の子もみんなが喜んでくれました。光と色と、鏡と、反射の仕組みについてみんなで考えてみました。これまで光を使ったテーマをいくつか続けてきましたが、「もっと難しい光についてやってほしい」という要望がありました。次年度の課題としたい。



塩ビミラーに点々の穴を開け、色を塗ると3つの鏡に反射した光でこんなにきれい。



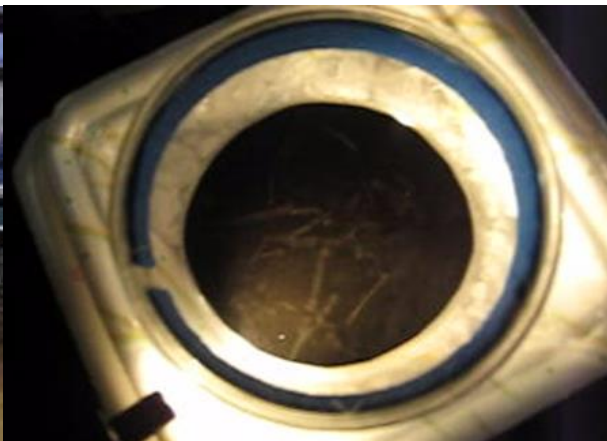
・光センサの反応を見てみよう

参加者は、発振器のダイヤルを回して赤色発光ダイオードの点滅速度を上げながら、光がずっと点灯しているように感じるときの点滅速度を測定した(通常 35~40 Hz 程度)。次に、発光ダイオードの点滅光を光センサ(フォトトランジスタ)に当て、人間の目ではずっと点灯しているように見える「点滅」を、光センサでは識別できることを確認した。さらに、光の点滅速度を10倍速くしても(400 Hz 程度の点滅)、光センサは「点滅」を識別できていることを確認した。これら一連の実験を通して、参加者はセンサの鋭敏な感度を体感するとともに、例えば人感センサなど、身近な生活で使われているセンサに対する関心を深めた。



・放射線をみる、はかる

鉱物標本の鉱石、および三朝温泉水中に含まれるラドンガスを線源として、ウイルソン霧箱による放射線の飛跡を観察、また測定器(GM計数管)を用いて昆布、肥料など身のまわりの放射線(カリウム40)を測定し、環境中にも体に影響のない自然放射線が存在することを体得させた。



左： GM 計数管による放射線の測定およびWilson霧箱による放射線の飛跡の観察風景
右： 三朝温泉水に含まれるラドンガスによる α 線の飛跡

・キラキラバルーンスライム

昨年に引き続き、子ども達に人気が高く大変好評であった「キラキラバルーンスライム」を技術部医学系部門のブースとして出展した。前回使用したスライム作製の容器はやや小さかったこともあり、必要材料をかき混ぜる際に材料の一部がこぼれ出るといったケースが散見されたため、本年度は容器のサイズアップおよび持ち帰り後の保存性を考慮して蓋付き容器に変更を行った。また、ラメのりについても新色を追加してバリエーションの増加を図り、多数の来場者を見越して計 60 人分の材料を準備して当日に臨んだ。

科学実験教室当日は昨年同様、参加者は楽しくスライム作製に取り組み、悪戦苦闘しながらも風船が出来た時の喜びを満喫されていた。のべ参加人数 57 名という結果からも概ね好評であったと思われる。また今回の特徴として、リピーターとなる子どもさん、親御さんを含めた大人の方の参加者も多かったことには驚きであった。



・味覚のふしぎ体験

ーすっぱいレモンがあまーいレモンに大変身！？

昨年に続いて今年も味覚変革タンパク質ミラクリンのタブレットを用いて、あまーいレモンを体験してもらった。今回は親子連れで訪れる人が多く、味覚のミラクルを親子で共



有して顔を見合わせている姿がほほえましかった。今年は甘みだけを消してしまう不思議な植物ギムネマ・シルベスタの葉も用意して、せっかく甘くなったレモンが、この葉っぱを噛んだ後には元の酸っぱいレモンに戻ることも体験してもらった。甘味が消える体験は大人の方の反応が大きく、グラニュー糖が「まるで砂！」と大きな声をあげていた。「リピーター」と思しき顔も年々増えており、鳥取大学のこの取り組みが着実にこの日南の地に根付いていることが感じられた。

反応時間を計ってみよう！

テレビ画面に図形が現れるので、すぐにボタンを押して下さい。どんなに早く押しても約 0.2 秒遅れます。これを反応時間といいます。反応時間は刺激のパターンや体調によっても変化します。

画面に刺激図形が現れたらすぐにキーを押す。 まだまだ子供達には負けられません！



(3) アンケート調査結果

この出前科学実験教室の参加者実数は、各実験講座の参加者数から重複者を除き、算出したところ、79 名でした。アンケート調査より、「楽しかった」100%、また、「わかりやすかった」が 94%と高く、好評であったことがわかる。この講座は子供達のものづくりの

楽しさと科学への興味・関心を高める上でバランスのとれた講座内容になっていると考えます。また、子供から大人まで幅広い参加者から頂いた意見は「ものづくりは楽しい」、「器具を使うことがしたい」にみられるように、創造することへの意欲、「顕微鏡で色々なものを見たい」、「生理機能やDNAと言った医学的な実験」、「化学」や「コンピューター関係」と言った医学、科学への関心が高いことに気付く。本年は「もっと難しいことを教えて」という意見がありました。こうした子供たちの声を大切にして楽しんで学べる良い出前科学実験講座を目指したい。



2. 今後の展望

この出前科学実験講座は日南町の子供達と共に歩いてきて9回目となりました。昨年からは「トリピー」が時々会場にやってきます。子供たちはトリピーが大好きで、一緒に会場を回ります。トリピーと遊んだ子供たちはこうした会場の中で行われている体験的楽しさを感じることが出来、それが『科学への芽』となり、次の年には体験者の一人となってくれることでしょう。そして、そのことを期待しています。

最近、この講座を心待ちにしてくれている子供たちがいることを知る機会や、講座への子供達の関心が高いことを感じる場面に出会うことがあります。これはこの科学実験講座が着実に子供達に受け入れられ、子供たちの自然・科学への興味関心や知識を高める場になっていることを実感するものです。子供達は広い興味関心を持ち、多様な可能性を持っていますが、自分で気づいていないことがたくさんあります。これからは『個の発見』を支援できる場となる講座づくりを考えていきたい。それにはまず『サプライズ』です。子供たちが『今年は何があるのかな？』と心待ちにしてくれる講座であり、講座内容に変化を取り入れることや時々新講座開設などを計画し、より興味を持って楽しく学べる環境づくりに力を入れたいと思います。そのことで個々の子供の自己開発や新しい子供たちの参加に繋げて、子供達の成長や人材育成の一端を担える魅力ある講座の開催を目指していきたい。

鳥取大学一日南町連携講座「にちなん町民大学」

日南町教育委員会

1. 事業紹介

鳥取大学と連携して平成 23 年度にスタートした「にちなん町民大学」も今年で 5 年目を迎え、学ぶ楽しさや大切さを感じてもらおう生涯学習の場として定着した。

2. 実績報告

本年度は全 13 回開催した「にちなん町民大学」のうち、6 回を鳥取大学の先生に担当していただいた。受講者は計 193 名。

5 月 15 日（金）－出席者 30 人

第 2 回『PM2.5 と越境大気汚染物質の実情と健康影響への対策』 大西一成助教（医学部）

6 月 26 日（金）－出席者 30 人

第 3 回『グローバル化時代を生きる』 山本定博教授（農学部）

9 月 18 日（金）－出席者 18 人

第 7 回『食と食材の原点～食の多様性と食への偏見を考え直す～』 山本福壽教授（農学部）

10 月 9 日（金）－出席者 25 人

第 8 回『なぜ砂漠を目指すのか ～乾燥地の過疎地から得られるヒント～』

大谷眞二准教授（国際乾燥地研究教育機構）

11 月 17 日（火）－出席者 51 人

第 9 回『介護予防～加齢に伴う体の変化を知ろう！～』 山本美輪教授（医学部）

2 月 23 日（火）－出席者 39 人

第 12 回『気になる！家族の病気と体質～家系図を描いて健康管理～』

中川奈保子特命助教（付属病院）

写真は、11 月 17 日（火）に開催した、医学部保健学科 成人・老人看護学 山本美輪教授による「介護予防～加齢に伴う体の変化を知ろう！～」の様子。



国際理解講座「外国の文化に触れよう」

国際交流センター講師 御館 久里恵

1. 事業概要

鳥大留学生と日南小学校児童の交流により、他国への関心を高め、身近に感じることができる機会とする。絵本、民俗、文化などを紹介した図書を通じてその国の文化に触れ、理解を深める。

2. 実績報告

8月6日、日南小学校にて鳥取大学留学生・マイさん（ベトナム）とシェリスさん（マレーシア）による国際理解講座を実施。参加者は、小学校1年生から6年生までの27名。

まずは、ベトナム民話『イッイッイッたりないよ』の絵本をベトナム語と日本語で読み聞かせた。その後、留学生の母国であるベトナムとマレーシアについて、位置や人口といった国の概要や生活様式、服装、料理などについて写真を見せながら紹介した。続いて、マレーシアの遊び「にわたりの親子」を子どもたちと一緒に体験した。会場には、図書館からベトナムとマレーシアに関する書籍と留学生が持参した民芸品や通貨を展示した。

子どもたちは、国によって異なる擬音語やベトナムの言葉の響き、マレーシアの多様な民族が共存する社会の様子などを興味深く聞いていた。



地（知）的好奇心育成のための早期体験学習

地（知）の拠点整備推進室講師 天野圭子
産学・地域連携推進機構准教授 清水克彦

1. 事業概要

鳥取大学と連携協定を締結している日南町、大山町、琴浦町、南部町の4町をフィールドとして、実際に現地に赴き視察を実施し、大学入学後早い時期に地域の実情に接することにより、各町の特色ある自然や産業についての教養を身につけるとともに、地域を学ぶ動機付けを行うことを目標とする。

2. 実績報告

4月21日（火）日南町職員（古川主事）による事前レクチャー、5月9日（土）日南町での体験活動を踏まえて、7月28日（火）に報告会を鳥取大学にて実施した。学生は日南町の強み、弱み、機会、脅威を分析した上で一泊二日農村体験やグリーンツーリズムの導入を提案した。当日は日南町からエナジーにちなん櫃田局長、古川主事にも参加いただき学生発表に対する講評をいただいた。また、10月3日（土）には受講学生の内、有志3名が稲刈り活動に参加させていただいた。

A グループ提案

強み (Strength)	弱み (Weakness)
<ul style="list-style-type: none"> 居心地の良い土地 人との距離が近い おいしい食べ物 (トマト、米等) 	<ul style="list-style-type: none"> 交通が不便 人手が足りない 若者が少ない
機会 (Opportunity)	脅威 (Threat)
<ul style="list-style-type: none"> これからは農業の時代 	<ul style="list-style-type: none"> 急速な高齢化 後継者不足 若者の流出

- ・目的 子供に農村の良さを伝える
- ・対象 小学生
- ・期間 夏休み(2日間)
- ・内容 村民の方の家に泊まり
2日間生活する→自然に親しむ
- 一泊二日農村体験

B グループ提案

強み (Strength)	弱み (Weakness)
<ul style="list-style-type: none"> ・自然が豊か ・食味値の高いお米やトマト ・ブランド化した商品 ・研修生が日南町で就職 	<ul style="list-style-type: none"> ・トマトの初期投資が高い ・米だけでは苦しい ・アクセスが悪い
機会 (Opportunity)	脅威 (Threat)
<ul style="list-style-type: none"> ・農林業研修制度 ・個人的に契約販売 ・ヒメポタルなどのイベント ・林業の機械化 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢化 ・過疎化 ・後継者不足

?

平成27年度 サマースクールについて

平成27年9月
日南町教育委員会

今年度は、小学校12回、中学校14回のサマースクールを実施しました。保護者の皆様にはご支援、ご協力ありがとうございました。参加状況、参加者・保護者・支援者の感想等を以下にまとめます。お読みいただき、今後の参考にさせていただければ幸いです。

1 参加状況と学習の様子について

(1) 児童・生徒

【小学校】	参加者	35名	47%の児童が参加	延べ参加者数	200名
【中学校】	参加者	28名	29%の生徒が参加	延べ参加者数	136名
【小中計】	参加者	63名	36%の児童生徒が参加	延べ参加者数	336名

(2) ボランティア

【地域ボランティア】	20名	延べ42名
【学生ボランティア】	12名	延べ73名



2 参加者の感想（抜粋）

(1) 児童

- ・分からないことをやさしく教えてくれたのがとてもうれしかったです。また来年もいきたいです。
- ・大学生に分からないところを教えてもらえていいし、休憩時間に大学生と話せるからおもしろい。ボランティアの人や大学生に教えてもらえて苦手なところが減りました。
- ・私が分からなかったプリントの問題もボランティアさんや大学生にも教えてもらって、新しいやり方などが分かったし、テストも出してもらって振り返りができてよかったです。
- ・難しい問題を一人でなやんでいたら積極的に声をかけられて教えてもらいました。そのときからぼくも声をかけられるようになりました。やさしくてたよりになるボランティアさんや大学生でした。

(2) 中学生

- ・サマースクールに参加して、分からなかったところをわかりやすく教えてくださり、理解することができました。特に、英語をたくさん教えてくださいました。ぼくは毎回参加しているけど、今までで一番やりやすく集中して早めに提出物が終わりました。冬も参加したいです。
- ・家よりも集中できました。思ったよりも宿題が進んでよかったです。でも眠かった。
- ・教えてもらえて、自分の課題点が見つかり、うれしかったです。
- ・たくさんの大学生の方が来てくださり、勉強をスムーズに進めることができました。苦手なところや難しい問題を一緒に考えてくださりうれしかったし、納得することができました。ありがとうございました。

(3) 保護者

- ・今回初めて参加させていただき、家とは違い、決まった時間に集中して学習に取り組めたと思います。自分の苦手なところを教えていただき、とても有意義なものになったと思います。ただ宿題を主にしていたので、次回は自主学習に力を入れてもらいたいと感じます。
- ・分からない問題を積極的に聞いて分かるようにしてほしいと願っていました。本人がどこまでできただろうか……。もっと向上心をもって取り組んでほしいです。学習支援の方にはお世話になりました。
- ・なかなか大学生の方とも仲良くなれるほど出席できなかったのですが、勉強は教えてもらって帰っていたので、たいへん喜んでおります。夏休みにはサマースクール、あそ美クラブでのいろいろな計画をしていただき、参加、出席させていただくことを喜んでおります。
- ・この機会に家庭学習のやり方も含め、学習にどう向き合うか家族で話し合いました。責任ある行動と自分で学ぶ意味、答え写しになっている課題の提出に、1から出直し取り組む覚悟を決めたつもりです。



(4) 学生ボランティア

- ・今回のサマースクールでは大変お世話になりました。大学での座学だけではなく、実際に子どもたちと関わる中で多くのことを学べた実りある2日間になったと感じています。初めは小学生の大変元気で活発な様子に戸惑ったりもしましたが、自分なりに声かけや接し方を考えて関わる事ができたかなと思います。まだまだ未熟ではありますが、将来教育者を目指す私にとって今回のサマースクールは貴重でかけがえのない経験となりました。本当にありがとうございました。
- ・日南サマースクールで毎回驚くことは、地域の方の参加率です。毎回違った方が子どもたちの様子を見に来られていました。みんなで子どもたちを大切に育てられている姿が素敵だと思いました。昼食を買いにスーパーへ行くと、バス待ちをしているおばあさんが、「勉強みて下さるとるだね。お世話になってます。ありがとう。」とってくださいました。この言葉からも、日南の子どもたちが地域の方々から愛されていることが分かります。素敵な町です。

3 学習の様子から

地域ボランティア、学生ボランティアのみなさんには、例年以上に多くの方にご支援ご協力いただきました。

参加した児童、生徒の多くは、静かに集中して学習に取り組んでいました。自分が納得ができていないことを支援者に熱心に聞くなど、意欲的に学習に取り組める人もいました。

児童生徒の参加率は昨年度と比較して約10%減り、例年と比べやや少ない状況でした。また、今年度は参加予定者が欠席するケースがとて多くありました。特に連絡なしで欠席する人が多かったことはとても残念でした。

今年は自分で計画を立てて学習に取り組むことができるよう、学習計画表を記入して学習に臨むようにしましたが、学ぶ目的や自分の課題や目標を意識しながら、計画的に自ら進んで学習を進める力をつけていくことが、今後の課題の一つとも言えます。

発達障害児の包括的支援ネットワークの構築・・・・・・・・・・・・・・・・	43
医学部教授 前垣義弘	
シミュレーションを用いた認知症教育プログラム・・・・・・・・・・・・	45
医学部教授 山本美輪	
嚥下検診における高齢者の嚥下障害スクリーニング・・・・・・・・・・	50
医学部助教 藤原和典	

発達障害児の包括的支援ネットワークの構築

医学部教授 前垣 義弘

事業の背景と目的

多動・衝動性や対人関係の障害などを特徴とする発達障害の特性を持つ子どもは、普通学級に在籍している児童の6.5%を占めると言われている（1クラスに1-3人）。このような子どもたちは、学校や家庭のなかで多くの困難さを持ちながら、暮らしている。これらの児童のうち、障害特性を正しく評価され適切に支援されているのは、ほんの一部である。発達障害の子どもたちは、わがままや家庭のしつけの問題として捉えられているため適切な対応がとられていない場合も多い。その背景には、発達障害に対する理解不足と支援システムが有効に機能していない点がある。学校においては、教員の他にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが関わりを持つことができ、教育委員会の発達障害専門教諭（LD等専門員）や通級指導教室などの専門機関が存在する。これら地域に存在する機関や専門職からなるネットワークが有効に機能するようにスーパーバイズすることにより、子どもたちが抱える発達特性を客観的に評価し、支援法を検討し、役割分担を明確化することが本事業の目的である。

平成26年度の実績と平成27年度の目的

平成26年度に開催した事業打ち合わせにおいて、日南町における発達障害児の現状と課題を整理して、平成27年2月に初回の事例検討会を行った。平成27年度は、事例検討会で共通認識した発達障害児の問題行動の評価（アセスメント）を元に教育実践し、教育支援効果の検証を行うとともに再評価を行う。また、行動評価のためのアセスメントツールを平成26年度に試作した。試作したアセスメントツールを実際に活用しながら、平成27年度は改修を行う。

実施方法

- 1) 保育園・小学校・中学校・教育委員会・福祉保健課より構成されている「日南町子ども支援連絡会議」への本学職員が第三者として参加しスーパーバイズする。
- 2) 保育園・学校において、保育士や教員、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、必要に応じて連絡会議構成員も参加し、事例検討を実施する。この事例検討会を継続的に行う。
- 3) 保護者に対して、発達障害の理解を深めるための講演会を開催する。

事業成果

事例検討参加者は、日南小学校及び中学校長・教頭・担当教諭・支援員、町教育委員会職員、町福祉保健課職員、鳥取大学教員などからなる。

第1回 平成27年8月20日（日南中学校にて開催）：17名

第2回 平成27年12月10日（同上）：16名

第3回 平成28年2月15日（同上）開催予定

多職種での事例検討により、発達障害児の持つ発達特性と問題行動（授業拒否、興奮、学業不振）の評価を、アセスメントツールを用いて実施した。評価を元に教育実践を行い、問題行動が明らかに減少した。事例検討を通して、個々の教員や専門職の共通理解とスキルが上がり、ネットワーク機能が向上

した。他の児童・生徒すべてに対してネットワークとして取り組めるようになるためには、本事業の継続とアセスメントツールの改修が必要である。

今後の展開

本事業は、発達障害児への教育的取り組みとして極めてユニークであり、かつ実践的である。このモデル事業が全県下に広がることが期待される。発達障害児は、その特性が理解されないと、「怠けている」、「自分勝手だ」、「乱暴な子」という誤った評価に繋がる。その結果、逆効果となる叱責や指導がなされ、不登校や暴力行為、学業不振、心身症などの二次障害を招きやすい。本事業により、発達障害児の問題行動の背景にある特性を正しく評価して教育的支援を行うことは、子ども一人ひとりが持つ能力を最大限に発揮でき、自立した大人に成長することへの導きであり、社会にとって極めて重要な課題である。

シミュレーションを用いた認知症教育プログラム

教育・研究テーマ：中山間地域型の保健医療福祉システム

主任研究者

医学部保健学科 成人・老人看護学講座 山本美輪

【事業目的】

本事業は、高齢者の加齢に伴う身体的変化の把握が、認知症高齢者への包括的理解につながる認知症を学習するプログラム（高齢者体験＋認知症ケアゲーム）開発とし、その効果を検証する。

【事業内容】

1. 高齢者疑似体験

高齢者体験装具を装着し、ADL/IADL を体験することにより 80 歳代高齢者の日常生活上の困難を経験する。

2. シリアスゲームを用いた認知症ゲーム

シリアスゲームを用いた認知症ケアゲーム（アルツハイマー型認知症版）によるシミュレーションを通し、認知症ケアの質の向上を目指す。

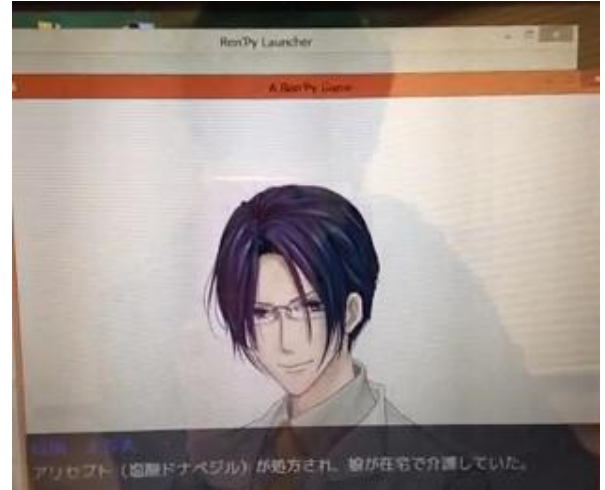
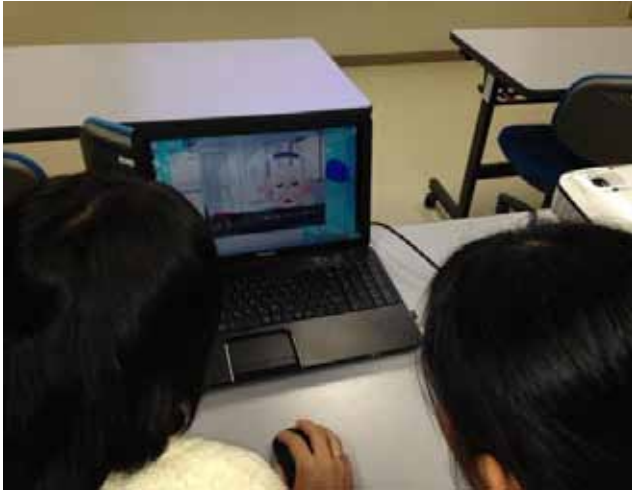
1) 平成 25 年度の取り組み

(1) 高齢者疑似体験

医学部保健学科学生 3 回生（81 名）に、老年看護学実習の学内演習として高齢者疑似装具を用いて高齢者体験を行った。これは、高齢者体験装具を装着し、ADL/IADL を体験することより 80 歳代高齢者の日常生活上の困難を経験し、加齢に伴う身体的変化の把握が、認知症高齢者の包括的理解へとつなげることを目的とした。その結果、学生からは「体験することで、高齢者の生活困難を理解することができた」「体験より、実際のケアを考えることができた」と感想を得ることができた。これより、加齢に伴う身体的変化、特に判断能力の元となる外部からの情報を高齢者がどのように体験しているかを理解することが認知症高齢者への包括的理解へつながったと考える。

(2) シリアスゲームを用いた認知症ケアゲーム

シリアスゲームを用いた認知症ケアゲーム・アルツハイマー型デモ版を開発し、グループでディスカッションしながらゲーム体験を行った。そして、ゲーム前後に、認知症高齢者への態度尺度を用いたアンケートを行った。その結果、学生からは「ゲーム形式で楽しく学習できた」等、認知症ケアに対する肯定的な感想を得ることができた。認知症高齢者への態度尺度は、因子分析と信頼係数 α 値より、学生の認知症高齢者への態度を測定できる尺度であると統計学的に考察することができた。今後は、病院の看護職等の専門職に対しても認知症高齢者への態度尺度として活用できるかを事業を行いながら統計学的に検討していく必要がある。



2) 平成 26 年度取り組み

平成 25 年度の成果より、本事業「シミュレーションを用いた認知症教育プログラム」を第 1 部：高齢者疑似体験、第 2 部：シリアスゲームを用いた認知症ケアゲーム体験の 2 部構成として詳細のブラッシュアップを行った。

(1) 高齢者疑似体験

2014 年度実績として 9 月、10 月に日南病院スタッフに高齢者体験研修会 77 名の参加、10 月に 2 回、介護福祉センターあかねの郷にて同研修会 33 名のスタッフが参加、10 月、にちなん町民大学で地域住民さん向け講演会 37 名の参加、また 2015 年 2 月に日南小学校で高齢者体験を行い 30 名の参加を得て、延べ 177 名に参加していただいた。





3) 平成 27 年度の取り組み

(1) 高齢者体験研修会

11月17日(火)「にちなん町民大学」と連携し、一般町民と役場職員に案内し、昼の部・夜の部の2回、高齢者経験装具を用いて講演・体験を行い、計51名の参加があった。昨年好評だったため、町民大学では、口コミで昨年より14名多く参加があった。80歳代高齢者の日常生活上の困難を経験することで、「高齢者の気持ちがよくわかったので、今まで以上に高齢者に優しく接することが出来そう」などの感想があった。日頃、町民と接する機会の多い役場職員(各年齢層)の参加も多く、今後はすぐに実践できる行動変容として、窓口対応等にも変化が期待できる。経験前・後のアンケートを実施しており、今後はデータ分析にかかる予定である。

(2) シリアスゲームを用いた認知症ケアゲーム

シリアスゲームを用いた認知症ケアゲーム(アルツハイマー型認知症版)を開発した。

6月18日、日南町認知症作業部会のメンバーと、日南病院・日南福祉会の研修委員の計12名がデモストを受け、認知症ケアゲームのシナリオ内容を検討し、10月初旬から日南病院職員(全部署)を対象

に、休憩時間等を利用して認知症ゲーム（1人15分程度）を行った。職員約100名中83名の参加があった。認知症ゲームの前後にアンケートを実施しており、今後はデータ分析を行い、平成28年6月頃に病院職員を対象に結果報告会を予定している。ゲーム方式であり、短時間で楽しく認知症ケアについての知識が身に付くと大変好評で、ゲーム実施前後のアンケート結果が楽しみとの声が上がっている。日南病院からは来年度も研修会の依頼があり、また、今年度福祉会は諸事情で実施できなかったが、来年度は研修会の依頼があった。尚、昨年度、本事業を三報社出版（東京）が興味を持って下さり日南病院に取材にこられ、電子書籍「高齢者に共感するケア（仮）」として作成中である。当初、日南町や日南病院で撮影予定であったが、予算の都合上、鳥取大学医学部と医学部附属病院、米子市内での高齢者施設で撮影（9月）、試写会（11月）終了し、最終映像チェック、ナレーション入れ（12月）が終了した。



本事業関連研究業績

学術論文

1. **Miwa YAMAMOTO**, ADACHI Naoko, Yasuko MAEKAWA, Tomoharu, Shigeru SAKURABA(2014.04) Survey on the Use of ICT Tools for Dementia Care of Elderly People, Open Journal of Nursing, Vol.4, No.4, p1-4. (原著：査読有)
2. **Miwa YAMAMOTO**, Sachiko MATSUI, Yusuke SAKURAI(2015.02) Factors Involved in Coping with the Dilemma of Using Physical Restraints on Elderly People with Dementia: Perspectives from Nurses who Live with Elderly Relatives, International Journal of Nursing & Clinical Practices, Vol.2, p119-123. (原著：査読有)

学会発表

1. **Miwa YAMAMOTO**, Noriko ADACHI, Yoko MIYOSHI, Kiyoko TOKUNAGA, Shigeru SAKURABA, Yasuko MAEKAWA, Tomoharu NAKASHIMA(2014.05) Research trends in iNPH dementia prevention nursing treatment of Japan, 7th Asian Conference on Safe Communities, Abstracts book, pp.197(Busan, Korea)
2. **Miwa YAMAMOTO**, Kiyoko TOKUNAGA, Toki ONODERA, Kayoko HIRANO, Noriko ADACHI, Naoko NISHIMURA(2014.05) Development of professional identity among Japanese nursing students by level of nursing experience, 35th International Association for Human Caring

Conference,35th International Association for Human Caring Conference Program book,p40(Kyoto International conference center,Kyoto,Japan)

3.**Miwa YAMAMOTO**,Yusuke SAKURAI, Noriko ADACHI, Naoko NISHIMURA(2014.05)Concept of life and death of nursing students in Japan, 35th International Association for Human Caring Conference, 35th International Association for Human Caring Conference Program book,p55(Kyoto International conference center,Kyoto,Japan)

4.**Miwa YAMAMOTO**,Yasuko MAEKAWA,Tomoharu NAKASHIMA,Noriko ADACHI,Naoko NISHIMURA(2014.07) Factors involved in coping with the dilemma of using physical restraints on elderly people with dementia: perspectives from nurses who live with elderly relatives, Sigma Theta Tau International's 25th International Nursing Research Congress,25th International Nursing Research Congress program book,p91(Hong Kong convention & exhibition center,Hong Kong)

5.**Miwa YAMAMOTO**,Shigeru SAKURABA,Jun SHIMIZU, Noriko ADACHI,Yoko MIYOSHI(2015.02)Identify in research directions for optical topography to address depression among elderly with dementia in Japan,18th East Asian forum of Nursing scholars,Abstract book EAFONS poster presentation List,p54,294-295(Taiwan).

嚥下検診における高齢者の嚥下障害スクリーニング

医学部助教 藤原和典

高齢化社会を迎え、2020年には高齢化率26.2%に達すると試算され、それに伴い高齢障害者も2025年には520万人と試算されている。そのため嚥下障害患者も顕著な増加が予想される。特に、臨床症状の乏しい不顕性誤嚥は、嚥下機能の検査診察の機会の限られる地域では発見も遅れやすいと考えられる。



そこで我々は、嚥下障害の患者を簡便に適切にスクリーニングし、誤嚥性肺炎を早期に発見予防するための試みとして、嚥下検診を開始した。下図のように日南町から住民に対して、PR していただいた。その他、日南町のローカルテレビでも宣伝していただいた。

★嚥下検診を受けられる方へ★

※お待ちの際に、各自お読みいただき、準備にご協力ください。

**検査の前に体重などを測ります。
靴下などは脱ぎ、素足になってお待ちください。**

【検査方法について】

①検査時には、鼻をクリップではさみます。

②紙の筒（使い捨てのマウスピース）をくちびるでくわえます。

③検査の機械から紙の筒を通して、霧が出てきます。このとき、咳が出そうになったら我慢せず、自然に咳をしてください。

※検査は1～2分程度で終わります。

検査では少し咳が出て苦しい場合もあるかもしれませんが、すぐに治りますのでご安心ください。

④読み終わった方から、お待ちの際に問診票をご記入ください。

ご協力ありがとうございます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

6月7日(日)・7月18日(土)
嚥下検診が受けられます!

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

平成27年度日南町集団検診の会場では、鳥取大学との連携事業で、**6月7日(日)午前・7月18日(土)午前**の2日間、嚥下検診を行います。

この検査は、誤嚥性肺炎の危険性を調べるための検査です。身体の筋肉量や脂肪量、咳を誘発して咳が出るまでの時間と咳の強さを測ります。

検査の詳細については、裏面をご覧ください。

この検査は、**日南病院 耳鼻咽喉科の先生**が行います。**検査は無料**です。この機会にぜひご利用ください!

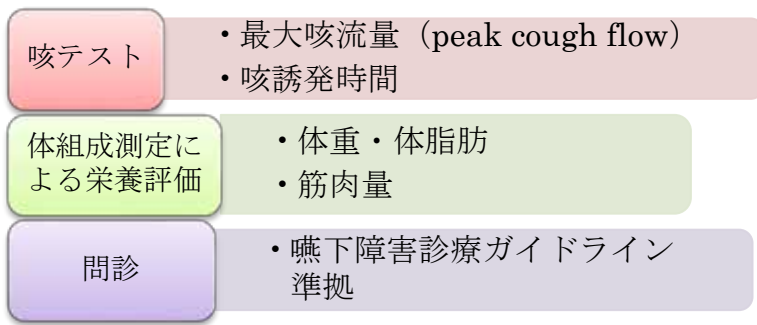
【嚥下検診】

◎日時：平成27年6月7日(日)～午前
7月18日(土)～午前

◎対象者：ご希望の方はどなたでも受けられます。

◎料金：無料

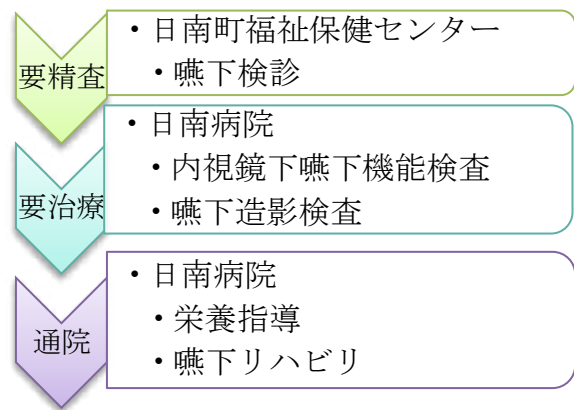
※裏面もご覧ください。【お問い合わせ】日南町福祉保健課：82-0374



検診項目としては、以下のよう
に、我々が開発した咳テスト
の装置により、最大咳流量と咳
誘発時間の同時測定、体組成測
定による栄養評価（体重・体脂
肪・筋肉量など）、そして摂食嚥
下状態についての問診を行った。

この咳テストの装置は、10秒程度で短時間かつ低コストでのどの感覚と咳の力を同時に測定することが可能であり、誤嚥性肺炎になりやすい方を抽出することを可能とした検査方法である。

検診は、6月と7月の2回、日南町福祉保健センターで行った。検診は無料とした。要精査となった方は、日南病院耳鼻咽喉科で、内視鏡下嚥下機能検査と嚥下造影検査により精査を行った。そこで、要治療となった方に対しては、管理栄養士および理学療法士により、栄養指導、呼吸リハビリおよび嚥下リハビリによる介入を行った。



検診結果

検診には、97人（男性34人、女性63人）の参加をいただいた。年齢は平均78.3歳（54～96歳）であった。

うち、59名を要精査とした。要精査の理由としては、右のグラフのように、咳テストで14人、問診で41人、両方で4人であった。今回の検診では、すべて歩行して受診いただけの方ばかりであったため、栄養評価で要精査となった方はいなかった。また、本取り組みは、まだ始まったばかりであり、偽陰性を無くするようカットオフ値を設定しているため、要精査となった方が多かったと考えられる。



要精査の方のうち、18名が日南病院耳鼻咽喉科を受診された。嚥下内視鏡検査と嚥下造影検査を行った結果、嚥下障害を認めたのは10名で、内6名に誤嚥・喉頭侵入を認めたため、栄養指導、呼吸嚥下リハビリを行った。



希望者のみの検診であったが、町の全高齢者の約 5%の受診をいただき、今回の取り組みを通じて、嚥下障害に対する意識は高まったと考えられる。咽頭の嚥下障害の割合は 6%とされるが、本検診では 10.3%に認め、高齢者での有病率の高さを示した。問診および咳テストともに要精査の場合には、嚥下障害の検出率が高く、この 2つの項目の併用の必要性が示唆された。

放置される財の解消に向けた戦略的研究：条例の作成を目指して

農学部助教 片野洋平

1. 事業の背景と目的

放置された山林、田畑、家屋、墓など、放置された財をどのように扱っていくかが全国の自治体では問題となっている。荒れ果てた山林や農地、空き家などについて公共性を害さない程度に管理する必要があることから、何らかの対策を講じる必要がある。本科題では、鳥取県各一部局担当者と定期的な会合をもち、実際にどのような政策が実施できるか、条例案の策定までを視野に入れて議論を進めることを考えている。

2. 事業の実施内容

これまで日南町、鳥取県の農林関係担当課、税担当課様に御出席いただき、放置されている財についての理解を深めるための研究会を「放置財研究会」として2回行っている。本研究会の成果の一部は、鳥取大学にて開催された、地域農林学会の学会シンポジウムとして片野により報告が行われた。同シンポジウムには、国内の農林経済学の研究者および県内の同問題に関心がある公的機関に従事する職員が多数参加した。

3. 実施時期

参加者数 放置財研究会 2015年7月30日 20名参加、10月21日 20名参加、農林経済学会 10月30日 50名参加

4. 事業の成果と今後の展開

日南町、鳥取県の農林関係担当課、税担当課様に御出席いただき、放置されている財についての理解を深めるための研究会を行った。これにより、問題の発生、問題の原因、問題の状況などについて理解を得ることができた。また、本研究会の成果を、内外に示すことが可能になった。しかし、本研究成果を政策レベルにもっていくには、課題の絞り込みが必要であり、引き続き問題について考察する時間をとりたい。

具体的には、地域社会において、どれくらいの財が放置されているのか、それが、どのような社会的インパクトを与えているのか、放置財のもつ経済的価値はどれくらいか、権利義務関係はどうなっているのか、など、調査に時間がかかっている。今後は対象をしぼり次年度内に、必ず実施案を作成したい。



日野川源流域における水質・生態系調査

地域学部准教授 寶來佐和子

1. はじめに

流域面積 870 km²、全長 77km におよぶ鳥取県最大の一級河川である日野川は、その水源を日南町にもっている。また、本町には希少なオオサンショウウオ(*Andrias japonicus*) やニホンサクラソウ(*Primula sieboldii*) といった希少な生物種も生息している。しかし近年、地域住民から日野川水系の環境変化に関して、魚の奇形や原因不明の病気、藻類の減少、アユの激減、いもち病の発生などの情報が寄せられている。本町におけるこれら現象の原因は、学術的に未解明である。河川生態系の変化の要因として、おもに河川の整備や化学物質の流入があげられる。化学物質による河川の汚染原因は、農業排水、工業排水、生活排水の流入である。

栄養塩類は生物の成長に必要な塩類のことである。特に N、P、K は生物や植物プランクトンの成長に利用され、生態系を維持している(大垣, 2007)。その一方、これら栄養塩類の上昇は富栄養化や付着藻類の増加による貧酸素化など多くの問題を引き起こす。総窒素は水の富栄養化の程度を示す指標の一つとなっている。さらに総窒素は有機態窒素と無機態窒素に分けることができ、無機態窒素はアンモニウム態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素の総和である。水中では主に無機態窒素の形で存在していることが多く、環境基準値は硝酸態窒素と亜硝酸態窒素の和が 10 mg/L 以下(環境省)と設定されている。硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素による汚染は、大気や地質などの自然起源、過剰施肥による農地起源、事業所排水や生活排水による人為起源など様々な要因による複合的な汚染であることが知られている(宮下, 2002)。

微量元素は主要元素以外の自然界に微量に存在している元素のことを指し、Cd や Hg は残留性や蓄積性が高い汚染物質として知られ、水俣病やイタイイタイ病の原因物質となった。これまで日南町の河川において公害や重度の汚染は報告されていないが、環境中元素レベルは調査されていない。

本研究は、微量元素と栄養塩類に着目し、日野川水系 9 地点(上流 2 地点、下流 6 地点、事業所排水口)、水田 2 地点(いもち病発生水田、非被害水田)の環境水と生物種の窒素安定同位体比を用いた環境モニタリングを実施し、環境影響を評価することを目的とした。

2. 試料と方法

試料: 2014 年 7 月~2015 年 9 月において、毎月 1 回採取し、計 15 回、上記の日野川水系 9 地点、水田 2 地点から環境水を採取し、事業所を除く日野川水系 7 地点、水田 2 地点から生物と堆積物の採取を行った。

水質調査: サンプリングを行った同時刻、同地点において多項目水質計を用いて河川水中の水温(°C)、pH、酸化還元電位(mV)、電気伝導度を測定した。

河川水中栄養塩類分析: 採取した河川水に簡易型水質分析器ラムダー9000(共通理化学研究所株)を用いて、9 項目(Fe^{2+} , PO_4^{3-} , S, Cl⁻, $\text{NO}_2^{-}\text{-N}$, $\text{NO}_3^{-}\text{-N}$, $\text{NH}_4^{+}\text{-N}$, So_4^{2-} , Cr^{6+})の水質測定を行った。

微量元素分析: 採取した河川水をろ過し、サンプル 25ml、硝酸 1ml を入れた PP チューブをサンプル試料とした。河川水中微量元素は誘導結合プラズマ質量分析装置(ICP-MS)を用いて 28 元素(Li, Mg, Al, V, Cr, Mn, Fe, Co, Ni, Cu, Zn, Ga, Se, Rb, Sr, Mo, Ag, Cd, In, Sn, Sb, Te, Cs, Ba, Ti, Pb, Bi)の濃度を測定した。

堆積物のサンプル約 30 g をシャーレに秤量し、凍結乾燥機 (FDU-12AS; AS ONE, Osaka, Japan) を用いて凍結乾燥させた (-45°C, 24 時間)。乾燥後、粉化したサンプルをテフロンバイアルに約 0.15 g 秤量し、HNO₃:HF=6:1 の混酸を 3.5 ml 添加した。その後、テフロンバイアルをテフロン製試料分解容器に入れ、マイクロウェーブ分解した (300 W, 10 分間×3 回)。放冷した溶液試料をアイボーイに移し、ミリ Q 水 (Millipore, Tokyo, Japan) を用いて 50 g に希釈、サンプル試料とした。堆積物中微量元素分析は、誘導結合プラズマ発光分光分析装置 (ICP-AES:SPS3100 24H, エスアイアイ・ナノテクノロジー) を用いて 23 元素 (Li, Mg, Al, Ca, V, Cr, Mn, Fe, Co, Ni, Cu, Zn, As, Se, Rb, Sr, Ag, Cd, Sn, Sb, Cs, Ba, Pb) を測定した。微量元素分析を実施するにあたり、信頼できるデータを得るには、手技や分析機器の精度と確度が問われる。そこで標準試料 (Pond Sediment-2, NIES) を用いて回収率試験を行なった。得られたデータから検量線を作成し、濃度を算出し、認証値から回収率を求めた。

3. 結果と考察

栄養塩類レベル

NO₃⁻-N 及び NO₂⁻-N 濃度は事業所排水 (JS) と銭神山川下流 (ZL)、水田取水口 (ZLL)、被害水田水 (TAN) において他地点よりも有意に高値を示し、銭神山川上流 (ZU)、小原川上流 (KU)、非被害水田水 (TN) では比較的 low 値を示した (図 1)。

排水基準値は 700 mg/L であり、これに対して環境基準値は 10 mg/L 以下である (環境省)。これまでの調査で基準値を超過した地点は見られなかった。いもち病発生水田水と非被害水田水中の NO₃⁻-N と NO₂⁻-N 濃度の総和を比較したところ、発生水田水において、有意に高値であったことから、窒素過多が、いもち病発生の大きな要因であったことが推察された。

窒素安定同位体比を用いた窒素起源の推定

発生水田周辺に生息していたオンブバッタとアマガエルの窒素安定同位体比と非被害水田周辺に生息していた同種のそれとを比較した。二種とも発生水田周辺で採集した個体の方が有意に高値を示した (図 2)。それらのレベルは、それぞれ 9.13 倍、3.22 倍上昇していた。非被害水田の両種の窒素安定同位体比を比較すると、オンブバッタで低く、アマガエルで高値を示した。これは、発生水田由来の同種でも類似したパターンを示した。オンブバッタとアマガエルの間には「食うー食われる」の関係が成り立ち、アマガエルの方がオンブバッタよりも栄養段階が高い。従って、アマガエルの方がオンブバッタよりも窒素安定同位体比が高い理由として、栄養段階の高さが反映していることが示唆された。さらに、発生水田由来の窒素安定同位体比は、オンブバッタで 9.13 倍、アマガエルで 3.22 倍高くなったことから、環境中の窒素レベルが上昇すると、より低次生物において濃縮率が高くなることが示

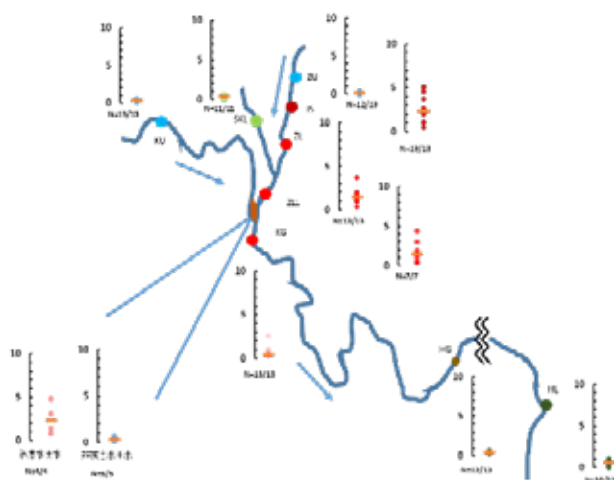


図1 NO₂⁻-N NO₃⁻-N 合計値と排水基準値と環境基準値

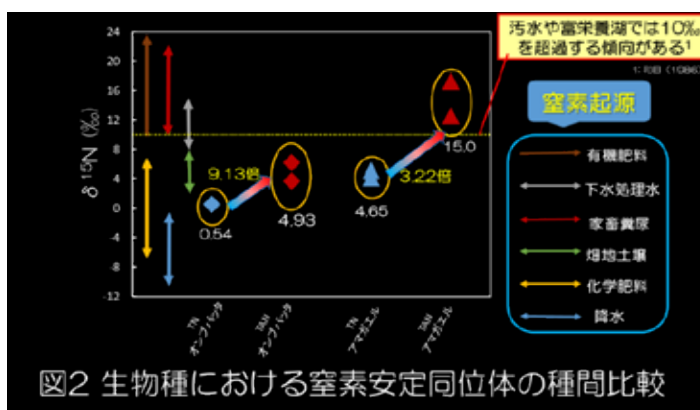


図2 生物種における窒素安定同位体の種間比較

唆された。従って、より低次生物の方が高次生物よりも環境負荷を受けやすいことが推察された。

環境水中マンガン (Mn) レベルの比較

河川水および事業所排水中の Mn レベルを比較した結果、森林開発地において有意にきわめて高値であった。さらに経時変化をみると、森林開発地と事業所においてピークが見られたことから、これら 2 地点周辺が放出源になっていることが判明した。次にこれら濃度の毒性影響評価を実施した (図 3)。ニジマスの胚を用いた 100 日間の流水式飼育法による曝露試験において、

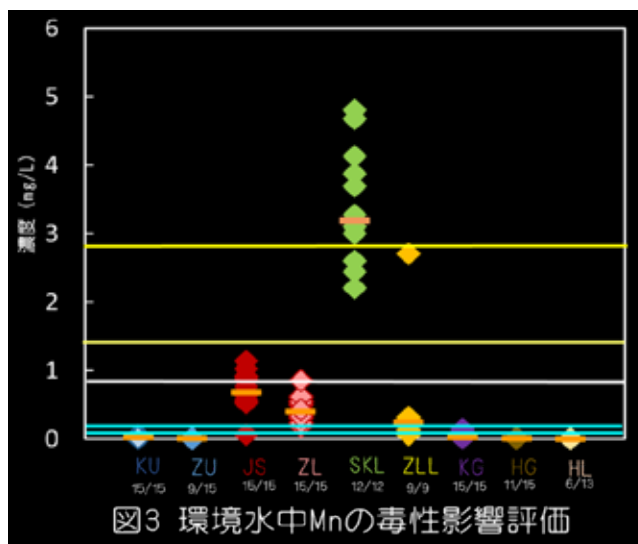


図3 環境水中Mnの毒性影響評価

その NOEC (無影響濃度) である 0.77mg/L を超過した地点は事業所排水 (JS) と、その排水が流入する下流 (ZL) と森林開発地 (SKL) の 3 地点であった。さらに、ブラウントラウトの胚を用いた 62 日間の流水式飼育法による曝露試験において、その NOEC (無影響濃度) である 2.84mg/L を超過した地点は森林開発地 (SKL) のみであった。また SKL は 7 日間の半止水式飼育におけるアメリカヒメガエルの LC₅₀ (半数致死濃度) である 1.42mg/L も超過していた。これらの結果から、森林開発地、事業所周辺下流である ZL および ZLL において、Mn による生物相への毒性影響が懸念された。

4. 結論

本研究調査において、測定した無機物質の日野川水系へのおもな流入源は、森林開発地と事業所であることが判明した。事業所排水は、各種イオン態元素 (栄養塩類・金属元素) である NO₂⁻, NO₃⁻, NH₄⁺-N, PO₄³⁻-P, Cl⁻, Fe²⁺, SO₄²⁻, S²⁻ レベルが他地点と比較して高値であったことから、上記 9 種の化学形態の存在が事業所排水の特徴だと言えるだろう。しかし、これらのレベルは基準値未満であった。

森林開発地周辺起源の河川水の特徴として、Mn, Ga, Se, Sr, Ba の 5 元素があげられる。とくに Mn レベルの生物相への影響が懸念されることから、より詳細な影響評価の実施や Mn 起源の特定が急務となる。

いもち病発生水田と非被害水田における環境水を比較した結果、発生水田水中のイオン態窒素レベルは有意に高値を示したことから、いもち病発生の原因として窒素過多が推察された。また、2 地点周辺で採取したオンブバッタとアマガエル中の窒素安定同位体比を比較したところ、発生水田周辺由来の 2 種において高値であったことから、これらの発生水田と非被害水田では窒素起源が異なることから推察された。

引用文献

環境省 <http://www.env.go.jp/kijun/index.html>

大垣真一郎(2005)河川と栄養塩類管理に向けての提言

宮下雄二 (2004)「神奈川県内における硝酸性窒素汚染地下水の水質、安定同位体比と土地利用との関係」

オオハンゴンソウの除草を中心とした森林資源の維持・有効活用について

鳥取大学地域学部 永松 大 鳥取大学農学部 日置佳之, 片野洋平

1. はじめに

日南町内では近年、放置された財（休耕地あるいはいわゆる耕作放棄地）の一部に、オオハンゴンソウの密な群落が見られるようになった。オオハンゴンソウは北アメリカ原産のキク科多年生草本で、やや寒冷な土地に生育し高さ 3m ほどになる。繁殖力が強く、肥沃で湿った場所に定着して密な群落をつくり、在来の低木や草本に深刻な影響を与えるため、外来生物法に基づく「特定外来生物」に指定され駆除が進められている。オオハンゴンソウは一端定着すると除去が困難で効果的な駆除方法は見つかっておらず、日光国立公園など全国各地でその抑制・除去が課題となっている。日南町でも、町が協力して数年前からオオハンゴンソウの刈り払い作業が実施されているが、やはり抑制には至っておらず、景観や生態系管理等の点から地域の課題となっている。本事業では、これを受けてオオハンゴンソウの抑制を検討するため、野外でのオオハンゴンソウ抑制試験を行う。

日南町の森林率は 9 割近くにおよび、木材生産・加工の振興と、樹木資源の多面的な有効活用が町の課題となっている。オオハンゴンソウを抑制する効果的な方法を検討するにあたり、本事業では、樹木資源の有効利用も視野に入れることとした。日南町出立にはオニグルミの大規模林分があり、特用林産物として期待されている。中・長期的にオニグルミによる被陰によってオオハンゴンソウを抑制する方法について検討を行う。

さらにオオハンゴンソウが定着する背景を考えると、これまで伝統的に管理されてきた生活域の変化がこれに関係している。日南町では空き家の増加が問題となっている。空き家の増加は、耕作地や周辺草地の荒廃と同時進行するため、オオハンゴンソウが増加する遠因となっている。オオハンゴンソウの問題は、空き家や休耕地といった「放置財」の課題とも関わっており、本事業では、この問題もあわせて考えることを試みる。

27 年度はオオハンゴンソウにとりくむ初年度で、まずは他所で行われてきた抑制に関する先行研究を日南町で検証することに取り組んだ。オニグルミの予備的な試験植栽を実施するとともに、放置財の問題について、空き家問題を中心に解析を試みた。

2. オオハンゴンソウの除草と抑制

日南町内に繁茂する特定外来生物オオハンゴンソウの駆除・抑制に向けて、日南町福栄地内の約 3500m² の休耕地にて刈り払い等の抑制実験を行った。事前に、日南町役場を通じて、地元自治会に試験計画を説明した。現地の植生調査を行った後、6 月 28 日に日南町、鳥取大学、地元自治会の協力で、オオハンゴンソウの刈り払いを実施し（図 1）、あわせて試験処理区の設定を行った（図 2）。

オオハンゴンソウの抑制効果を検証するため、刈り払い機でオオハンゴンソウの地上部をその場に切り倒したのみの「刈り払い」区に加えて、切り倒したオオハンゴンソウを除去して土壌表面に陽をあてる「表面除去」区、除去したオオハンゴンソウを積み上げ、オオハンゴンソウの抑制を狙った「積み上げ」区、オオハンゴンソウの地下部まで取り去る「掘り取り」区を設定した。



図1 刈り払いの状況



図2 学生によるオオハンゴンソウ掘り取り作業



図3 刈り払い区の10月の状況



図4 掘り取り区の10月の状況

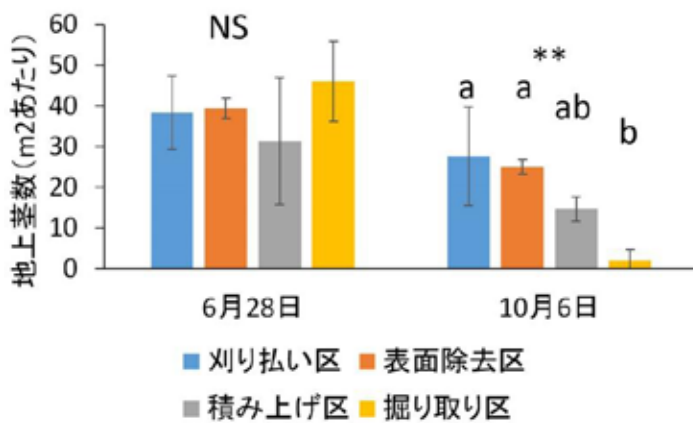


図5 オオハンゴンソウの本数回復状況

刈り払わず、手を入れない「コントロール区」も設定した。試験設定後、1ヶ月おきに現地を訪れ、11月までオオハンゴンソウの抑制（回復）状況を追跡した。

秋までの追跡の結果、刈り払い区では、背の高さこそ抑えられて開花数は減ったものの、オオハンゴンソウは全面をおおように回復した（図3）。一方、掘り取り区では、オオハンゴンソウはほとんど回復せず、図4では在来のイネ科一年草であるヌカキビが優占した。オオハンゴンソウの茎数からみると、6月28日の刈り払い時には各処理間に違いはなかったが、10月6日には、掘り取り区のみで他の処理

区より地上茎数が少ない，という結果となった（図 5）。各地で先に報告されているとおり，刈り払いのみではオオハンゴンソウの抑制効果は薄く，掘り取りまで行うことが抑制に有効であったといえる。

3. オニグルミ苗の予備的な移植試験

本試験では，中・長期的に樹木による被陰によってオオハンゴンソウを抑制する目的で，オニグルミを植栽し，その生長をモニタリングする。また，本調査地以外でもオオハンゴンソウの抑制が必要な場所が発生することを予想して，相当数の苗を確保するために，オニグルミ実生苗の育成を行う。

本年は，試験初年度のため，苗の育成が間に合わなかったため，自然発生した当年生実生を採取し，7月7日，日南町福栄地内の試験地に9個体のオニグルミ実生を移植した（図 6）。オニグルミ実生は9個体中7個体が11月まで生育し，休耕田への移植に問題がないことが確認された。

平成27年11月3日に，日南町多里地内の出立山町有林にてオニグルミの果実を約100個採取した（図 7）。その果実を11月6日に岡山県真庭市にある鳥取大学農学部附属教育研究林蒜山の森の苗畑に播種した（図 8）。陶製またはプラスチック製の直径約20cm，深さ約15cmの植木鉢に黒ボク土を充填し，オニグルミの果実を植木鉢ごとに1個，土被り厚2cm程度で植付けた。植付け後の植木鉢は，寒害を避けるため，苗畑の土中に，ほぼ植木鉢の上端と地表面が同じ高さになるよう埋めた（図 9）。これらが完了したあと灌水した。灌水はこのとき1回だけ行った。



図 6 オニグルミの移植試験



図 7 オニグルミ種子の採取



図 8 オニグルミ播種の様子



図9 播種後、植木鉢を並べて埋めている様子



図10 危険家屋(空き家)の例

4. 放置財の管理

本年度は放置財のうち、日南町側で関心の高い危険家屋（図10）の実態について深く分析を行った。本研究では特に、日南町様が行った悉皆調査を統計的手法で分析し、次いで空き家の近隣住民に対してインタビュー調査を行い、悉皆調査分析の結果の追認と新しい発見を目指した。

空き家の悉皆調査分析

本調査では、記述統計から危険空き家の発生傾向を明らかにした。日南町役場との共同研究で取得した484戸の空き家の情報を分析した。空き家の情報は、平成25年に日南町役場の職員がおこなった調査によるものである。日南町は独自に空き家の評価基準を作成し、建物の傾斜や、基礎・外壁・屋根の状況、使用状況の5つの項目を点数化し、この合計点数によって、空き家の状態をAからDの4段階で評価している。また、空き家の情報には、地域住民への聞き込みから得られた空き家の住所、空き家の所有者と管理者、所有者の住所、連絡先などが含まれている。

悉皆調査に含まれるこれらの情報を操作し、二値化して、クロス表分析を行った。このとき、従属変数は空き家の状態とした。そして、従属変数を①空き家の位置する標高（標高）、②母屋以外に長屋や蔵があるか、という家屋の規模（資産）、③近隣住民が所有者の連絡先を知っているかどうか（ネットワーク）、④山を背にして建っている、あるいは谷あいには位置しているかどうか（日当たり）、⑤集会所からどのくらい離れているか、という集落の中心部までの距離（社会的利便性）、⑥除雪優先道路に面しているか（交通の利便性）と設定した。

本分析の結果、以下のことが明らかになった。まず、資産と日当たり、交通の利便性、社会的利便性が空き家の状態に有意に影響を与えていることがわかった。すなわち、①資産を持っていない空き家ほど、危険空き家になりやすい傾向がある。②日当たりが悪い場所にある空き家ほど、危険空き家になり

やすい傾向がある。③除雪優先道に面していない空き家ほど、危険空き家になりやすい傾向がある。④集落の中心部から外れた場所にある空き家ほど、危険家屋になりやすい傾向がある。ただし、社会的利便性は5%で有意水準となっている。また、先行研究で言及されていた標高やネットワークの有無は、空き家の状態に有意に影響を与えていなかった。

空き家の近隣住民へのインタビュー調査

本調査では、空き家近隣の住民に詳しい話を聞くことで、悉皆調査分析の結果の追認と新しい発見を目指している。調査は平成27年10月から平成28年3月にかけて行った（一部予定を含む）。調査対象地区は日南町の中でもっとも空き家率が高い阿毘縁地区と山上地区に設定した。この両地区に存在する危険空き家50戸について、近隣の住民にインタビュー調査を行った。調査は現在進行中であり、2月3月についても引き続き分析を行う予定である。

5. 27年度事業のまとめ

27年度の試験により、オオハンゴンソウは刈り払いのみでは抑制効果はうすく、地下部の掘り取りが抑制に有効であることが明らかとなった。処理と回復の状況については、処理2年目の状況を継続的に検証していくことがのぞまれる。掘り取りは除去に有効ではあるが、多大な労力を必要とする点が問題であり、これを軽減する効果的な方法を検討する必要がある。

オニグルミの植栽試験については、27年度は予備的な移植試験により、成功の可能性を確かめることができた。オニグルミ実生苗の育成も開始することができたため、来年度も試験を継続して、移植本数を増やす必要がある。また本試験は、中・長期的な被陰によるオオハンゴンソウの抑制を狙っているため、オニグルミ生長のモニタリングも継続していく。

生態系に影響を及ぼす特定外来生物が定着・拡大する遠因となっている中山間地の放置財問題について、地域で特に関心の高い空き家の発生には、資産、交通と社会の利便性が影響していることが、本事業により明らかとなった。調査・分析は現在も進行中であり、個別の事情分析等とあわせて、継続的な調査の必要がある。

日南町森林活用プロジェクト会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

地域学部教授 永松 大、農学部教授 日置佳之

農学部准教授 藤本高明、農学部助教 片野洋平

日南町森林活用プロジェクト会議

農林課（鳥取大学教員が専門委員として参加）

1. 実績報告

今年度はプロジェクト委員が一堂に会す会議は行っていないが、昨年度までに議論していた日南町出立山キャンプ場周辺におけるJ-VER・FSCモデル林整備にむけ、鳥取大学からの提案・助言・協力を得て看板作成、周辺森林整備を行っている。今年度中に看板等を作成し28年度春に設置予定。平成28年5月29日に日南町を会場に開催される鳥取県植樹祭の散策コースとして活用する。また、日南町森林組合で作成するFSCのパフレットについても専門的見地から助言をいただき、今年度中に完成する予定。

次年度は早い段階でプロジェクト会議を開催し、昨年度来議論してきたプロジェクトのあり方について方針を決めていきたい。また、2020年東京オリンピック主会場となる新国立競技場において国内の認証材が使用されることが決まり、認証材の流通に向け議論を行っていく必要がある。

（今年度の動き）

- ・道の駅「にちなみ日野川の郷」におけるFSCプロジェクト認証取得。
（2月2日申請審査）
- ・道の駅「にちなみ日野川の郷」におけるCO2排出量ゼロに向けた準備。及び取り扱う生鮮品、加工品に一品1円のオフセットを付けて販売。
- ・日南町出立山におけるJ-VER・FSC見本林整備にかかる設計、看板等の作成。
- ・カーボンオフセット商品の開発。
- ・オオハングソウの除草を中心とした森林資源の維持・有効活用の研究との連携。
- ・FSC認証材を使用したJ-VER購入証の作成。



その他




連携事業報告会	63
鳥取大学協定5町連携事業 日南町、南部町、大山町、琴浦町、智頭町	80
新聞記事	82

鳥取大学・日南町連携事業報告会



日時：平成28年2月27日（土）10:00～12:00

場所：日南町総合文化センター2階 多目的ホール

報告①	<p>地（知）的好奇心育成のための早期体験学習</p> <p>本事業は地域志向科目として、学生が地域の特色ある自然や産業についての教養を身につけ、地域を学ぶ動機付けを行うことを目的に、日南町ほか3町でフィールドワークを行ったものです。本報告では、学生が日南町での体験活動を通して感じたこと、地域の課題についての改善案を発表します。</p>	<p>COC推進室 天野 圭子</p> 
報告②	<p>シミュレーションを用いた認知症教育プログラム</p> <p>本プログラムは、2部構成です。第1部は、高齢者体験装具を装着し、日常生活を経験することで加齢に伴う身体的変化を理解します。第2部は、シリアスゲームを用いた認知症ケアを、ゲームで体験することで楽しく学習することができる、というプログラムです。このプログラムを日南町で実施した様子や結果、今後の活用について報告します。</p>	<p>医学部 山本 美輪</p> 
報告③	<p>日野川源流域における水質・生態系調査</p> <p>日野川の魚が減少していることが地域住民によって確認されています。本事業では、日野川の河川生態系変化の原因解明と回復を目的として、水質調査を行いました。得られたデータを基に河川生態系変化の要因やメカニズムに迫ります。</p>	<p>地域学部 寶來 佐和子</p> 

●主催

鳥取大学・日南町連携事業ワーキンググループ 会議

●お問い合わせ先

日南町役場 企画課

TEL：(0859) 82-1115

Mail：nichinan@adm.tottori-u.ac.jp

どなたでも参加いただけます。事前申し込みは不要です。

日野川水系における栄養塩類および微量元素レベルの環境モニタリングと環境影響評価



オッサンショウウオ



鳥取大学 地域学部 地域環境学科
寶來佐和子



とりりん

日野川水系

流域面積870km²、全長77km
鳥取県最大の一級河川



鳥取県南西部の日南町が水源

日南町の希少生物

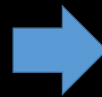
オオサンショウオ
(*Andrias japonicus*)



ニホンサクラソウ
(*Primula sieboldii*)



貴重な希少生物種が生息



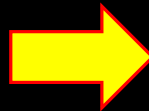
しかし近年...

日野川水系の環境変化に関する 地域住民からの情報

魚の奇形や原因不明の病気
藻類の減少
アユの激減
イモチ病の発生



イモチ病の稲



日野川水系に異変？

学術的に未解明

- ・ 河川の整備
- ・ 化学物質の流入

化学物質による河川水の汚染原因

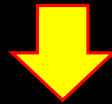
生活排水



工業排水



農業排水



化学物質による河川水の汚染

汚染とは？

汚染： 1. けがれに染まること。よごれ。しみ
2. 細菌・有毒物質・放射性物質などによって、汚されること。また、汚すこと。
広辞苑

汚染にはどのようなものがあるか？

- ・ 土壌汚染
- ・ 大気汚染
- ・ 水質汚濁（汚染）
- ・ 地下水汚染
- ・ 越境汚染
- ・ 海洋汚染
- ・ 複合汚染
- ・ 熱汚染

環境問題：人間の生産および生活活動によって生じる空気・水・土壌などの環境の劣悪化。
大気汚染・水質汚濁などのほか、オゾン層破壊・地球温暖化なども問題となっている。

人間活動によって環境中に放出される化学物質

有機化合物

- ・ダイオキシン類
- ・PCB類
- ・臭素系難燃剤
- ・農薬
- ・除草剤 etc.

有機汚染物質

無機（化合）物

- ・微量元素（おもに重金属類）
As, Ag, Cd, Hg, Tl, Pb etc.
- ・レアメタル
V, Cr, Ni, ... Rb etc.

無機汚染物質

- 無機物質は天然にも豊富に存在しているから。
- 人為的汚染と天然由来との区別が難しい

環境モニタリングの重要性

高度経済成長（1950s~1970s）による公害の発生

・水俣病（1956）：メチル水銀

・第二水俣病（1965）：メチル水銀

ヒューマンリスクの回避

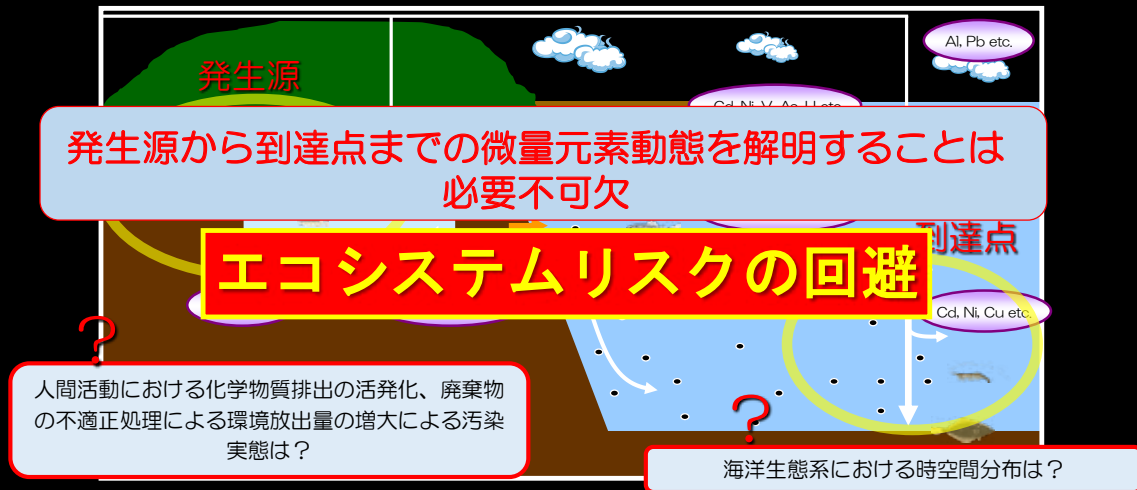
・イタイイタイ病（1910-70）：カドミウム

環境モニタリングの整備が不十分

深刻な環境汚染とその影響拡大を防止するために

環境モニタリングシステムの構築が必要

人間活動による微量元素汚染



元素と毒性発現

必須元素

- ▶ **多量元素**
H, C, N, O, Na, Mg, P, S, Cl, K, Ca
- ▶ **微量元素**
B, F, Al, Si, V, Cr, Mn, Fe, Co, Ni, Cu, Zn, As, Se, Mo, I, Li, Ga, Rb, Sr, Ag, In, Sn, Cs, Ba, Bi

毒性元素
Cd, Sb, Hg, Tl, Pb

毒性発現
生体内のレベルが閾値を超えると毒性が発現する。

生体内微量元素レベル

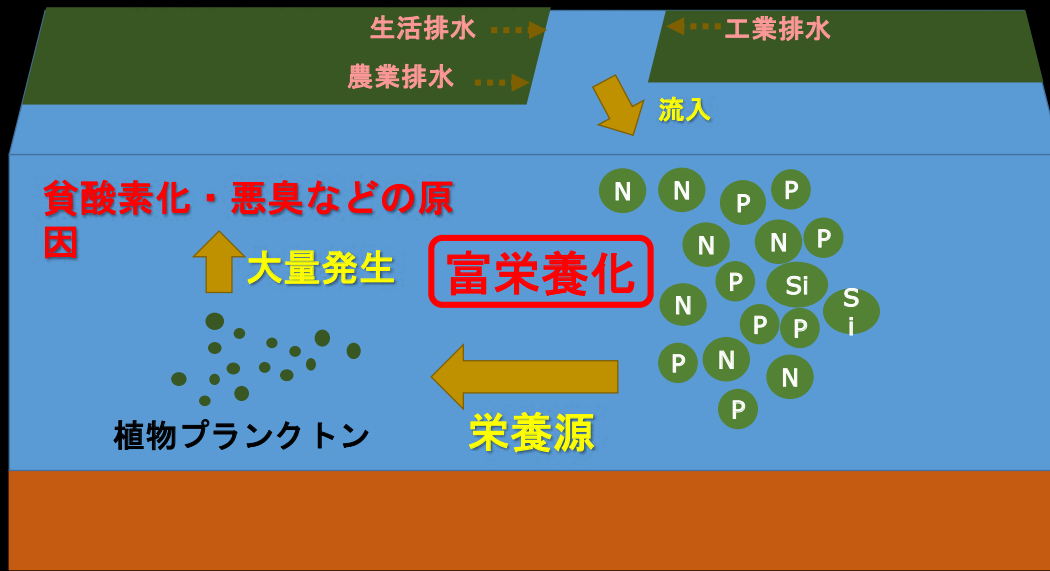
摂取量

閾値

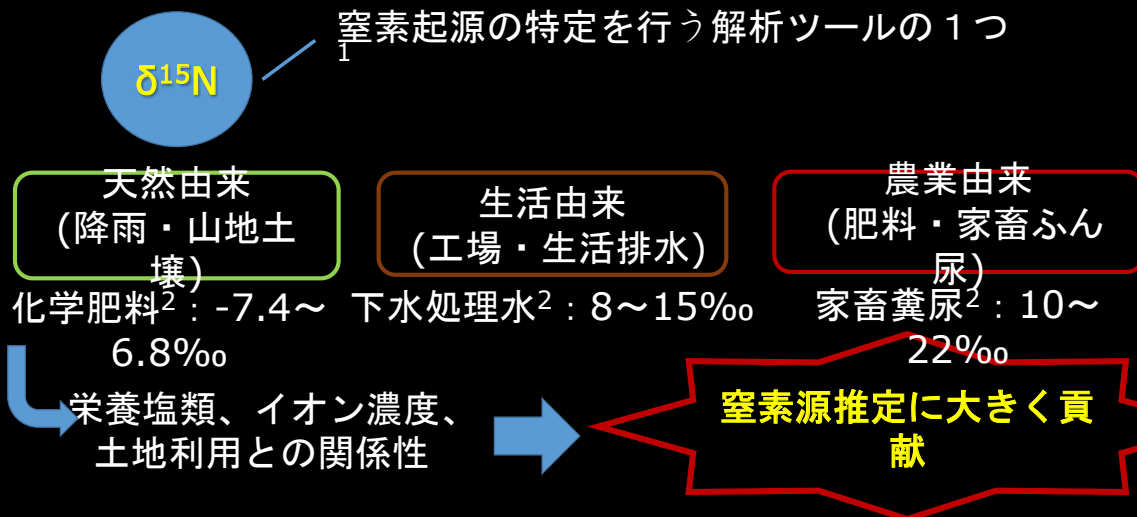
毒性発現

河川における栄養塩類の影響

栄養塩類：植物プランクトンや珪藻類の栄養として必要な元素



窒素安定同位体比を利用した窒素起源の推定



¹宮下 2007

²田瀬 (1996) 平田 (1996) 環境省水環境部 (2002)

目的

- ・ 河川水
- ・ 堆積物
- ・ 生物(藻類・昆虫類・両生類)

栄養塩類

微量元素

窒素安定同位体比



日野川水系上流部における汚染実態の解明

試料の採取

サンプリング期間：2014年7月-2015年9月(毎月1回 計15回)

サンプリング地点：11地点(日野川水系上流部9地点、水田2地点)

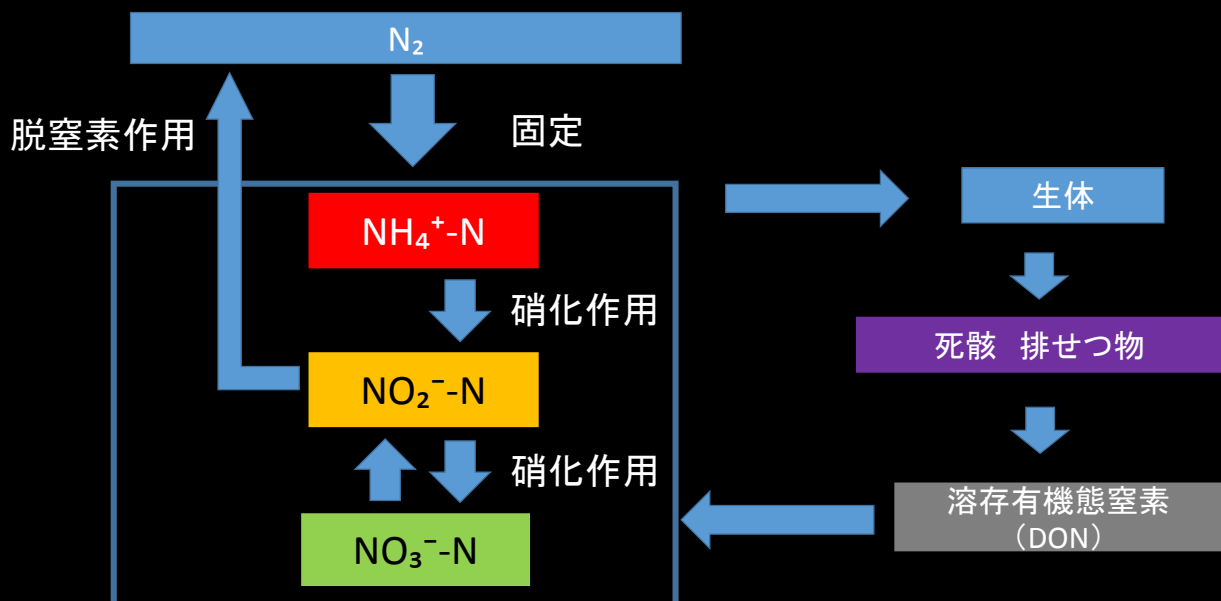
サンプリング試料：河川水、堆積物、生物種(藻類、昆虫類、両生類)



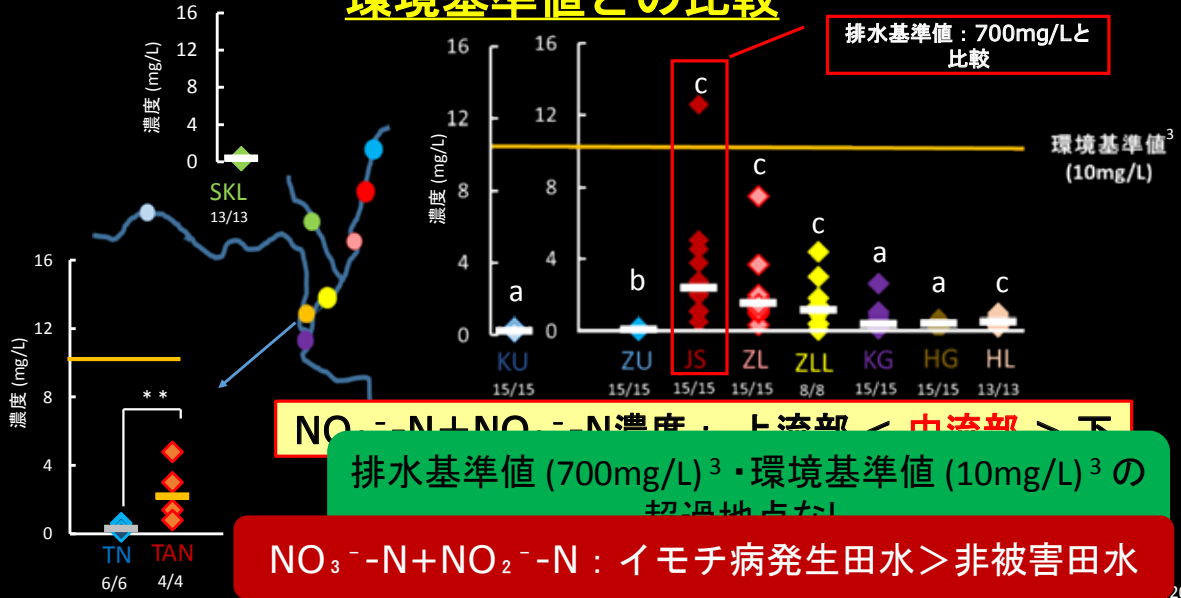
結果

- 河川水・排水中のイオン態窒素濃度の比較
- 生物種中の窒素安定同位体比の比較
- 河川水中マンガン濃度の比較

環境中の窒素循環



各地点におけるNO₂⁻-NとNO₃⁻-N濃度と環境基準値との比較



(2014)

水田におけるイモチ病発生の要因

おもな要因

菌による感染



イモチ病：品質の低下、枯死、他の稲へ感染

助長する要因

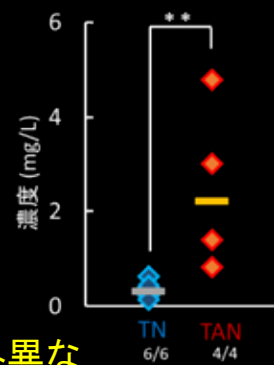
・日照不足

・窒素過多

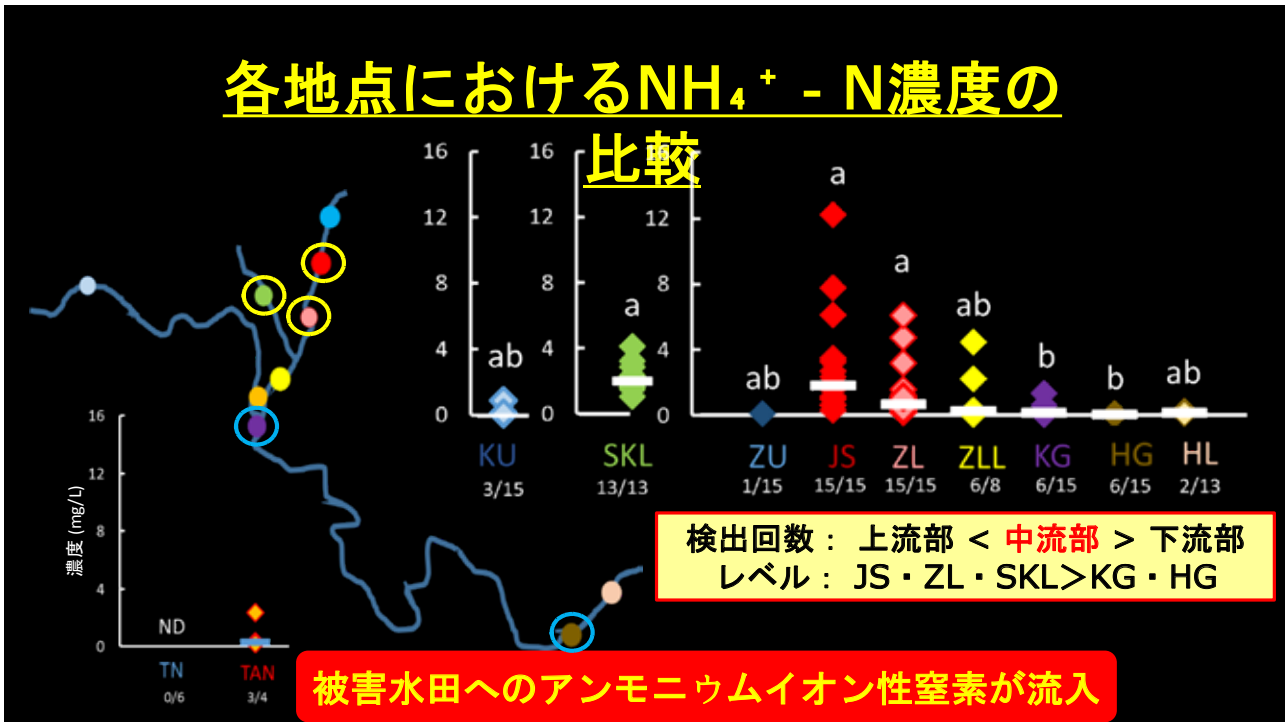
・高温多湿



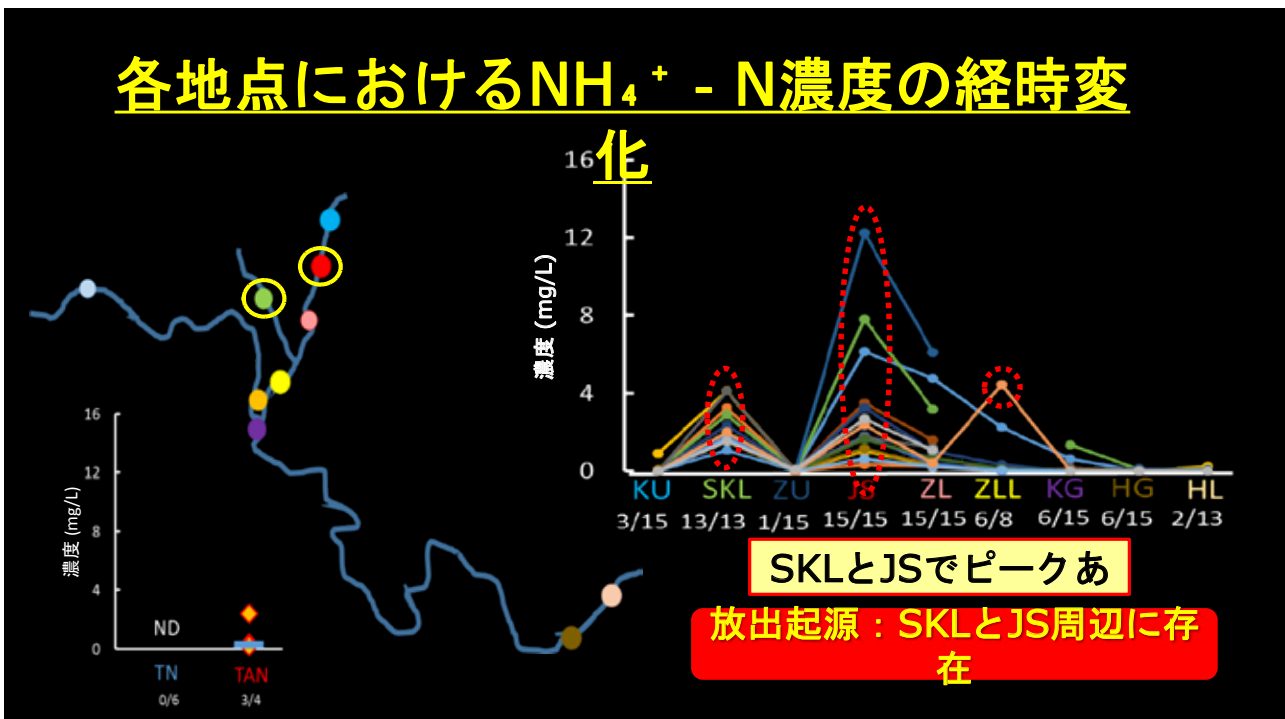
TNとTANは水源のみ異なる



各地点におけるNH₄⁺ - N濃度の比較



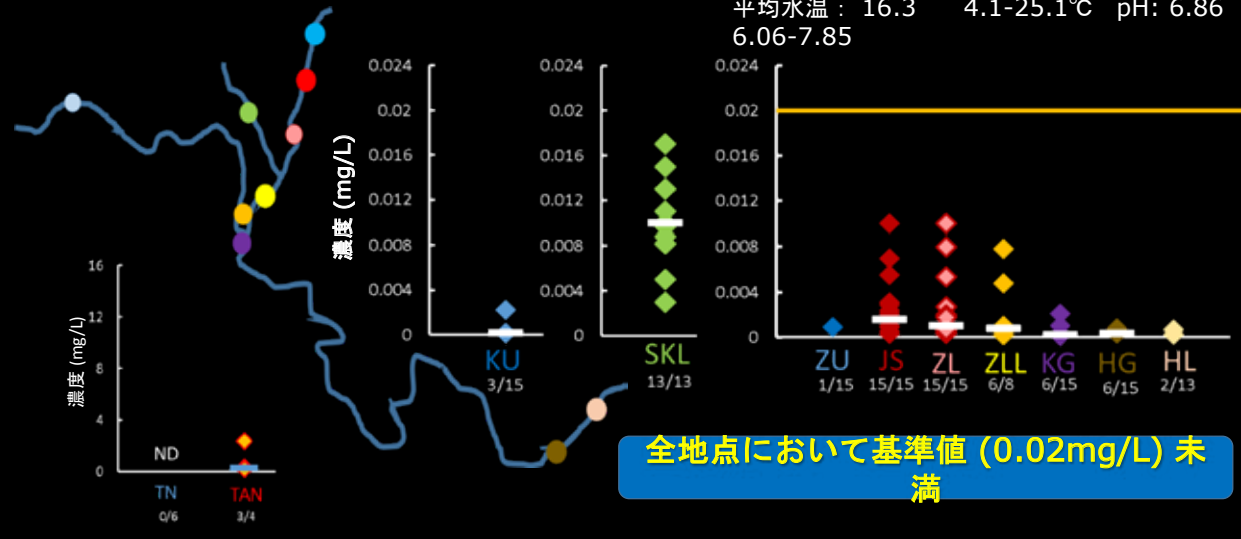
各地点におけるNH₄⁺ - N濃度の経時変化



NH₄⁺ - N濃度から考える遊離アンモニアのリスク評価

遊離アンモニア：毒性を示す形態、pH、水温、アンモニア性窒素で換算

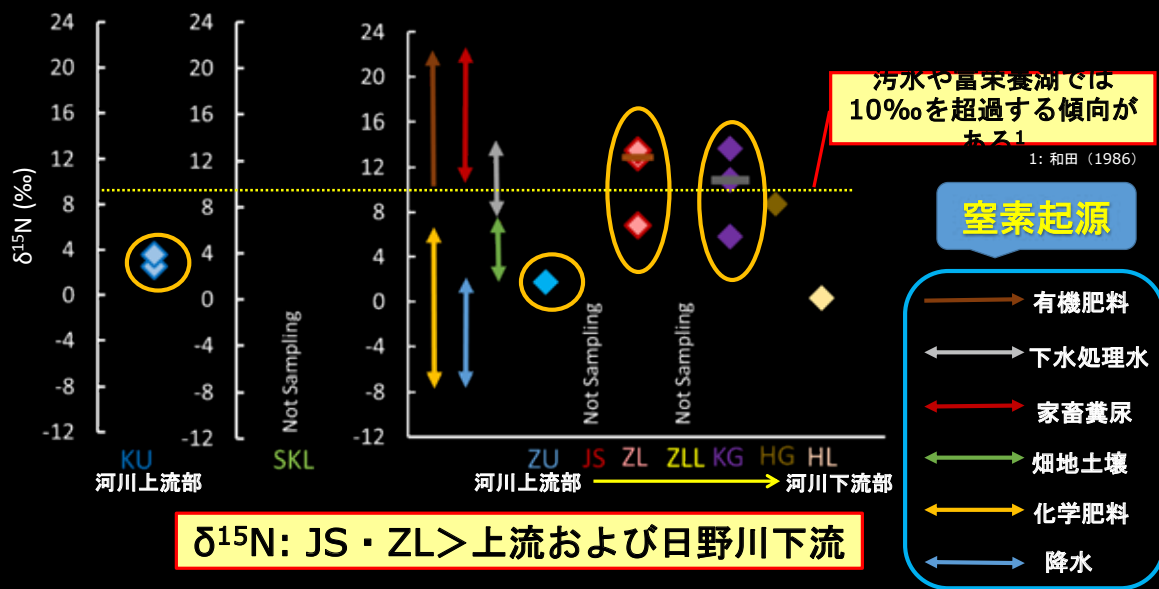
平均水温：16.3 4.1-25.1℃ pH: 6.86
6.06-7.85



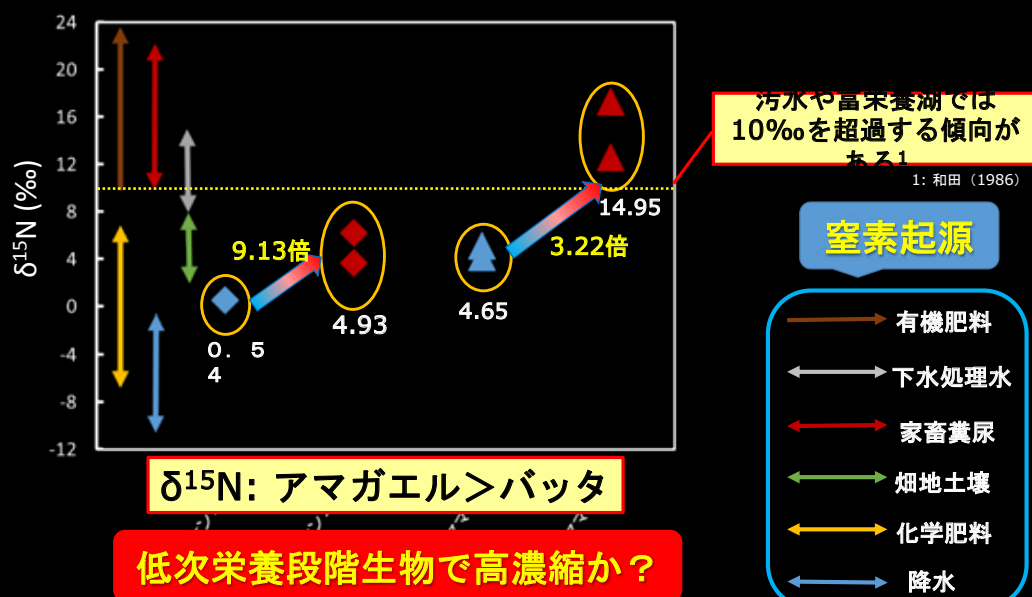
結果

- 河川水・排水中のイオン態窒素濃度の比較
- 生物種中の窒素安定同位体比の比較
- 河川水中マンガン濃度の比較

各地点における藻類の窒素安定同位体比の比較



生物種における窒素安定同位体の種間比較



結果

- 河川水・排水中のイオン態窒素濃度の比較
- 生物種中の窒素安定同位体比の比較
- 河川水中マンガン濃度の比較

河川水中マンガン濃度の地点比較

マンガン (Mn) : 生体必須微量元素の一つ。

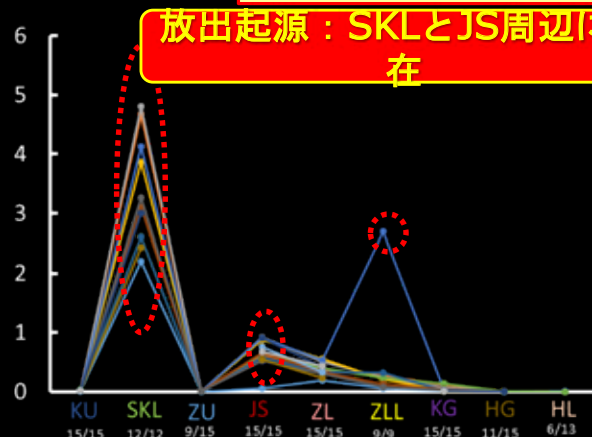
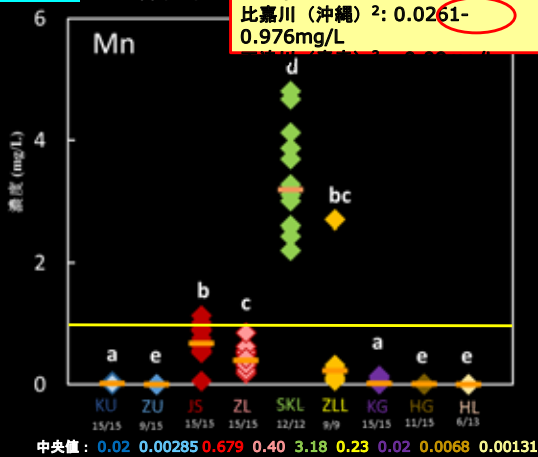
主要な用途 : ステンレスや特殊鋼、アルミニウム、銅の添加材、染色工業・医薬品、塩化物合成の触媒、塗料乾燥剤等、塗料や印刷用インクの乾燥剤、窯業用顔料、金属防錆、肥料（マンガン肥料）、農薬等、乾電池、ガラス工業（着色及び脱色）

毒性影響 : 脳神経系

海水¹ : 0.00003-0.021mg/L
 河川水¹ : 0.00002-0.130
 比嘉川（沖縄）² : 0.0261-0.976mg/L

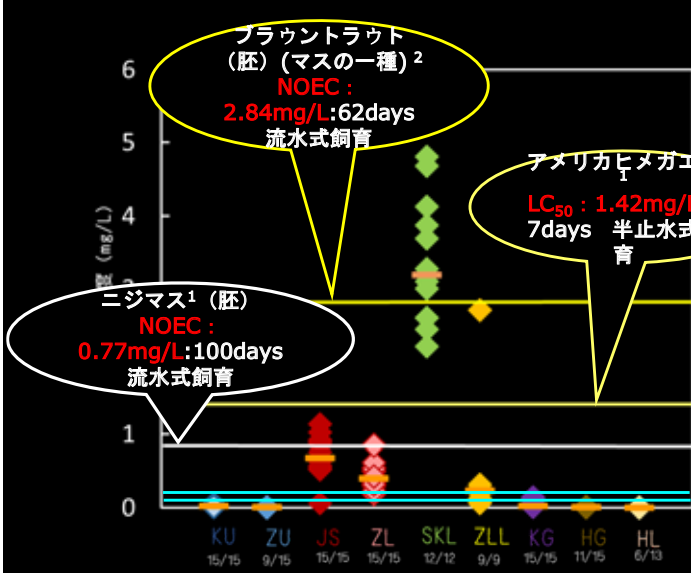
SKLとJSでピークあり

放出起源 : SKLとJS周辺に存在



1: Bowen (1979), 2: Ramos and Ohde (2004), 3: 高松 (2005) 海と湖の化学

SKLにおけるMnの毒性影響評価



PNEC (予測無影響濃度) : 急性毒性値及び慢性毒性値のそれぞれについて、信頼できる知見のうち生物群ごとに値の最も低いものを整理し、そのうち最も低い値に対して情報量に応じたアセスメント係数を適用することにより算出。

魚類 : 0.028mg Mn/L
甲殻類 : 0.047 mg Mn/L

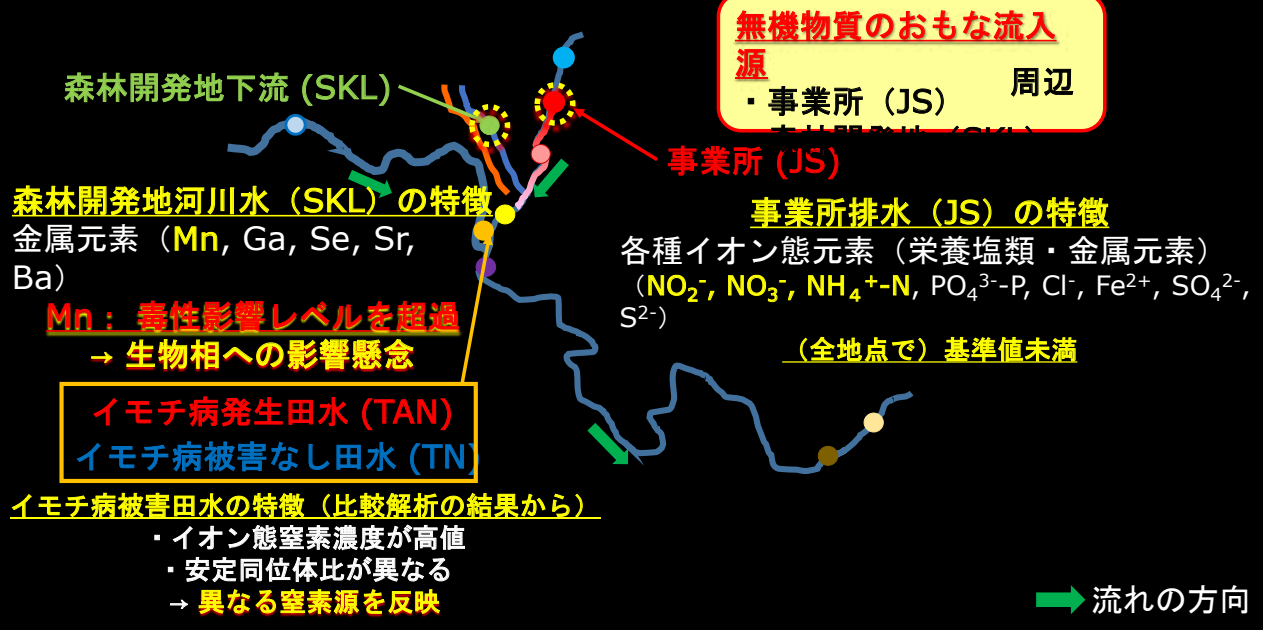
多くの河川でこれらの値を超過しているのが現状

NOEC (No Observed Effect Concentration)
 : 無影響濃度 (影響が出ないレベル)
LC₅₀ (Median Lethal Concentration)
 : 半数致死濃度 (50%生存可能レベル)

SKL・JS・ZL・ZLL周辺の生物相への影響懸念

¹Fisher, NS, and GJ Jones
²Birge 1988

まとめ



今後の課題

- 森林開発地（SKL）周辺における元素流入の起源特定
- 流入起源となりうる他地点の調査と比較解析
- 窒素およびマンガンの生態系影響評価の実施（とくに両生類に注目して）
- マンガンの具体的な毒性影響評価の確立



大学院1年生（4月から）
森木 翼（もりき つばさ） くん

ご清聴ありがとうございました



鳥取大学協定5町連携事業 (日南町、琴浦町、南部町、大山町、智頭町)

趣旨・経緯

日南町・琴浦町・南部町・大山町・智頭町の5町は、鳥取大学へ職員の派遣研修を実施しており、より有意義なものとなるよう積極的に情報共有・意見交換等を行っています。

各町が様々な特色を持つ一方で、過疎・少子高齢化といった共通の課題も多く抱えていることから、観光政策や地域活性化といった諸課題の解決に向けて連携事業に取り組んでいます。



日南町



鳥取大学



オッサンショウオ



とりりん



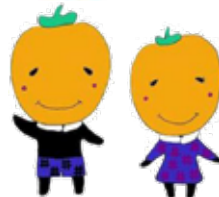
琴浦さん



©えのきづ/マイクマガジン社



南部町



なんぶカッキーズ



大山町



むきばんだ



智頭町



杉太くん・紅子ちゃん

●連携のあゆみ

平成18年3月 日南町と鳥取大学が連携協定締結

<目的> 農林業の振興、自然環境の保全、都市との交流と住民の定住に関する研究及び実践活動を行うとともに、フィールドを活用した実践教育を行うため

平成21年3月 琴浦町と鳥取大学が連携協定締結

<目的> 農林水産業をはじめとする地域活性化の施策や学生の教育・研究活動で、相互に連携・協力を深めるため

平成24年3月 南部町と鳥取大学が連携協定締結

<目的> 鳥取大学の教育・研究及び社会貢献事業と南部町の地域活性化に資する事業について相互に連携・協力を深めるため

平成26年3月 大山町と鳥取大学が連携協定締結

<目的> 教育・研究・地域貢献と町の安心・安全で活力のある地域づくりを推進するため

平成28年3月 智頭町と鳥取大学が連携協定締結

<目的> 林業、農業、産業振興、福祉・保健等の安全・安心で活力ある地域づくりを推進するため

平成27年度の取り組み

1. 第51回鳥取大学風紋祭への出店及び食材提供（H27/10/11(日)）

目的：各町の自慢の食材を使った料理を提供し、地域の食材と食文化を紹介することを目的としました。

会場：鳥取大学（鳥取キャンパス）

内容：5町の特産品をふんだんに使った「極・炊き込み御飯」の販売

成果：5町の特産品をふんだんに使った「極・炊き込み御飯」を作り販売しました。

来場者からも大変好評をいただき、用意した300食を完売しました。

併せて、南部町、大山町、智頭町、琴浦町、鳥取県水産試験場は、料理サークル

等の学生が出展する模擬店にも食材提供を行い、町や食材提供団体をPRしました。

<5町の特産品>

- ・琴浦町：あごダシ、あごちくわ
- ・日南町：コシヒカリ
- ・南部町：猪肉、やたら漬け
- ・大山町：大山ハーブ鶏
- ・智頭町：油揚げ

<食材提供>

【ふぁみーゆ・KCC】

- ・大山町 風見鶏「さくらたまご」
- ・琴浦町 大山乳業「牛乳・生クリーム」
- ・智頭町 大江の郷「天美卵」
- ・鳥取県 水産試験場「はたはた」
- ・南部町 庭先集荷「かぼちゃ」
- ・智頭町 智頭野菜新鮮組「たまねぎ」



5町特産「炊き込みご飯」



300食を1日で完売！！



料理サークルへ食材提供！

うまい

“鳥鶏の味”

智頭町・南部町・日南町・琴浦町・大山町

各町の特産品を贅沢に使用した

極 炊き込み御飯

問合せ先：鳥取大学 社会貢献課 0857-31-6777 琴浦町企画情報課 0858-52-1708
南部町企画政策課 0859-66-3113 大山町企画情報課 0859-54-5202 日南町企画課 0859-82-1115
智頭町総務課 0858-75-4111

鳥大生が田植え
日南の特色学ぶ

地(知)の拠点事業

大学が地方自治体や企業と協働し、地方での人材集積を図る「地(知)の拠点整備事業」を進める鳥取大は、事業に基づき「地(知)の好奇心育成のための早期体験学習」を今年度、新規に開講。授業の一環で9日、受講する学生7人が日南町農家で田植えを体験した。

同授業は、学生に県内各地の実情と地域課題を知ってもらおうと計4回の体験学習を盛り込んでいる。地元関係者との交流を通じて

田植えを体験する鳥取大の学生たち(日南町農家で)



地域の特色を学び、学生ならではの視点と発想で課題の解決策や改善策を取りまとめる。

この日が初回の体験学習で、山あいの棚田へ到着した学生たちは、田植え用の長靴に履き替えて集合。同町で農林業研修生の育成を担当している財団法人「エナジーにちなん」の指導員から苗の取り扱い方や手植えの基本を教わると、ぬかるみに足を取られながら約1時間半、作業した。

今後は、国立公園・大山での自然と歴史の学習や、琴浦町と南郷町での地域おこし活動などを予定。北海

道出身の地域学部3年杉田大輝さん(20)は「体験を通じて将来の就職先を考えた」と話していた。



鳥大と日南町

連携協定10周年
記念パネル除幕

鳥取大と日南町が連携協定締結10周年を迎え、鳥取市湖山町南4丁目の鳥取大で木製パネル寄贈式があった。木製パネルは日南町の工芸家、杠一司さんが除幕した。

鳥取大と日南町は2006年に農林業の振興や自然環境保全などを研究する「鳥取大学・日南町地域活性化教育センター」設置の協定書を締結。さまざまな地域活性化に取り組んでいる。

鳥取大と日南町のマスケットキャラクタ―木製パネルを披露する関係者

鳥取大と日南町は連携で日南町はいろいろな力が生まれている。つながりを深めていきたい」とあいさつ。

鳥取大の豊島良太学長は「日南町との連携はモデルとなり、実りが多い」と感謝し、木製パネル(いづれも縦1枚、幅50センチ)を関係者が除幕した。

鳥取大と日南町は2006年に農林業の振興や自然環境保全などを研究する「鳥取大学・日南町地域活性化教育センター」設置の協定書を締結。さまざまな地域活性化に取り組んでいる。

オニグルミで外来種退治

クルミの木を育て、特定外来生物の多年草オオハンゴンソウを駆除する珍しい取り組みが28日、日南町福塚でスタートする。鳥取大が地域貢献支援事業の一環として同町に協力、駆除の効果を検証する。町は副産物のクルミの実も活用する。町は関係者は一石二鳥の作戦を見守っている。



黄色い花を咲かせたオオハンゴンソウ
(鳥取県白野振興センター提供)

オオハンゴンソウ対策 特産化し一石二鳥

日南町と
鳥取大連携



オオハンゴンソウは北米原産。2メートル近い高さに茂り、夏に黄色い花を咲かせる。生命力が強く、在来植物の生態系への影響が懸念されている。同町福塚の水田は所有者が町外に移住して荒れ地となり、2年前に県の自然保護監視員がオオハンゴンソウの繁殖を確

オニグルミによるオオハンゴンソウの生育抑制が計画されている耕作放棄地=25日、日南町福塚

計画では、約3500平方メートルの耕作放棄地でクルミを育てて日陰をつくり、オオハンゴンソウが生育しにくい環境を創出。地元住民や鳥取大地域学部の学生らが群生の大部分を刈り取り、7月ごろオニグルミの苗を植える。刈り取りの有無や根を除去した場合などを比較し、効果を分析。生態学や環境政策の観点からも検証する。

クルミが順調に育てば、町は特産化も検討する考え。同町住民課は「育つまで5年くらいかかるかもしれないが、成果を地域に還元できたら」と話している。

外来植物対策と休耕地活用



オオハンゴンソウが繁茂する耕作放棄地にオニグルミの苗木を植える学生ら

耕作放棄地に繁殖した外来植物のオオハンゴンソウを抑制しようと、鳥取大学の学生らが7日、日南町福塚でオニグルミの苗木を植えた。育てたオニグルミで日光をさえぎり、外来植物が繁茂しにくい環境をつくる全国でも珍しい取り組み。3年間の実証実験で生育状況を観察しながら効果の有無を調べる。

日南で実証実験

オオハンゴンソウは繁殖力が強く、生態系への影響が懸念されている。水田だった同町福塚の耕作放棄地でも繁殖が見つかリ、町は周辺への拡大を防ごうと刈り取りによる駆除を続けたが、繁茂を抑えられずにいた。

同大が同町と取り組む連携事業の一環で、同大農学部の日置佳之教授と地域学部の永松大教授が外来種駆除に協力した。日置教授らは町内にオ

一挙両得なるか、オニグルミ植栽

ニグルミの自生林があることに着目。水分が多く日当たりの良い場所を好む性質がオオハンゴンソウの生育環境と似ていることや、実を特産化できる可能性があることから、移植して効果を検証することにした。

この日は教授らと学生6人が参加。同町湯河の町有林からオニグルミの若木9本を採取し、約8日間隔で丁寧に植え付けた。オオハンゴンソウが繁殖したままの区画や根ごと除去した区画なども設け、抑制の効果を約1カ月ごとに調べる。

日置教授は「外来種対策と遊休農地の活用が同時にでき、中山間地の活性化にちょうどいい。クルマは収穫までに約8年かかり、植えると水田に戻せないなど条件はあるが、成功すれば他の繁殖地でも活用できる」と話している。

(清水友揮)

日南で地域づくり大会

鳥取大と日南町の連携と同町のまちづくり協議会設立の10周年を記念する「日南町地域づくり大会」(同実行委など主催)が5日、同町霞の町文化センターで開かれ、トークセッションなどで各地域での活動の成果や課題などが報告された。

大学と町は2006年3月、鳥取大学・日南町地域活性化教育研究センター設置に関する協定を締結し、毎年、連携して事業に取り組んでいる。同年4月には七つの旧村単位でまちづくり協議会も設置された。

トークセッションでは、同大の日置佳之教授(農学部)を進行役に、豊島良太学長、福田恵子教授(地域学部)、同町の増原聡町長、多里地区と大宮地区のまち協のメンバーが、「大学連携と町づくり」をテーマに意見を交わした。

まち協からは「学生が泊まりに来ると急に

鳥大との連携 成果や課題は



トークセッションで町づくりなどについて意見を交わす参加者たち

にぎやかにになり、元氣に「ガイドブックの作成などで住民と一体となって活性化に向けて動いた」など、交流や連携の成果などが報告された。

増原町長も「若い人を受け入れやすくなる(日野上)▽屋号の調査(福栄)▽ヒメボ地域の保護とPR(山)」などの、各まち協の活動が報告された。

と評価。豊島学長は「し

つかりと地域貢献に尽力したい」と述べた。大会ではこのほか、

明治大学農学部の小田切徳美教授の記念講演やまちづくり活動に尽力した個人や団体の表彰が行われた。また、食廃油の回収(石見)▽降ひょう被害時の迅速対応(阿良津)▽遺物建造物紹介の冊子作成(日野上)▽屋号の調査(福栄)▽ヒメボ地域の保護とPR(山)

連携協定締結十周年記念コーナー

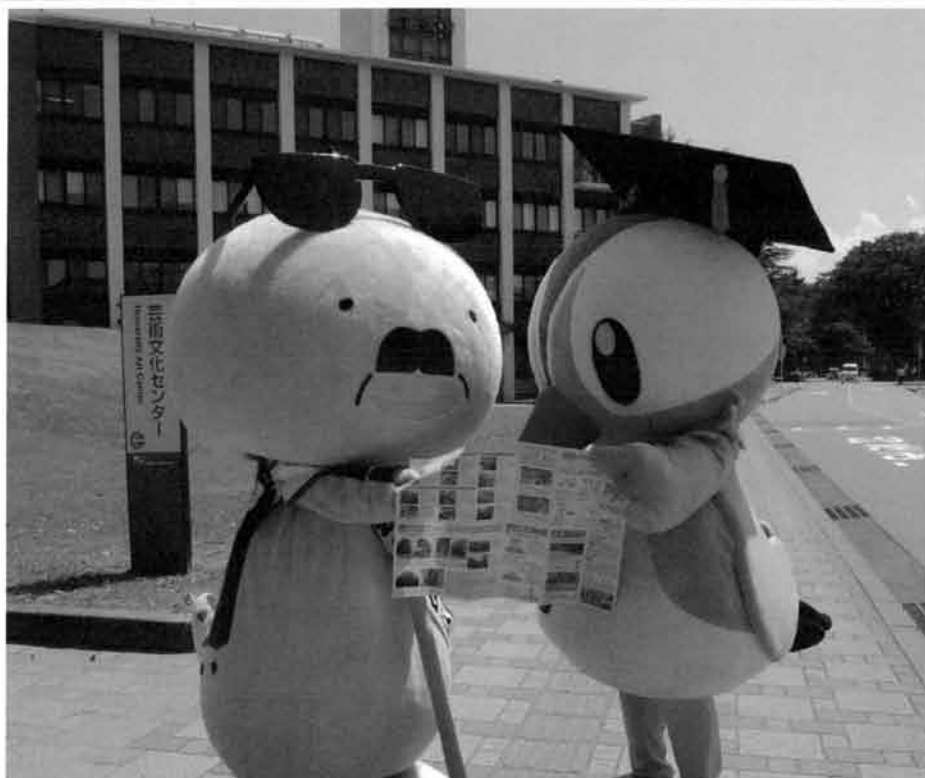
日南町地域づくり大会

～鳥取大学日南町連携協定10周年・まちづくり協議会設立10周年記念～

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	85
・ 日程・・・・・・・・・・・・・・・・	85
・ 記念講演・・・・・・・・	88
・ まち協からの活動報告・・・・・・・・	100
・ トークセッション・・・・・・・・	148
・ 写真集・・・・・・・・	155
とりりん・オッサンショウオ木彫パネル贈呈式・・・・・・・・	160
WG会議が鳥取大学学長表彰「地域貢献賞」を受賞・・・・・・・・	160
寄稿文集～連携10周年によせて～・・・・・・・・	161

日南町地域づくり大会

～鳥取大学日南町連携協定締結・まちづくり協議会設立 10周年記念～



日時 平成27年 9月 5日 (土) 午後1時～ (12:30 入場)

場所 日南町総合文化センター さつきホール (日南町霞 785)

主 催：日南町地域づくり大会実行委員会、国立大学法人鳥取大学、日南町

共 催：鳥取県日野郡連携会議

後 援：(株)中海テレビ放送、山陰中央新報社、新日本海新聞社

問合せ先：日南町地域づくり大会実行委員会事務局 日南町役場企画課
(鳥取県日野郡日南町霞800) Tel (0859) 82-1115

【日 程】

○開 会

主催挨拶 七瀬英夫実行委員長、豊島良太鳥大学長、増原聡日南町長
来賓紹介

○表 彰

個人表彰

- 日置 佳之 様 (鳥取大学農学部教授)
鳥取大学-日南町連携事業ワーキンググループ会議の座長を設立当初から現在まで務められ、日南町の諸課題解決のためにご尽力頂きました。
- 山浦 久 様 (山上まちづくりの会)
初代会長として山上地域の様々な諸問題に真摯に向き合い、ご尽力頂きました。
- 足羽 正敬 様 (日野上まちづくり協議会)
地域活動に熱心に取り組み、日野上まち協の基盤組織作りにご尽力頂きました。
- 段塚 芙美 様 (大宮まちづくり協議会)
長年にわたり学生宿泊実習等、多岐に渡り大宮まち協の活動にご尽力頂きました。
- 田邊 眞幸 様 (石見まちづくり協議会)
長きにわたり石見地域の住民活動にご尽力頂き、まち協の発展に貢献頂きました。
- 伊田 美和子 様 (福栄まちづくり協議会)
福栄地域の活性化のために努められ、長きにわたりご尽力頂きました。
- 池内 豊〈故人〉様 (多里まちづくり推進協議会)
多里まち協設立から、会長を2期務められ地域の課題解決に大変ご尽力頂きました。

団体表彰

- 山帰来 様 (阿毘縁)
地域の草刈りボランティアや、阿毘縁の観光振興等に長くご貢献頂きました。
- ホテル保護の会 様 (山上)
山上地域固有のホテルの魅力発信、保全活動に熱心に取り組みご尽力頂きました。
- 矢戸と松本清張を語る会 様 (日野上)
ゆかりの文豪松本清張を顕彰する幅広い活動を続けられ地域にご貢献頂きました。
- かわすじ史談会 様 (日野上)
地域の遺産等の活用や、歴史保存後継者育成活動にも幅広くご貢献頂きました。
- 観光交流協議会 様 (福栄)
福栄地域の観光に積極的に取り組み、幅広くご活躍いただきご尽力頂きました。

○記念講演

講師： 明治大学農学部教授 小田切 徳美 氏

テーマ： 地域における地方創生とは何か ～地域づくり・大学連携・田園回帰～

～休 憩～

各地域・大学のパネル展示等をお楽しみください。

○「鳥取大学・日南町の連携」及び「まちづくり協議会」について

「大学連携とは？」：法橋鳥取大学理事

「まち協とは？」：木下日南町企画課長

○7つのまちづくり協議会から活動報告

石見まちづくり協議会	：吉澤 晴美 様
阿毘縁むらづくり協議会	：荒金 実 様
日野上まちづくり協議会	：中田 玉江 様
福栄まちづくり協議会	：河上 仁美 様
山上まちづくりの会	：坪倉 幸徳 様
多里まちづくり推進協議会	：面田 公代 様
大宮まちづくり協議会	：田辺 次良 様

○トークセッション

テーマ：「大学連携と町づくり」

進行役：日置佳之教授

パネラー：鳥取大学より 豊島学長・福田恵子教授

日南町より 増原町長

多里まち協より 荒木定美・秋末道江

大宮まち協より 古都純孝・段塚芙美・井上輝之

○閉 会

○懇 親 会 (役場交流会)

○記念講演

講師紹介

記念講演 「地域における地方創生とは何か
～地域づくり・大学連携・田園回帰～」

講師：明治大学農学部 教授 小田切 徳美 氏

1959年神奈川県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。専門は農業経済学 農業・農村政策論、地域ガバナンス論。農山村の地域再生にかかわる専門家としてご活躍中。著書は、『農山村は消滅しない』（岩波新書）、『地域再生のフロンティア』（編著、農文協）



日南町・地域づくり大会

(2015.9.5)

地域における 地方創生とは何か

—田園回帰・地域づくり・大学連携—

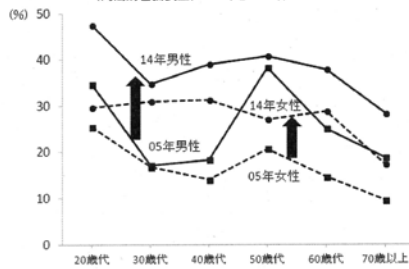
小田切 徳美
(明治大学)

農山村の新しい風－田園回帰－

☆いま、地域では何が起きているのか？

- 食料・農業・農村白書(2014年)で「田園回帰」特集
- 世論調査で明らかにされた国民の「田園回帰」志向
 - ・移住希望割合の強まり(05年・21%→14年32%)
 - ・特に若者、ファミリー世代(男20-40歳代、女30-40歳代)

図 農山村に対する定住の願望を持つ人の割合
(内閣府世論調査、2005年と2014年)



注:資料=内閣府「都市と農山村の共生・対立に関する世論調査」(2005年実施)及び同「農山村に関する世論調査」(2014年実施)より作成。いずれも、「あなたは、農山村地域に定住してみたいと思う願望がありますか」という問いに対して、「ある」、「どちらかといえばある」といふ回答の合計構成比。

田園回帰「国が後押し」
若者移住で農村活性化
農山村への移住希望者が急増している。政府は、移住希望者を支援する政策を打ち出す。農村活性化の鍵は、移住者の増加にある。政府は、移住希望者を支援する政策を打ち出す。農村活性化の鍵は、移住者の増加にある。

読売新聞
2015年
5月27日

農山村の新しい風－田園回帰－

■「田園回帰」の状況(鳥取県の事例)

・移住者の急増

表 鳥取県における移住者の動向(2011~2014年度)

年度	移住者数	指数
2011	504人	100.0
2012	706人	140.1
2013	962人	190.1
2014	1246人	247.2

- ・若者層がリード
(世帯数ベース)
20歳代以下:43%、
30歳代:23%
- ・日南町で最活発

	増田レポートによる「消滅可能性」	人口(2014年)(A)	移住者数(2011~14年度累計)(B)	比率(B)/(A)(%)	同左年平均(%)
鳥取県計		587,067	3,418	0.6	0.1
(うち市部)		429,864	1,681	0.4	0.1
(うち町村部)		157,203	1,737	1.1	0.3
日南町①	◎	5,345	146	2.7	0.7
伯耆町⑧	◎	11,418	295	2.6	0.6
日野町⑬	◎	3,551	80	2.3	0.6
智頭町⑨	◎	7,792	151	1.9	0.5
三朝町⑩	◎	7,020	90	1.3	0.3
北栄町⑤	○	15,718	192	1.2	0.3
江府町⑮	◎	3,294	40	1.2	0.3

資料:鳥取県資料および「住民基本台帳人口」より作成。
注:1)町村の◎、○は日本創成会議レポートの「消滅可能性都市」リストにあるもの、そのうち◎は2040年の人口が1万人以下と推計されたもの。
2)町村名の番号は県内15町村中における人口順位。

農山村の新しい風－田園回帰－

■「田園回帰」の地域的広がり(島根県中山間地域研究センター・藤山浩氏)

③30代女性増減数(2009～14年)



②4歳以下の子供増減数(2009～14年)



*住民基本台帳による日本国籍を有する住民を対象として比較

*住民基本台帳による日本国籍を有する住民を対象として比較

- ①30歳代女性の増加→「地方消滅論」が見逃したもの
- ②「田舎の田舎」(市町村周辺部)での子どもと親の増加
→市町村単位で見る「地方消滅」推計の限界

3

農山村の新しい風－田園回帰－

■移住者の特徴(実態調査より)

- ①20～30歳代が多い－「団塊の世代」は少ない
- ②女性割合が上昇; 夫婦移住、単身女性、「シングルマザー」－従来は圧倒的に単身男性
- ③職業は「ナリワイ」(多業化)
 - ・移住夫婦の標準＝「年間60万円の仕事を5つ集めて暮らす」(島根県、約3割の移住者は多業)
 - ・事例(新潟県十日町市)
 - 夫＝NPO職員＋新聞配達＋里山ガイド＋健康体操インストラクター＋農業
 - 妻＝飲食店パート＋農業
 - ・「パラレル・キャリア」(経営学者・ピーター・ドラッカー)

4

農山村の新しい風－田園回帰－

④「地域おこし協力隊」などの制度を積極的利用

⑤「Iターン」が「Uターン」を刺激

■「孫ターン」=さらに新しい動き

・Uターンでも、Iターンでもない第3の
パターン

祖父母:農山村

父母:東京(農山村→大都市)

孫:農山村(大都市→農山村)

・事例=NHK「あまちゃん」のアキ

・複数の週刊誌等が特集



『町村週報』15年
2月9日号

『週刊朝日』15年
8月28日号



農山村の新しい風－田園回帰－

■移住者の動機

=多様な動機

■「地域おこし協力隊」

で見れば

→①地域貢献派

②地域定住派

③自分探し派

等々

表「地域おこし協力隊」の応募理由(アンケート結果)

順位	応募理由	(単位:%)	
		最大理由 (単一回答)	
1	地域の活性化の役に立ちたかったから	19	
2	現在の任地での定住を考えており、活動を通じて、定住のための準備をしたかったから	17	
3	自分の能力や経験を活かせると思ったから	15	
4	活動の内容がおもしろそうだったから	12	
5	現在の任地への何らかの懸りがあったから	8	
6	一度、田舎(地域)に住んでみたかったから	7	
7	都会の生活に疲れたから、都会の生活はもしいかなと思ったから	4	
8	誘ってくれる仲間がいたから	4	
9	地元(同一県内を含む)で働きたかったから	2	
10	他の就職先が見つからなかったから	0	
-	その他	12	
回答者数(410名)		100	

注:資料=移住・交流推進機構(JOIN)「地域おこし協力隊・隊員アンケート調査」(2013年8月実施)による。

※地域も多様化→多様な地域×多様な移住者

→両者のマッチングの重要性

農山村の新しい風－田園回帰－

■しかし、自治体職員は言う……

- ①「仕事がないから若者は戻らない」
- ②「仏壇があるから空き家は動かない」

■移住先発地域からのメッセージ

・和歌山県那智勝浦町色川地区 (296人中45%が移住者)
地域リーダー・原和男さん(第1移住者＝移住者世話役)
「若者が本当にその地域を好きになったら、仕事は自分で探したり、作り出したりする。その地域にとって、まずは地域を磨き、魅力的にすることが重要だ。『仕事が無い』という前にやるべきことがあるのではないか。」

7

農山村の新しい風－田園回帰－

■一部の霞ヶ関やエコノミストから、「移住者など糸屑のようなもの」という批判も……

1. 移住者の質的な意味の軽視

・「選択住民」の強い発信力

2. 量的な意味の軽視

・移住者数の実態 (1月3日毎日新聞)

「毎日・明治大学合同調査」

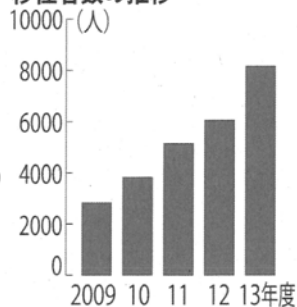
2013年度・全国＝8,181人

(最狭義－実際はその数倍)

→4年間で2.9倍(単純延長で2021年に7.3万人?)

＝「糸屑」ではない量へ

移住者数の推移



8

II 農山村再生の課題—「地方創生」とは？—

■新しい農山村像

- ・移住hは増える、しかしそれでも総人口は減る
→「低密度居住地域」戦略
＝その具体化として「小さな拠点」構想

■それでは、いまなすべきことは何か？

- 人口減少下でも、地域を磨き、人々が輝き、
(内外の人に)選択される地域をつくる
※人口は増えないが、「人財」は増える(人口減・「人財」増)
＝農山村の「地方創生」の本質
(人口を増やすことや交付金を獲得することではない)

9

II 農山村再生の課題—「地方創生」とは？—

■地方創生とは

- 「地域を磨くこと」(人口を増やすことではない)
 - ・地域の働き盛り世代の「輝く場」として
 - ・地域の高齢者世代の「安心できる場」として
 - ・地域の子ども達が「戻って来る場」として
 - ・地域外の人々の「あこがれの場」として

■その原則

- ①内発性・・・自分達の思いと力で、
- ②多様性・・・自分達なりに、
- ③革新性・・・今までとは少し違い方法で、
(行政や外部主体の支援を得ながら)地域を磨く

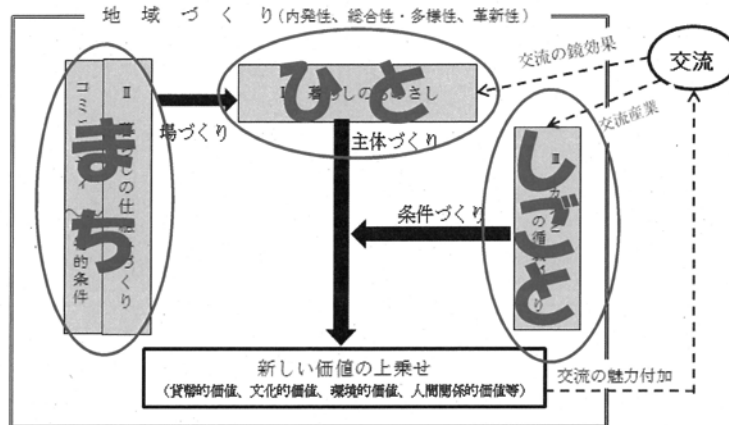
10

II 農山村再生の課題—「地方創生」とは？—

☆それでは、どう地域を磨くか？

■地域みがき（地域づくり）の枠組み

図 地域づくりのフレームワーク



11

II 農山村再生の課題—「地方創生」とは？—

■地域づくりの最重要要素

＝地域に対する当事者意識 (not 危機意識！)

- ・危機意識 (北風路線) →諦め意識、依存意識
- ・可能性の共有化 (太陽路線) →当事者意識

←「誇りの再生」がベース

＝暮らしのものさしづくり

ex. 地域の歴史・文化・自然 (郷土料理、景観・・・)

■そのために・・・

- ①<古くから>公民館運動
- ②<少し前から>地元学 (ワークショップ)
- ③<最近では>都市農村交流 (交流の鏡効果)

12

II 農山村再生の課題—「地方創生」とは?—

■都市農村交流と地域づくり—二つのルート—

- ①交流の鏡効果→「暮らしのもののさしづくり」
 - ・都市住民が「鏡」＝農村の「宝」を写し出す
→農村サイド（ホスト）の再評価
- ②交流産業→「カネとその循環づくり」
 - ・ホストとゲストの「学び合い」が付加価値
→高いリピーター率＝成長産業の可能性

■地域づくりの「交流循環」

- ・上記を通じて、「新しい価値」の更なる上乗せ

※都市農村交流は戦略的活動

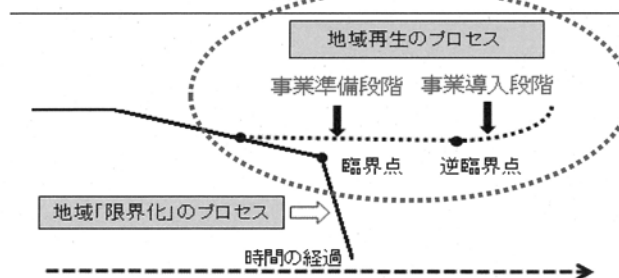
13

III 「地方創生」の実践

☆そのためには、どのようなプロセスが必要か？

■地方創生のプロセス（新潟中越地震からの再生が教えること）

農山村再生のプロセス（概念図）



※二つのプロセス（足し算の段階＋かけ算の段階）

事業準備段階（足し算の段階）＝諦めの払拭プロセス
（特に時間がかかるケースあり）

14

Ⅲ 「地方創生」の実践

■コミュニティ・レベルからの地方創生

1. 徹底したボトムアップ(→地域デザイン<簡素なものでok>)
2. 時間の保証(→5年間程度)
3. ワークショップによる当事者意識づくり
(それを引き出すファシリテーターの重要性)

■市町村段階の「総合戦略」の見直しも

- ・急ぎ過ぎた計画≡依存計画(コンサル・国依存)
- ・動かない計画≡自己満足計画

⇔①コミュニティレベルからの「ボトムアップ計画」

②協働による「動く計画」

※「コミュニティレベルからの積み上げ型総合戦略」に！

15

Ⅳ 地方創生と大学の役割

■大学の二つの「顔」

- ①教員を中心とした大学—専門教育・研究機関
- ②学生を中心とした大学—若者の集う機関

■①=伝統的な<大学—地域連携>

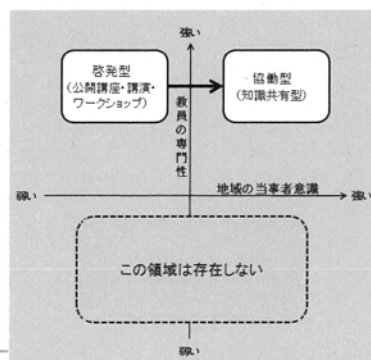
- ・地域のための質的上昇
=専門機関モデル

○啓発型



○協働型

※商品開発などの場合



教員中心の地域・大学連携

16

IV 地方創生と大学の役割

■②=新しい<地域-大学連携>

- ・双方がともに成長=若者機関モデル

○交流型(名称は中塚雅也等)

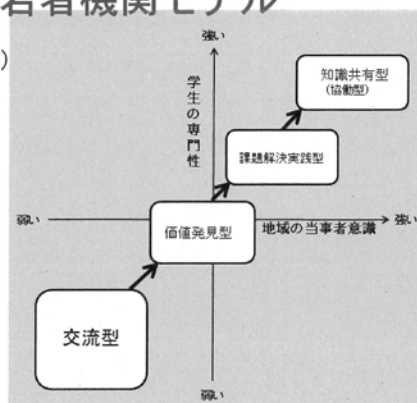
↓
○価値発見型

↓
○課題解決実践型

↓
○知識共有型

※現在の活動が

地域と自分の成長につながる 学生中心の地域・大学連携



17

IV 地方創生と大学の役割

■「若者機関モデル」(新しい連携)の論点

①専門機関モデルとの関係

若者モデル → 専門機関モデル (?)
(足し算の段階) (かけ算の段階)

②入口の「交流型」の重要性

- ・交流型というより「ワイワイガヤガヤ型」
- ・大学生にこそできる「情報発信」

■「若者機関モデル」の課題

- いろいろな段階を一挙に進めることは困難
課題=学生が入れ替わる中で、その発展プロセスどのように乗っていくか?

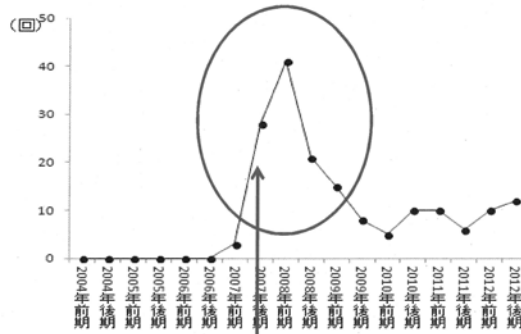
18

V おわりに—「地方創生」の持続化のために—

■ブームでない「地方創生」を！

← 前回の「地域再生」(第1次安倍政権)は政治的ブーム

図 新聞紙上(日本経済新聞)における「限界集落」の登場頻度



注:日本経済新聞(朝夕刊および地方経済面)の「日経テレコン」による本文・文字検索結果より作成。

参院議員選挙での自民党敗北

19

V おわりに—「地方創生」の持続化のために—

■都市住民と共有できる農山漁村の新しい安定的役割

(全国町村会提言「都市・農村共生社会の創造」2014年より)

- ①新たなライフスタイル、ビジネスモデルの提案の場
- ②少子化に抗する「砦」としての場
- ③再生可能エネルギーの蓄積の場
⇒国内戦略地域(国際的戦略物資である食料、水、エネルギー、CO2吸収源の供給地)
- ④災害時のバックアップの場(鳥取県智頭町「疎開保険」)



解釈としての多面的機能論を超える実践的な役割の発揮
都市・農山漁村共生社会の構築

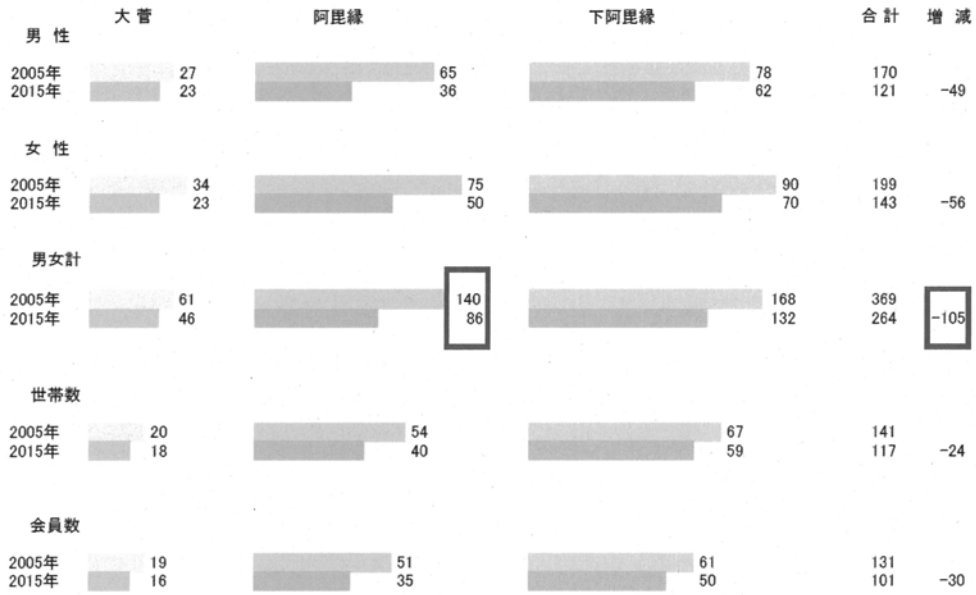
★ご静聴ありがとうございました。

20

○まち協からの活動報告

阿毘縁むらづくり協議会 活動報告

旧自治会別人口 (2005年→2015年)



世帯員数別世帯数 (2005年→2015年)

	実数	増減	含、高齢者	
1人世帯	41		37	
	41	0	36	-1
2人世帯	48		28	
	43	-5	39	11
3人世帯	19		4	
	16	-3	13	9
4人世帯	12		0	
	6	-6	5	5
5人世帯	9		0	
	6	-3	6	6
6人以上	12		0	
	5	-7	5	5
合計	2005年 141		69	
	2015年 117	-24	104	35

※「含、高齢者」とは、65歳以上対象者のいる世帯

男女別年代人口

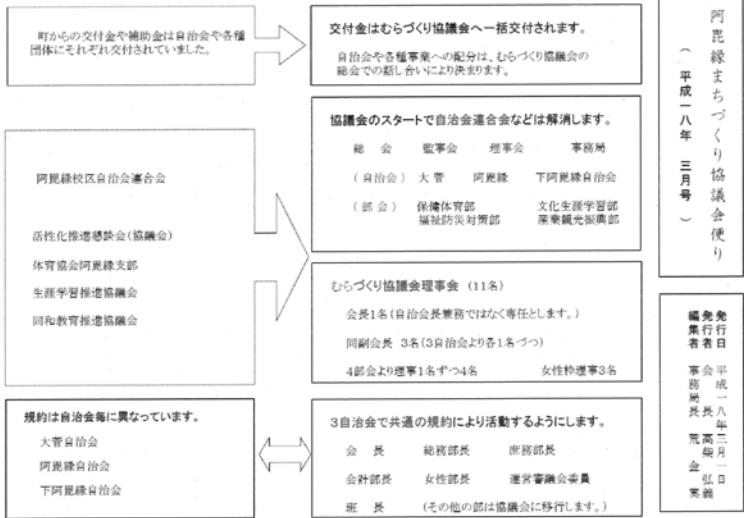
上段 2005年
下段 2015年

年代	男性	女性	男女計
0~9	9 3	11 4	20 7
10才台	14 6	16 9	30 15
20才台	9 6	8 9	17 15
30才代	10 6	14 2	24 8
40才台	23 6	15 12	38 18
50才代	21 24	17 13	38 37
60才代	24 18	36 17	60 35
70才代	42 21	49 33	91 54
80才代	18 25	24 35	42 60
90才~	0 6	9 9	9 15
合計	170 121	199 143	369 264
65以上	77 60	106 88	183 143
同割合	45.3% 49.6%	53.3% 4.30%	49.6% 56.1%
平均年齢	54才 61才	58才 63才	56才 62才

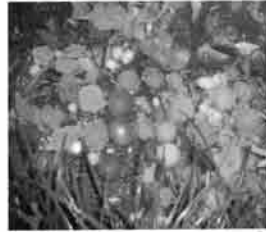
町づくりモデル事業により「阿昆縁まらづくり協議会」を立ち上げ、この間6つの検討部会において33名の委員さんを中心に阿昆縁のさまざまな課題について検討を重ねていただきました。
いよいよ4月より、「阿昆縁まらづくり協議会」の活動が本格的にスタートすることになります。

これまでも「阿昆縁は一つ」の精神で自治会連合会、活性化推進懇談会、生涯学習推進協議会などの取り組みを進めてきました。それらをさらに発展、充実させることを目指して、このたび「阿昆縁まらづくり協議会規約案」と3自治会の「共通規約案」を提案します。皆さんの活発な話し合いとご理解、ご協力をお願いします。

4月より 阿昆縁まらづくり協議会がスタートします (これまで) (これから)



降ひょう被害記録



トマト(伊豆)に雹



二枚葉一色子ゆきす。

農産物被害調査報告書

調査機関(〒500-8501) 農研機構 和歌山県

調査日時(日) 8月29日

和歌山県中地区に降った雹は、この地域では過去50年間で5回ほどしか降っていません。雹は、雲の中で水滴や氷晶が凍りついて大きくなり、落下して氷の粒になります。雹は、降ると非常に危険で、人や物を傷めます。雹は、降ると非常に危険で、人や物を傷めます。雹は、降ると非常に危険で、人や物を傷めます。

発行/調査場 七ひろくろ 電話 500-8511 和歌山県和歌山市和歌山1200 和歌山県和歌山支庁
 電話 055-471-0909 FAX akayama@affrc.affrc.go.jp

平野町南部、稲光と
雹にまつがる雹の粒で記される



雹にまつがる雹の粒で記される



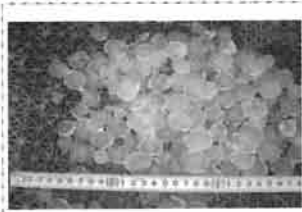
雹にまつがる雹の粒で記される



手の平の雹、雹がくっついて
コンクリートのようでした

ひょうの被害

雹は、直径が5センチ以上の雹の雹で、1センチ未満のものには含まれません。雹は、降ると非常に危険で、人や物を傷めます。雹は、降ると非常に危険で、人や物を傷めます。雹は、降ると非常に危険で、人や物を傷めます。



雹にまつがる雹の粒で記される



阿毘緑自治会（阿毘緑むらづくり協議会）組織図・事業



(専門委員会) 交流活動活性化委員会

日野上まちづくり協議会 活動報告

日野上まちづくり協議会活動報告

日野上集落支援員 中田 玉江



旧日野上小学校校庭の大イチョウ

かわすじ歴史ロード

文化遺産マップ・冊子作成の取り組み

かわすじ歴史ロード



日野上まちづくり協議会



作成の背景

郷土の歴史的な成り立ち、いつの頃からかこの地に人類が住み始め、営々と暮らしてきた様子、代々受け継がれてきた様々な文化など、その存在を語り伝える人も少なくなりました。日野上に存在する、遺跡・遺物、様々な石造物、祠・お堂など建造物を一冊の冊子にまとめておけば、誰もがその存在を知ることができ、後世に残すことができる。

取り組み

- ・平成18年度～平成21年度 文化遺産マップ・冊子作成委員会の設置
- ・現存する遺跡、石造物、神社仏閣、史跡・名勝等の拾い出し作業

各自治会老人クラブ代表、歴史・文化遺産等に詳しい有識者からの聞き取り、文献・資料の引き出し

- ・拾い出した遺産等の現地調査

現存物の確認と写真撮影

- ・遺産等の分類とマップづくり

地図に落とす作業と分類ごとに色分け、写真の選定

分類ごとに項目を設定して説明を付け、名称及び所在地を掲載。写真は分類ごとに主要なものを1枚程度掲載。

- ・平成22年度 配布

日野上地域全戸配布（マップ・冊子セット）、販売（一部300円）



福栄との境界に立つ地藏
(宮内地内)



矢戸 松本清張 先祖の墓



石見との境界標の大岩
(生山)

- ・平成22年度及び24年度 歴史遺産案内看板設置事業

かわすじ歴史ロードに掲載したもののなかから、特徴的なものを選定し、由来を記した案内看板を設置

24年度追加事業 放置されていた石を神社境内に移転安置及び由来案内看板を設置

事業費

- ・平成21年度 23万円

日南町交付金（地域経済活性化交付金）15万円、まち協予算8万円

主な使途 マップ・冊子の印刷製本代 写真代

- ・平成22年度 20万円

- ・平成24年度 17万円

日南町交付金（交流活動活性化交付金）15万円、まち協予算2万円

主な使途 遺跡の整備、看板製作・設置費



素々福神社境内に「鬼の投げた石」とされる石を移転整備（宮内）

かわすじ歴史ロードの活用

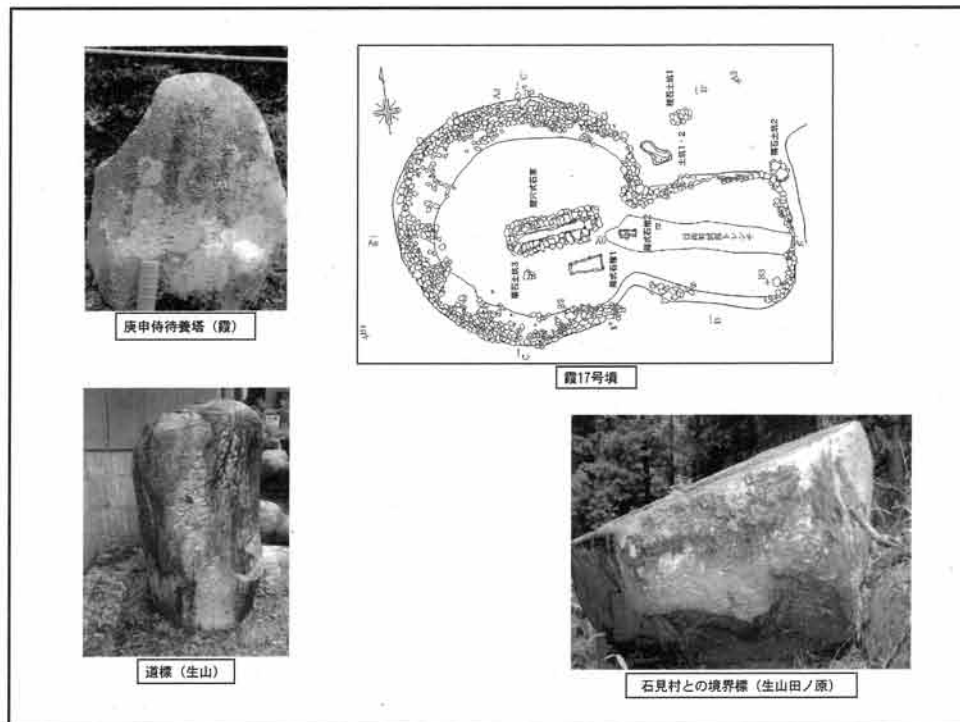
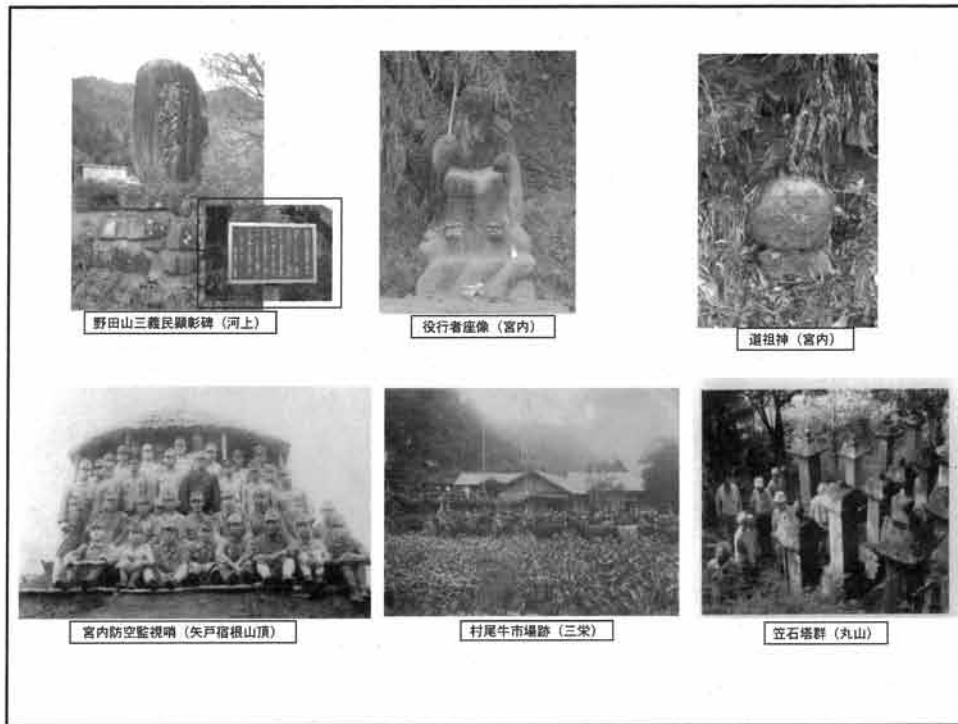
- ・歴史講座の開催

日野上地域一般住民を対象とした講座を開催 平成26年度 4回、平成27年度 2回

- ・かわすじ史談会の結成

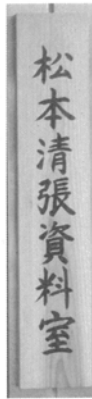
日野上の歴史遺産を語り伝える後継者を育成するため、マップ・冊子作成に関わった人、歴史に興味を持つ人などに声をかけて平成23年に結成

活動内容 文化遺産の学習・・・知識として学ぶ 現地巡検・・・所在地を知り、目で確かめる



松本清張資料室

開設の取り組み



開設の背景

昭和の大文豪「松本清張」の実父は日南町矢戸の出身で、郷里をととても愛し、懐かしみ、大事な場所として息子にも伝えていたことから、清張自身も矢戸を“我が郷里”として深い思い入れがあったと聞く。

日南町は、文学碑を建立し、また美術館内に応接室を再現して、松本清張との関わりを公に示しているものの、やはり、かの大作家との関わりはあまり知られていない。

かつて、日南町を訪問した折りの新聞記事や写真、町内の親戚が保存する直筆の書や絵画など、時代の経過と共に散逸してしまう恐れがあるものを一カ所にまとめ、日南町民はもとより、町内を訪れる観光客などによく知ってもらうため、資料室として設置をすることとした。

取り組み

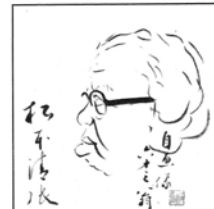
・平成25年度～26年度 松本清張資料室設置事業

日野上地域振興センターの一室を改修し、展示スペースを確保

2009年に生誕100年記念事業を開催した際に収集した資料を点検、一覧表の作成

主な展示物 松本清張と矢戸の関わりを記したパネル、新聞記事や写真の拡大パネル、

直筆色紙や手紙、書籍 等 約50点



事業費

・平成25年度 5万円

日南町補助金（特色ある地域活動補助金）2.5万円 まち協予算2.5万円

主な使途 資料コピー代、写真代、パネル・色紙購入費

・平成26年度 36万円

日南町交付金（交流活動活性化交付金）35万円、まち協予算1万円

主な使途 センター改修費、看板制作費、パネル制作費 等

開所式

平成26年11月13日（木） オープンイベント

「矢戸と松本清張を語る会」と共催

看板の除幕 式典 展示室テープカット



かわすじ歴史ロード



役行者像（宮内）

文化遺産マップ・冊子

かわすじ歴史ロード



日野上まちづくり協議会

いつの頃から、この日野上の地で人類が生活を営み始めたのだろうか。

郷土の歴史的な成り立ち、営々と暮らしてきた人々の様子、祖先から代々受け継がれてきた様々な文化・伝説など、その存在を語り伝える人も少なくなってきました。

こうした状況を踏まえ、日野上まちづくり協議会では平成18年度から文化遺産マップ・冊子作成委員会を立ち上げて、「先人の生活の跡・歴史」を調査しまとめることとなりました。

調査にあたっては、日野郡史や日南町史に載っていない地域の文化財などを中心に掘り起こしをすることにしました。

古墳等の遺跡・遺物、民間信仰に関わる様々な石造物・祠・お堂等、遺産として残っているものを調査対象としました。

調査には、住民の方々、特に老人クラブの各地域会長や歴史に詳しい有識者の方などの情報提供をもとに聞き取り調査、実際の現場へ出向いて踏査・確認・古い写真提供など協力を得て、約4年をかけて「かわすじ歴史ロード」が完成し、平成22年度、日野上地域全戸に配布しました。

案内看板設置

「かわすじ歴史ロード」の冊子完成後、次の段階として、掘り起こした文化遺産・石碑などに案内看板を設置して、訪れる人々への説明はもとより、後世に永く継承していくこととなり、先のマップ・冊子作成委員会が再び中心となって、平成22年度及び24年度の追加事業で取り組みました。



設置された看板例

かわすじ史談会

「かわすじ史談会」は、平成23年度に冊子作成編集委員や歴史好きの人たちが集まって結成されました。これも、「かわすじ歴史ロード」を活かし、地域の歴史遺産を伝承する語り部の育成も目的の一つで、机上学習と日野上全域を巡検する活動が行われています。また、まちづくり協議会の住民学習活動の一環として歴史講座を開講していますが、ここでの講師も務めていただいています。



巡検活動中



歴史講座受講中

日南町ゆかりの文豪『松本清張』

松本清張文学碑

松本清張は、明治42年12月21日福岡県小倉市（現北九州市小倉区）に生まれましたが、父・峯太郎は日南町矢戸の出身です。

昭和27年に「或る『小倉日記』伝」で第28回芥川賞を受賞した後、社会派推理小説と言われる新しい分野を開拓して数々の名作を発表し、幅広い文筆活動はわが国を代表する文壇の巨匠として高く評価されました。

日南町との関わりがわかるものとして「父系の指」や「半生の記」にこの矢戸の地が清張のふるさととして紹介されており、矢戸をこよなく愛した父・峯太郎の切々たる思いが余すところなく描かれています。

日南町は、昭和59年に父祖ゆかりのこの地にその偉業を顕彰するとともに、父同様に矢戸が故郷であるとの想いの深さを表した清張直筆の文学碑を建立しました。

その後、平成21年から始まった国道拡張工事によって公園敷地が約半分の広さになってしまい、観光地としての機能を果たさない状況を憂た、まち協をはじめとする地域が改修を強く要望。文学碑建立30年を経過した平成26年度には要望が認められて、狭くても見ばえのよい公園に生まれ変わりました。



日南町ゆかりの文豪 松本清張
生誕100年記念事業
報告書

生誕100年記念事業

平成21年は、松本清張の生誕100年にあたることから、日野上まちづくり協議会では実行委員会を組織して記念事業を実施しました。

主な内容は、日南町と松本清張の関わりを周知することを主眼として企画、

資料展、「松本清張と矢戸」を語るコーヒーショップの開催、「ゆかりの地」をめぐるウォーキング、記念講演会の開催、記念切手の発行、文学碑公園に案内看板設置、そのほか関連イベントを含めて2年に渡って取り組みました。事業費は、鳥取県と日南町の補助金のほか、文学碑が建立された当時の寄付金残金を特別助成金というかたちで引き継いで実施することができました。

その後、平成22年には実行委員会の呼びかけで「矢戸と松本清張を語る会」が結成され、文学碑公園の整備活動や清張文学を親しむ活動を継続されています。



日野上まちづくり協議会
松本清張生誕100年記念事業実行委員会

松本清張資料室



生誕100年記念事業の際に集めた多くの資料や写真等のパネルを今後にかつぎに生かすこと、もっと多くの町民や清張ファンに日南町と松本清張の関わりを知ってほしいとの思いから、平成26年11月13日、日野上地域振興センター内に松本清張資料室がオープンしました。

これには、日野上まちづくり協議会が交流活性化交付金事業を活用して整備しました。

松本清張資料室



父・峯太郎のこと、清張直筆書画、日南町訪問時の新聞記事パネルなど、北九州の「清張記念館」には無い資料が展示してあり、文学碑公園に近い場所なので、公園と資料室セットで見学することができ、オープン以降多くの清張ファンが遠方からも訪れています。

福栄まちづくり協議会 活動報告

福が栄える縁起の良い地域 !!

ふくさかえ

福栄まちづくり協議会



鳥取県指定無形民俗文化財「福栄かしらうち」
8/22 トワイライトエクスプレスおもてなし JR生山駅

「福栄神社」による観光活動

福栄天体界道ウォーキング大会

福栄地域全戸屋号調査

「福栄神社」による観光活動



所在地 鳥取県日野郡日南町神福
 所有者 宗教法人 福栄神社
 竣工年月 古棟札：宝永3年（1706年）
 沿革 「タタラ」に由来する福栄神社は、古くは田中大明神と唱え、当時の郷内9ヶ村の産土神として信仰を集めていたが、大正2年12月26日、近隣の神社を合併し、豊栄・神福・福塚の縁起の良い地名を持つ社地を妙見山麓に合祀して、福が栄え、幸せを呼ぶ「福栄神社」と改称
 祭神 玉依姫命（たまよりひめのみこと）
 媛蹈躰五十鈴姫命（ひめたたらいすずひめのみこと）

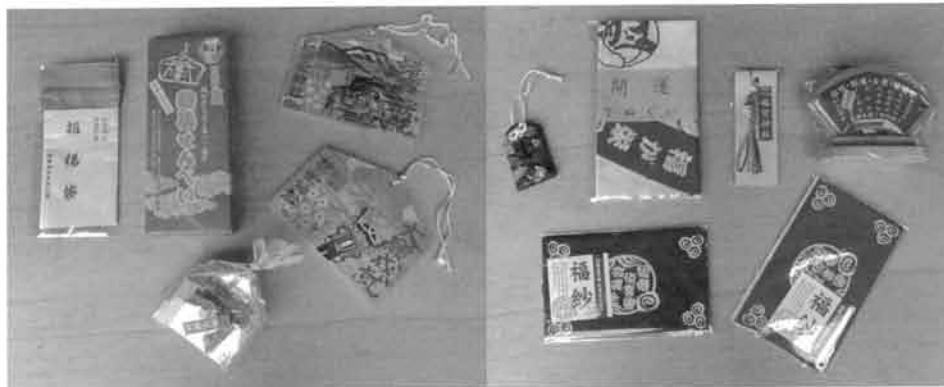
「福栄神社」による観光活動



年末ジャンボ宝くじ当選バスツアー



「福栄神社」による観光活動



福栄神社のお土産品



染料はガマスミを使用



福栄天体界道ウォーキング大会



平成27年 10月18日(日)
受付 9:00 開会 9:30 スタート 10:00

集合場所 旧福栄小学校 (受付: 体育館)

参加料 お一人様 500円 (当日集金します。O備費保険料を含みます。)

申込締切 10月9日(金) 定員100名 電話、FAX、または直接申し込み下さい。

コース 旧福栄小学校→天来寺→福栄神社→井上靖記念館→旧福栄小学校 (約6km) (シルビョウウォークでの参加可。当日に詳しくありますが、ポータル参照します)

◆9:00 受付開始 旧福栄小学校体育館

◆9:30 開会 旧福栄小学校

◆10:00 スタート 旧福栄小学校

◆12:00 ゴール 旧福栄小学校

◆13:30 閉会 旧福栄小学校

※当日参加費の方は800円にて参観します。参加申込時に併せて予約願います。



第6回コース
旧福栄小学校(スタート)
↓
玉泉寺
↓
福栄神社
↓
井上靖記念館
↓
曾根の家
↓
白谷集落
↓
旧福栄小学校(ゴール)

福栄地域特産 豪華景品を準備!!

多数のご参加をお待ちしています...

福栄地域全戸屋号調査



屋号の地図への書き込み 200戸



いいですね

どげなかや？



完成 !!



ご清聴ありがとうございました

ぜひ福栄にお越しく下さい



山上まちづくりの会 活動報告

ヒメボタル保護とまちづくり 10年のあゆみ



山上まちづくりの会
会長 坪倉 幸徳

山上まちづくりの会発足 平成14年

町の住民参画まちづくり事業として5自治会を横断する形で発足
平成17年にモデル地区活動を経て

新生『山上まちづくりの会』として再編成

日南町の目指すべき方向

- 行政と地域のコミュニティの協働
- 人づくりと組織づくり

地域の実情

- リーダーが高齢化
- 若者の地域活動への参画が少ない

新しい『ひとづくり、組織づくり、
まちづくり』

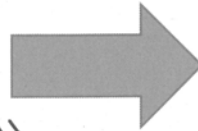
平成17年7月16日
山上まちづくりの会
設立総会

〈主な合同事業〉

- 山上盆踊り大会
- 山上文化祭

〈新たな部の活動開始〉

- 産業振興部
- 自治振興部
- 住民学習部



平成27年現在

〈合同事業〉

- 山上盆踊り大会
- 山上文化祭

〈各部の活動〉

- 産業振興部
- 自治振興部
- 住民学習部
- 自治防災部
- 厚生体育部
- 福祉生活部
- 広報部

ヒメボタル保護活動発足の経緯

平成14年

通称『むじなボタル』『しいらボタル』と呼ばれていたものが、鳥取大学日置教授から『ヒメボタル』であると知らされる。

平成15年以降

観察に訪れる方が多くなり車のライトを山に向けたり、懐中電灯で山を照らす人が有りヒメボタルが減少。これを危惧した有志が遮光ネットを設置。



保護から情報発信へ エコツーリズムへの移行

エコツーリズムとは、地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指していく仕組みです。観光客に地域の資源を伝えることによって、地域の住民も自分たちの資源の価値を再認識し、地域の観光のオリジナリティが高まり、活性化させるだけでなく、地域のこのような一連の取り組みによって地域社会そのものが活性化されていくと考えられます。

平成23年度



ヒメボタル
キャラクター作成グッズ第1弾

自治振興部

福ひかる
万来あかり

グッズ

- Tシャツ
- うちわ
- シール
- 保護啓発チラシ

東京農大『農友会ローバークルー部』
大草山森林ボランティア

厚生体育部

大草山登山道整備



平成24年度

自治振興部

ちゃんねる日南
中海テレビ放送
NHKテレビ
BSSラジオ
山陰中央新報
じげ風呂 ホタル情報発信

情報発信&グッズ 第2弾



- 新Tシャツ
- うちわ
- 缶バッジ
- ホテルのおしり（飴）
- タオル
- ポストカード



やまがみ今昔
～語りつくふるさと～



日南小学校統合とともに子どもたちが地域を知らずに大きくなってしまいう危機感から歴史書作成委員会の立上げ
山上地域伝統文化継承のため歴史書完成

『やまがみ今昔 ～語りつくふるさと～』

住民学習部

平成25年度

平成23年から実施している
アンケート調査による要望の対応

平成23年
駐車場整備
売店設置

平成24年
ベンチ設置

平成25年
観賞地内案内
マップ作成

平成26年
駐車場増設
観賞道新設

自治振興部

産業振興部

平成22年から『楽しく暮らすための
コミュニティビジネス』として
こんにゃく栽培・加工・販売



平成26年度

自治振興部

■株式会社チロル観光による
ホテルツアー

ヒメホテル夜空散歩

『楽しく語らいやの会』in福万来



一緒に楽しく調理実習、食事の大切さの勉強を行いました

福祉生活部



山上まちづくりの会全体事業

平成26年度

内藤岩雄展示室

『郷愛の館』

生誕140年



2年ぶりに屋外で開催できました

文化祭と同時オープン
沢山の皆様にお越しいただいております



平成27年度

山上盆踊り大会

平成27年度及び今後の予定

- 日南小学校3年生とともにホタルの養殖に取り組む
- 平成28年第49回全国ホタル研究会鳥取県よなご大会開催に向けた準備
- 鳥取大学学生によるヒメボタル幼虫の分布と環境を把握するための調査協力
- 内藤岩雄100周年事業として大草山『大正』文字植林の中を歩く登山イベント
- 『大正』100年木を使ったテーブル、イスを作り内藤岩雄展示室『郷愛の館』に展示

10年を振り返り今後の課題

行政が指導してきた行政と地域コミュニティの協働、人づくりと組織づくりは出来上がってきたように思う。

しかし、地域の実情として挙げていたリーダーが高齢化、若者の地域活動への参画については、10年経った今でも課題として残っている。



町の取り組みの中で1ターン者が徐々に増え始め、地域の行事にも参加してもらっている。今後は参画から関わっていただけるような組織づくりが必要である。

また、地域内の若者のリーダーを育成し、地域づくりに参加してもらえそうな組織の立上げを行う必要がある。

ご清聴ありがとうございました



M. Aimi

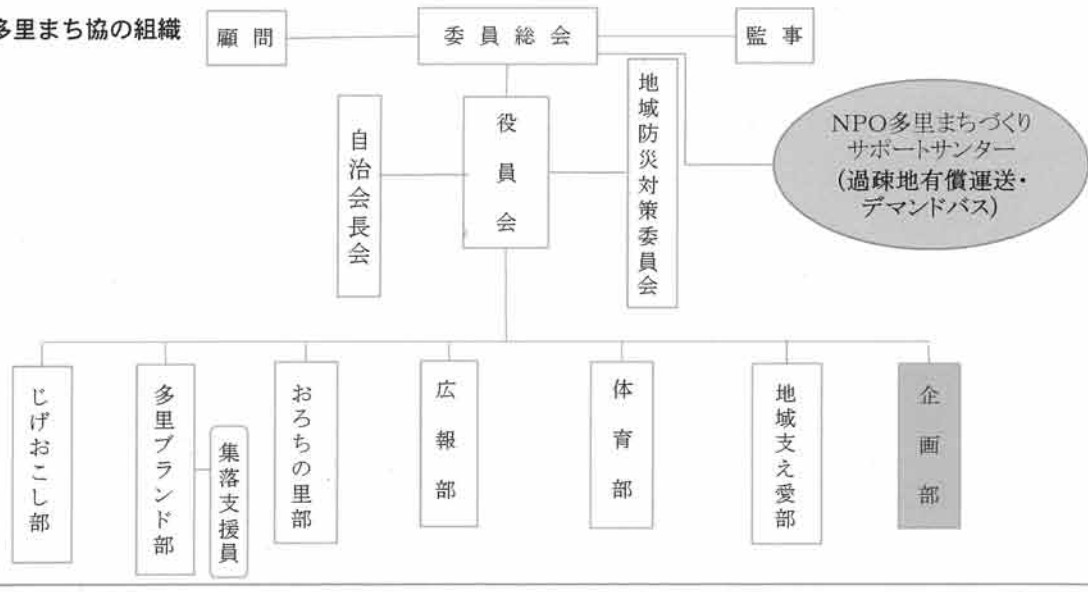
多里まちづくり推進協議会 活動報告

まち協10年の歩み

鳥取大学との連携から考える
多里まちづくり推進協議会の軌跡

多里まちづくり推進協議会

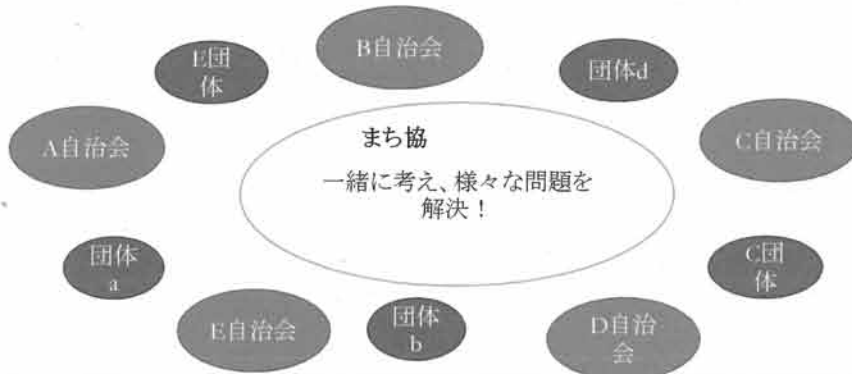
多里まち協の組織



1. まち協と自治会の役割



自治会は今のコミュニティーを守り維持していく役割
まち協は、これから先の多里をどう盛り上げていくか
どう攻めていけば地域活性化に結びつけることができるかを考える役割



2. コミュニティビジネス



住民・・・年収+αを目指し

まち協・・・自己資金を増やし、事業拡大を



3.マンパワー不足を補う

そうだ！学生人材バンクさん
にお願いしよう！



少子高齢化で地域に負担ばかりかかるのでは？

外部の人と
楽しみながらの作業



4.大学との連携から



例 1: ハーブ植え付け・剪定作業



例 2: オオサンショウウオ保護活動

これからの協議会は・・・

これから本当に必要な連携とは・・・？

それぞれの協議会で生まれた活動が、
どう参画していけるか！

そのコーディネートを誰が行っていくか！

協議会の活動を、日南町の活動に広げていく

コーディネーターの方々が、
ネットワークにかかっている



地域づくり大会実践報告発表原稿

まち協 10 年間の歩みと考察 ・ ・ 鳥取大学連携から考える ・ ・

パワポ表紙 1

多里まちづくり推進協議会は、「会員相互の連携により、多里地域の活性化を図り、明るい多里地域づくり」を目的として平成 18 年 2 月 27 日に、結成されました。その 10 年間の主だった事業や鳥取大学との連携事業を振り返ってみたいと思います。

多里まちづくり推進協議会はこのような組織で運営されています。これは随時必要に応じて増えてきたものです。この部会には、自治会を始め従来多里地域にあった組織が入って活動しています。

防災組織に関しても従来のものとは変わり、地域で防災本部を立ち上げることで、指示を出すのも報告を受けるのも一箇所にとまどめて行うことが出来るようになりました。自衛消防団の団員不足も懸念される中、いざというとき協力して地域の防災を考えていこうという体制になってきました。

まち協結成当時は、いったい何をどうすればいいのか暗中模索の状況でした。とりあえず、地域の問題点を探ることから足がかりを見つけることとし、多里地域内公共交通空白地帯の解消を目標に活動を始めました。

②デマンドバスの様子

地域内には、上萩山を始め国道沿いのバス路線から離れた地域があり、バス停から 5~6km 徒歩で帰宅するところが多く存在し、高齢者にとっては大きな問題になっていました。大学の指導の下、公共交通空白地帯無料バス社会実験を行い、空白地帯の実態調査を行いました。これは、担当者の車を借り上げ、自宅から最寄りのバス停あるいは多里地内への輸送を無料で行うもので、当時の池内豊会長が、自ら名乗りを上げていただき、実験を行うことが出来ました。この社会実験を行いながら、平成 20 年 NPO 多里まちづくりサポートセンターを立ち上げ、過疎地有償運送とデマンドバスの運行を開始することになりました。現在は、全 5 自治会が準会員となり、多里地域住民はすべてこのバスを利用することができます。

③組織図

このように新しく住民参画のまちづくりを考えるには、まず組織づくりが大切でした。自治会を始め地域内の諸団体に参加していただき、今行われている

事業を連携させていきながら地域づくりに活かしていきたかったからです。しかし、それをコーディネートしていくには、シンクタンクの役割が必要です。そこで、

企画部をつくり、積んだり崩したりして役員会に提案できるようにしました。会長・副会長のほか、地域担当職員や旧リーダー塾生・その他議題によって関連する代表が参加できるようになっています。設立当初は、ずいぶん企画部牽引型で事業が進んでいたように感じています。

しかし、公民館から協議会へとシステムが大幅に変わっていき、住民参画のまちづくりについて地域の中では、なかなかはじめず、役員会でも「まち協とは何か?」「自治会は、まち協の下になったのか?」などの意見が毎年のようにでました。地域住民は、一部の人間ではなく、地域住民すべて会員であるということやまち協の活動が伝わらず、すぐには認知されませんでした。

④役割の図

役員会では、まち協と自治会の役割について、次のような説明を何度も行いました。

自治会は、今のコミュニティーを守り維持していく組織であり、自治会から班、そして個人とつなげる役割を持っています。

まち協は、これからの先の多里をどう盛り上げていけるか。どう攻めていけば、地域活性化に結びつけることが出来るかを考える役割を持っている。

だから、まち協をひとつのテーブルと考え、その上で、各自治会がおのこの抱える問題点を持ち寄り、地域の団体を含め、みんなで解決していこうとする場がまち協であると。

そして、企画部でも、「明確に自治会に対して役に立つまち協でなければ、存在は認められない。」という反省を基に、第2次5ヶ年計画では、自治会事業のマンパワー不足の解消に着目して素案づくりを行いました。

⑤野菜販売の写真

攻めるまち協の形のひとつを紹介します。地域活性化を目指す中で大切なことのひとつは、経済活動です。地域住民にプラスアルファの収入が入り、高齢者生きがいにつながる事業として、各戸の畑であまった野菜を米子青果に出荷するフレッシュ多里事業がそのひとつです。

最初は売り物になるか心配された出荷事業も、市場と年数回の研修会を続ける中、米子市内のスーパーに専用ブースが作られるまでになりました。自分たちの作ったものに価値を見出し、少しでも孫にこづかいがやれると生きがいにつながり、作付け量も増えています。今では、多里の特産品にしようと肉厚の大ピーマンを共同出荷するまでになりました。

まち協は、出荷の手伝いをするこゝで5%の手数料をいただき、自己資金としています。また、公民館活動からのつながりで、米子市啓成公民館祭での畜産品販売等も行い、これらの自己資金は、まち協運営上とても大切に各事業に

拡大の手助けとなっています。

⑥桜公園・火の祭り

地域のマンパワー不足を解決する事例を紹介します。

これは、地域内の慰霊碑周辺に遺族会が植樹された桜の木です。密集した桜の木は、生育が遅れたり、病気になったりしていましたが、遺族会も高齢化が進み、維持管理が難しくなりました。自治会も同じです。そこで遺族会・自治会を中心に「桜公園を守る会」を結成していただき、まち協じげおこし部の事業として地域内外に呼びかけ、年次計画で年2回の下草刈りと伐採作業を行うことにしました。翌年にはきれいな桜の花が咲き、地域の方々にも喜ばれました。

この写真は、多里の愛宕さんと協賛した多里の火祭り(多里是好日)の写真です。昔は、愛宕さん祭りは多里の子ども会が約100段もの石段にろうそくをともしてにぎわった祭りでしたが、近年子どもの数も激減し、自治会も高齢化でマンパワーも弱まり、寂しい祭りが続いていました。そこで、まち協じげおこし部の廃食油回収とコラボしてエコろうそくの火祭りを行うことにしました。昔の賑わいを取り戻すことで、地域の方々から笑顔で「きれいだったわ」

「久々に賑やかな祭りになった」といって声をかけていただけるようになりました。まち協の認知度も少しずつ広がってきていると思います。これらの活動には、鳥取大学学生バンクの方々が大変お力添えいただいています。あらかじめ事業の内容を伝えて、協力していただく学生に来ていただくのですが、地域の方だけではどうしても足りないところを助けていただきました。地域の方々との交流も図られ、スムーズな事業の実施も行われます。皆さんも検討されてはいかがでしょうか。

⑦鳥取大学連携事業

先ほどの学生との協力もですが、鳥取大学との連携事業もいろいろありました。平成19年度には鳥取大学日置教授にご指導いただき、船通山や出立山の樹木板(木の名前)の作成・取り付けを行いました。これにより地域にどんな宝があるのか、何を中心に地域活性を目指せばいいのかなどを考えることができ、多里の鉾山やオオサンショウウオなど地域の宝に芽を向けるツーリズムの足がかりとなりました。こういう出会いが、展示室の開設から昨年度の地域ガイド養成にもつながることになったと思います。

また、当時鳥取大学の研究員だった岡田純先生との出会いは、特に「多里におおさんしょうおあり」という活動の出発点になりました。あまりにも当たり前の存在であるおおさんしょうおにいかにも価値があるのか、自分たちの住む多里の地が、貴重なおおさんしょうおの命をつなぐすばらしい土地であるのかに気づかせていただき、誇りを持たせていただけたように思います。この地で行われたおおさんしょうお全国大会は、地域住民が力を合わせた今尚語り継がれる大会になっています。

産官学連携事業で、アロマオイルの研究も行いました。認知症予防の国内産のハーブオイルをとということで栽培実験を行いましたが、自然環境に合わず栽培はうまくいきませんでした。しかし、その特性を活かし森林資源(おろちの芯材)を使って同じような効能が期待できるのではないかという和のアロマ事業が引き続き立ち上がりました。ヒノキやクロモジなどの商品化も出来ましたが、研究はあくまで研究であり、事業化となるとまち協には荷の重いものになります。事業自体の需要は全国的にもあり、他県では、実際に事業化の進んだところもあるようですが、産官学の研究母体は、平成 26 年度には解散となっております

⑧最後に

この様に 10 年間の活動を振りかえってみますと、それぞれのまち協がそれぞれの芽を出す 10 年であったと思います。そして少しずつ成長した時期ではなかったでしょうか？しかし、これからどんどん少子高齢化の進む日南町では、同じような歩みでは発展はないと考えます。「まち協の連携」といわれますが、これから本当に必要な連携とは、イベントの連携ではなく、それぞれの協議会で生まれた活動の芽に興味を持ち、賛同される方々が、どう参画していけるか、そのコーディネートを誰が行っていくかということに尽きると思います。

多里での活動が日南町の活動に広がっていく、多里の人でも他地域の活動に参画して広げていける 10 年をみなさんと力を合わせて作っていきたいと思っています。

大宮まちづくり協議会 活動報告

大宮まちづくり協議会



1. 鳥取大学との連携事業

鳥取大学地域学部と大宮地区との連携事業

平成18年度「日南町大宮地区におけるむらおこしSWOT分析」を実施

平成19年度「日南町におけるデジタル地域資源マップ・登山マップ」を作成

平成20年度「日南町大宮地区における地域資源マップと四季暦」を作成

平成21年度「大宮ガイドブック『里山おおみや』」の原稿作成

平成22年度「大宮里山まつり」の改善案の検討

平成23年度ヘルスツーリズムを目指したウォーキングコースの実証的検討

平成24年度「食・健康・運動」を中心とした地域づくりの検討

平成25年度集落食堂と地域共同売店の検討「食」という地域資源の活かし方

平成26年度日南町大宮における地域資源を活かした生きがいつくり



鳥取大学生が大宮に滞在し、地域の人たちとふれあう



12月には成果発表が行われている



2. たたらの楽校

大宮地域振興センターに、「たたら楽校」があります

「たたら楽校」とは…

「伯耆国たたら顕彰会」が中心となり設立。

たたら製鉄の中心となっていた、根雨、大宮にたたらに関する資料などを展示している。

大宮楽舎

「たたら」の「いろは」とヤマタノオロチ伝説を学ぶ。

根雨楽舎

近藤家に残された膨大な古文書からもうひとつの『坂の上の雲』を読む！

たたら
の
楽校



大宮楽舎には・・・
全国でも良質な玉鋼であった「印賀鋼」を中心に展示。
たたら操業の方法や、大宮でのたたら暮らしなど、
たたらに関する歴史を展示している。

3. 里山まつり (ダム見学会)

水に親しむ日

大宮里山まつり & 菅沢ダム見学会

7月20日(日) ■場所■ 菅沢ダム (日南町菅沢)
朝9:30～夕方16:00

*朝は「菅沢ダム遊歩センター」に集合してください。
当日は遊歩センターと菅沢ダムの間を徒歩約15分、バス約10分で行きます。

■大宮里山まつり

「フリーマーケット」
紙おむつ、おむつ、おむつ、おむつ

「大宮 夏の広場」
物産展、おむつ、おむつ、おむつ

「大宮のお宝 展示」
おむつ、おむつ、おむつ、おむつ

「大宮おたのしみ スタンプラリー」
おむつ、おむつ、おむつ、おむつ

「大宮自然素材のホルボロド壁掛けづくり」
おむつ、おむつ、おむつ、おむつ

「焚火に楽しむ そば打ち体験」
おむつ、おむつ、おむつ、おむつ






大宮 食の広場



そば打ち体験



ダム湖内見学



ダム内部見学

■菅沢ダム見学会

「ダム内部の一般公開」「ダム湖内見学」

? 当日、会場でアンケートにお答えいただいた方には
菅沢ダム特製カードをプレゼントいたします!!

会場までのアクセスは、裏面を参照ください。

■主催 ■ 大宮里山まつり実行委員会

■お問い合わせ ■ 大宮地域振興センター (TEL・FAX 0859-01-0911) / 菅沢ダム管理事務所 (TEL 0859-07-0311)



4. ふるさとだより

ふるさとだより
おおみや

NO. 1
2007年4月25日

第1号は2007年4月25日発行。

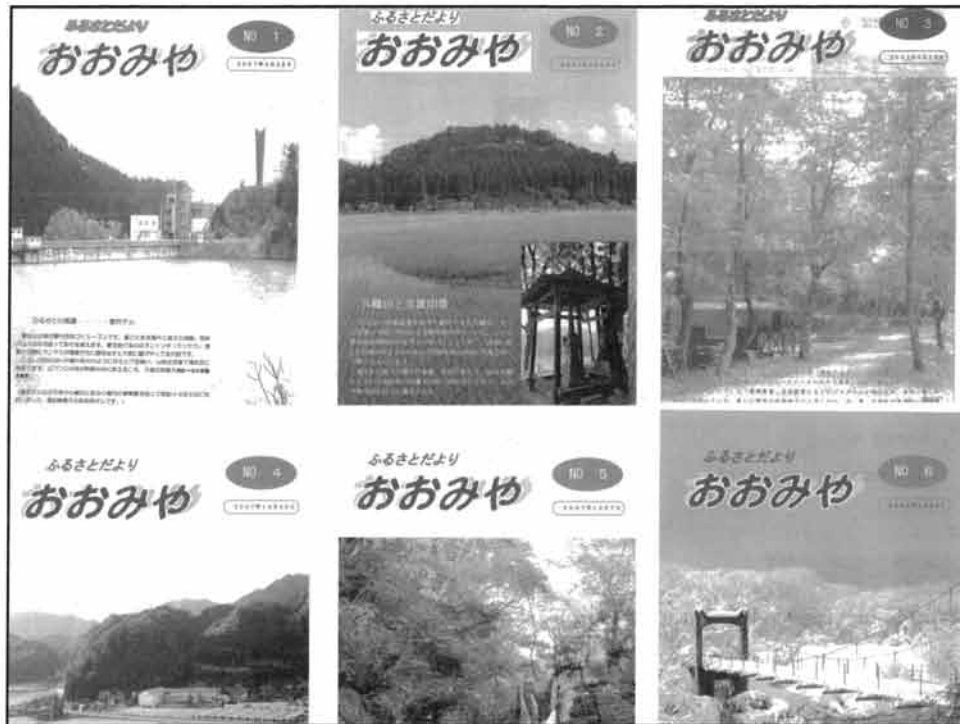


以降、2ヶ月に1回の間隔で発行を続けています。

ふるさとの風景・・・暫沢ダム

暫沢山の雄姿が望める風景です。また、水質浄化と発電の施設、同年
10月1日をもって移転を完了しました。移転後の様子（マンウの、世
界の各地でマンウが産む卵は産まないと共に、卵がやわらかい状態です。
三つ子の卵は卵の殻の殻のように打ち上げを繰り返す。卵が産むまで卵殻に
産まれます。三つ子の卵が卵殻の中に産まれます。卵殻は産む卵殻→卵殻
産まれます。

（暫沢ダムは、暫沢山の山頂と麓の間の間に建設され、2007年4月に完
成しました。暫沢山の暫沢ダムです。）



ふるさとだより
おおみや No.51

成人おめでとう

今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。

ふるさとだより

おおみや

No.51

大宮の花火

今年も、大宮の花火大会が開催されます。今年も、大宮の花火大会が開催されます。今年も、大宮の花火大会が開催されます。

ふるさとだより
おおみや No. 1

ふるさとだより
おおみや No. 2

ふるさとだより
おおみや No. 3

ふるさとだより
おおみや No. 4

ふるさとだより
おおみや No. 5

ふるさとだより
おおみや No. 6

ふるさとだより
おおみや No.51

成人おめでとう

今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。

ふるさとだより

おおみや

No.51

大宮の花火

今年も、大宮の花火大会が開催されます。今年も、大宮の花火大会が開催されます。今年も、大宮の花火大会が開催されます。

ふるさとだより
おおみや No.51

成人おめでとう

今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。今年も、ふるさとだよりが、大人になりました。

ふるさとだより

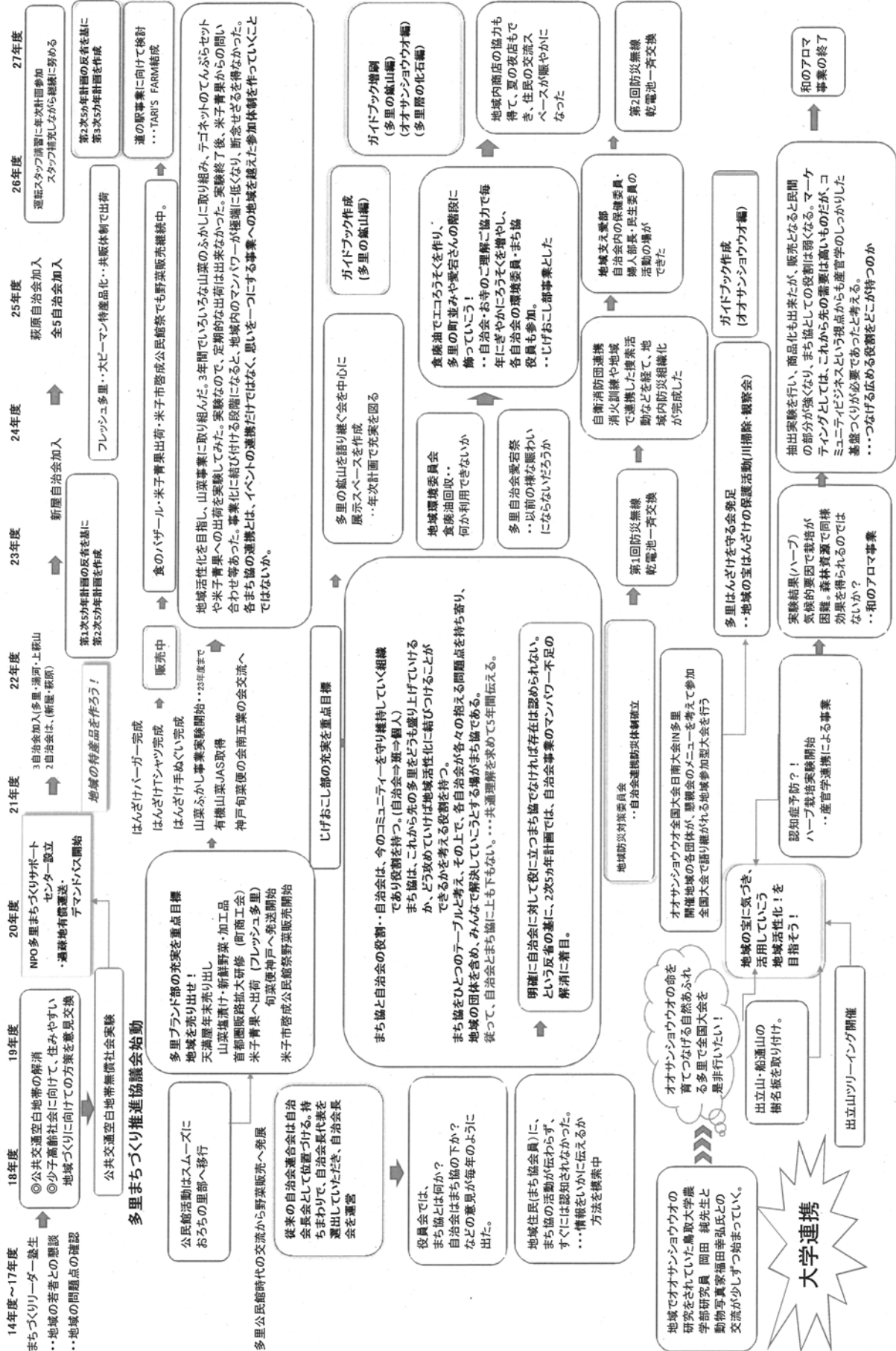
おおみや

No.51

大宮の花火

今年も、大宮の花火大会が開催されます。今年も、大宮の花火大会が開催されます。今年も、大宮の花火大会が開催されます。

多里まちづくり推進協議会10年間の歩みと課題



○トークセッション

テーマ：「大学連携と町づくり」

進行役 : 日置佳之教授

パネラー : 鳥取大学より

日南町より

多里まち協より

大宮まち協より

豊島学長・福田恵子教授

増原町長

荒木定美・秋末道江

古都純孝・段塚芙美・井上輝之



日置教授：

短い時間ではありますがトークセッションを始めようと思います。今回2つのまち協に代表して来ていただきました。進め方としては、まずまち協の方からいろんな学生が入っているいろんな活動をしてきたと思いますが、その報告として良かった点、いまいちだった点をざっくばらんに話していただけたらと思います。その後、お2人の先生方からコメントをいただき、おしまい町長・学長から今後の在り方についてのお話をさせていただく、というような進行で進めていこうと思います。

荒木さん：

多里まち協としては、学生が来てくれたことにより活性化に繋がるような働きをしてくれたように感じています。また日置先生には多里地域、大宮地域を含め、日南町のために尽力していただきました。オオサンショウウオに関しては、まち協が出来る以前から川の調査のために先生に来ていただいて、多里地区に常駐もしていただき地域と一体となっていると感じました。オオサンショウウオが棲む素晴らしい自然を伝えていくという活動を我々はやってきました。多里地域としては学生や先生に来ていただくことによって、楽しく過ごさせてもらいました。

秋末さん：

我々が当たり前と思っていたことに気づかせていただき、ありがたく感じています。例えば、出立山は石見の花見山と同様にイベントを行うには最適な場所であることが出来ました。また、研究の話が持ち上がり、町のアピールとなるような活動を行う中で、監修や定住、ガイドブックなど人間関係が出来ていったり、お付き合いをさせていただく中でお願いすることもできるので、手作りの展示室やガイドブックであっても、中身が大変質の高いものを提供することができたというのは、大学の側では研究の立場であっても、我々地域の側では非常に役立ち、それを利用させていただくような形になったと思います。



先ほどの、イベントを行うには最適な場所であると分かったところまではいいが、それをどう活用していくかという話になると、我々の時代だけではどうしようもない問題であると思うので、「これは自分たちでできること」「これは誰かの力を借りなければできないこと」ということを知れた10年であったと思います。

井上さん：

大学と連携を始めたころの話をしようと思います。まちづくり協議会が直接関わりを持ったのは平成20年からです。まち協の方から今度鳥大生が地域づくりで大宮に入ってくるからちょっと関わってくれないかと持ちかけたのがきっかけです。自分も若い人たちと関わってみようかという軽い気持ちでした。当初は個人的にお付き合いをしていけばいいのかなという気持ちだったが、話を聞いていくうちに大変な話を引き受けてしまったと感じたのが一番最初です。

学生が大宮地区を歩くので特徴的な所を紹介してほしいから、紹介できる人を何人が連れてきてくれないとか、あるいは学生の懇談会をするのに大宮のことをよく知っておられる方を集めてもらえない

か、などといったことがありました。加えて先生が9月に来られるのでちょうど農繁期と重なり、大変忙しい中で人集めをするのは大変だったが、大宮の人は最初から付き合いいただけたので、ありがたいなと感じました。



学生たちと触れ合う中で考えたのが、せっかく学生たちが大宮にやってくるのだから、この学生たちの力を我々まち協に貸していただけないだろうかということでした。先生とも話し、まち協の活動の一端を担っていただいて、我々と一緒に活動をしていければと思いました。先ほどの話にもあったマップ作りや、ガイドブック作成に学生たちに携わってもらい、あるいは伝統的な祭りも何もしなければマンネリ化してしまうので、そこに学生たちに参加していただいて、何か新しいことはできないかという提案をしていただければと思います。学生とまち協とが一体となり、活性化に向けて動き出していければと思います。

おかげさまで態勢が取れだし、最初は不安定であったが、現在はきちとした体制がまち協の中に組み込まれ、今後もこういった形で続いていくのではないかと感じています。

古都さん：

過疎高齢化が進み、大宮ではこの10年で100人ぐらい少なくなり、大宮小学校がなくなってさびしくなり、大宮のまちは最近は大宮さえ通らない、しかし、鳥大生が来ると急に賑やかになる。一泊二泊ではなく一週間でも来て欲しい、そう思っております。

毎年学生が15人ぐらい来ますが、もうそれだけで地域の活性化になる気がします。まち協としてはできるだけ協力したいと思っております。今日も表彰を受けられました段塚さんは、当初から学生の寝泊りを担当しておられました。やはり、この方が一番苦労があったんじゃないかと思っております。

大宮だけでなくよその自治会にも行って、この賑やかさを分け与えてもらえるようになればよいと思います。うちに来てほしいという他の自治会の声をチョコチョコ聞いております。

日置先生：

段塚さんには、私の研究室のYという学生がオオサンショウウオの研究をしていたときにものすごくお世話になり、最終的にはここに定着することになりました。個人的にこの場を借りてお礼申し上げます。

段塚さん：

鳥取大学の学生さんたちのお付き合いは10年になります。私たち何にも組織がないところに急にこられて、何泊かするので3食作ってくださいといわれたら、てんやわんやで本当に分からなくなっていたと思うんですが、幸いなことに、私たちの大宮校区では、22年前から給食ボランティアというものをしております、二十数人の女性が集まって月2回独居老人とかにお弁当を配達していました。そういう下地がありましたので、すぐさっと受けることができました、そのことはよかったなあと思ってお

ります。

それから受け入れ体制で困ったのがお風呂の問題です。学生がだんだん増えてきて、それまで2軒で分担していましたが、それではまかないきれなくなって、グループで分かれて入ってもらうようになりました。それから、一番困ったのがお布団の問題でした。私たちの大宮校区の自治会館には布団がなく、筒井先生が多里まで借りに行っており気の毒になりました。微力ではありますが、お布団を安物ですが用意して寄付をいたしまして、今に至っております。

私も若い人たちが来ると本当にうれしく、お彼岸ぐらいに来られますと、うちで十何人かの男の子と女の子の学生と一緒におはぎを作って、ワイワイ言って賑やかに食べたりしました。受ける方としましても、本当に若いエネルギーを頂き、こちらも楽しくさせてもらっています。



福田先生：



私は筒井先生に引っ張られて大宮に来るようになり4年目になります。最近、私の関係の学生が増えてきて、印賀の自治会館だけでは寝泊りができなくなって、昨年は宝谷と印賀の自治会館を占領して、3泊4日の合宿をさせていただいているような状況です。

さきほど段塚さんがおっしゃられていましたように、学生たちがお風呂を借りに行くんですけど、夜中を過ぎても帰ってこないんですよね。お風呂に行ってそのまま段塚さんの家でずっとお話をしているんです。私が迎えに行くと、私までも話がはずんで、話だけでなく飲み物やお菓子やら次々に出てきて、本当にあたたかいもてなしを受け、自分の故郷に帰ってきたような感じになります。ずっと入らせていただける、そういうところが大宮のよさであり、日南のよさであると感じております。

学生たちが自分の故郷ではないところで、すごく緊張して最初はどぎまぎしながら、調査に入らせていただくんですが、最初からこういうふうにとってもウェルカムで、とってもあたたかく迎えていただけるので、逆に困った課題が出てくるんです。甘えが出てくるんです。自分の家族のような感じになってしまっただけで甘えてしまうんです。

そんな中で何度も雷を落とさないといけないということもあります。学生たちには自分たちのミッションを忘れず、甘えず、これだけもてなしをいただいている中で、自分たちがどれだけ返しているのかということもしっかりと考えて、自分たちはやったぞというような恥じない成果と報告会をしましょうということで、学生を叱咤激励し、雷を落としながらやっております。

大宮の皆様にごどれだけ貢献できたのか、一生懸命はやっているんですけど、私自身本当に分かりませんが、手厚いサポートをいただいているというような気持ちで毎年、お世話になっています。

筒井先生：

大宮には完全に押しかけで平成 18 年に行ったのが最初だったと思います。私自身が研究しているのはコミュニティというものをどういうふうにつけていくのか、補強していくのか、どういうふうに改善していくのかということでして、実は、学生がお世話になっているのは私自身の研究でもあるんです。といいますのは、さきほど小田切先生の講演の中に「若者機関モデル」(スライド 17 枚目)というのがありました、私はあれを 10 年間かけて大宮でやらしてもらったというところなんです。

そういった私の方の目的でありまして最初はこちらからお願いして、地域の方に協力していただくという形で始まりました。協力をしていただく中でうれしかったことがありました。まち協さんの方からこういうことをしてみないかという提案をしてもらえようになったことです。

最初は私と学生の方のことを考えて、こういったことをやりたいんですけどご協力いただけませんかということで、食べ物とかいろんなことをお願いしていたんですけど、逆オーダーとでもいうのでしょうか、地域の方からオーダーをいただけるようになりましてのが、連携を始めましてから 4・5 年たってからかなあとと思います。その後は、地域の方からのオーダーとこちらの方からのオーダーを混ぜ合わせたような形で、まち協さんとは「今年のテーマはこういったでいきましょう」ということで、ワークショップをやらせていただいています。

日置先生：

突然ですがありがとうございます。まち協さんの方から何かありませんか？

古都さん：

さきほど、福田さんのほうからありましたが、最初の日に交流会、顔合わせ会をしております。食ったり飲んだりして、あくる日からはすっかりお友達になっています。地域の住民にあつたらとにかく挨拶を、これだけはしてくださいとお願いしております、学生のみなさんに元気に挨拶をしていただきますと、地域の方も非常に喜んでおられます。非常によい声かけをしていただいています。

大宮で 10 年連携が継続できたのは段塚さんのおかげかなと、まち協は思っております。

日置先生：

ものすごく気を使って受けいれてもらっているのが分かります。学生はそれが分かっているのが問題だなと思っております。

荒木さん：

学生人材バンクの事務局の方に、何かイベントがあれば募集をかけてきてもらうようになっています。一昨年からは「かきどろぼう」というイベントをしており、病害虫の駆除と柿を使ったレシピの開発をお願いしております。去年は十数名が来てくれました。

学生さんが十数名来れば、多里もにぎやかになります。まさに、どろぼうが右往左往するというような形になります。今年は、宣揚祭の荷揚げ、木の葉つみ、桜公園の整備などにも学生に参加していただいています。日南町は鳥取から遠いので泊まりになるので酒がでます。飲みながら、多里への提案をしてくれる、我々もそれを考えてそれを返す。多里のまち協ではいい雰囲気になっていると思って

おります。

秋末さん：

学生さんにはせつかく来てもらうんで、「ご馳走しなきゃ、何かしなきゃ」と思うのですが、でもそれを思いすぎると長続きしないので、おにぎりですとか、地域の野菜でカレーライスですとかその程度で許してもらっています。

我々がお知らせしたのはイベントばかりなんですけど、猪栅のお手伝いとかともあるそうなので、自治会単位で困っているときは、一度相談して見られたらいいかと思います。

町長：



大学との連携は当初、地域の方が言われているように、若い子の姿が見えなくなったんで大学生が来てくれるとうれしいなというような、軽い気持ちもあったのかと思っています。行政からすると、18歳から22歳の人口は日南町には一番少ない年代ですので、そういう方々が日南町に入ることによって、いろんな考え方が広まっていきます。そういった中で、まち協の方々が言われていますように、若い方と付き合うことによって、小田切先生が言われましたミラー効果ではないですが、若い方とこういうふうにつき合ったら、上手くいくんだということをおぼることができました。それにより、Iターンの人たちも受け入れやすくなり、日南町にIターンしてくる人が増えた、という側面もあるように思います。

日南町役場の採用に関しても、日南町に住民票がなくても受験できるようになり、(日南町にゆかりのない)鳥取大学の卒業生も日南町で働いています。今年も何人が受験されると思います。公務員ならどこでもよいというのではなく、日南町の公務員として働きたい、町の人たちと一緒にがんばりたいという人が来て来ています。

研究のための研究というものもあると思いますが、今は地域の人たちからこういうことを研究してほしいという段階へ進んでいます。今後は、日南町で安心して暮らしていくためにはどうしたらよいかという観点から、連携を深く進化させて行きたい。

日置先生

ありがとうございます。これからの課題にさせていただきます。

学長：

鳥取大学の豊島でございます。まずお断りしなければなりませんのは、日南町との連携事業が開始されましたのは、能勢学長と岩崎理事の時代でございます。

3年前、私が学長に就任したおり、心の中では「学生が迷惑をかけ、住民の皆さんは困っておられるのではないかと心配しておりました。そういった心配は杞憂に終わったのですが、地域の皆さまには

食事や布団を用意してもらっただけでなく、挨拶や礼儀作法まで教えてもらい、本学が標榜する「人間力」までつけていただきました。心より感謝を申し上げます。

本学は、高等教育を広く一般化しようということで設立された新制大学であり、その使命の1つが社会貢献です。18歳人口が年々減少する現状で、各県に1校ずつ大学を置いたという意味をしっかりと理解し、地域貢献・社会貢献に尽力していきたいと考えております。その意味におきましても、日南町の皆さまには引き続きご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



日置先生：

ありがとうございます。鳥取大学は「知と実践との融合」とか「人間力」を標榜しているんですが、それは実はここ日南町において早くから進んできたのではないかと私は思っています。それはやはり町の皆さん、町民の皆さん、役場の皆さんが、町をあげてそういった環境を提供してくださったからです。教育、研究、社会貢献というものが求められているんですけど、それをバラバラにするのではなくて、三位一体でやるということですね。ここで進んでいると感じています。

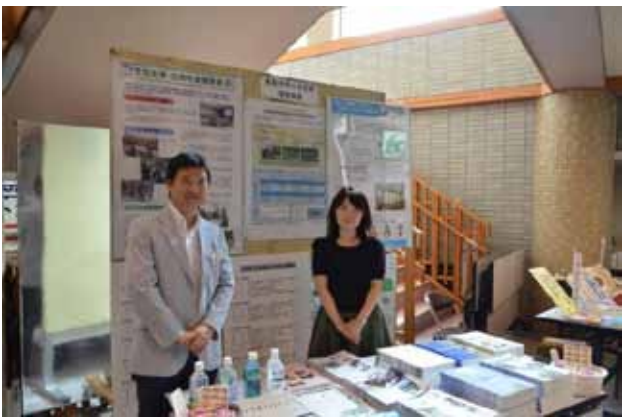
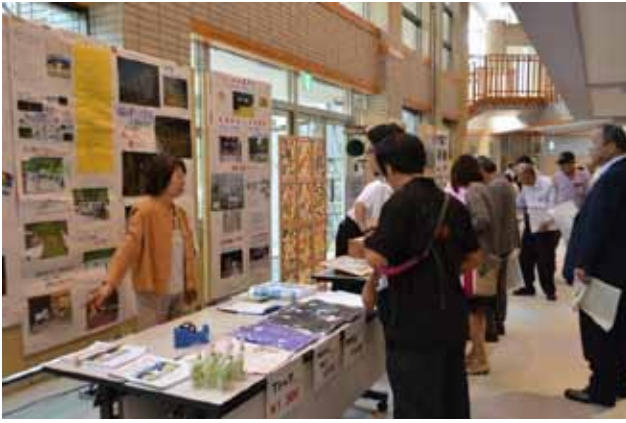
最後に増原町長にお言葉を頂いて締めにしたいと思います。

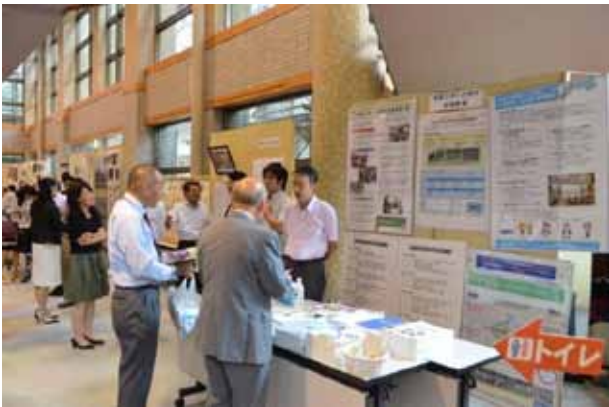
町長：

今日はまち協の10周年の会でもあります。まち協が10年たったなかで、まち協とまち協を結ぶという活動が必要になっているのではないかと思います。いろいろなタイプのまち協があるが、共通する問題もあるので、今後は、いくつかのまち協で集まり、鳥大と連携して解決するという手法があると思っています。今後とも豊島学長をはじめ先生方のご協力をお願いしたい。また、まち協の方にも日南町の明日のために頑張っていたいただきたいと思います。

○写真集











とりりん・オッサンショウオ木製パネル贈呈式

鳥取大学 - 日南町公式キャラクターの木彫パネル寄贈式が7月15日、広報センターにて行われた。

日南町在住の工芸家・杠一司（ゆずりは かずし）氏から鳥取大学と日南町の公式キャラクター「とりりん」及び「オッサンショウオ」の木彫パネル寄贈の申し入れがあり、豊島学長、増原聡日南町長出席のもと寄贈式を行った。約30人の参加があった。

「オッサンショウオ」と「とりりん」が大学キャンパスを仲良く歩く姿は、チャンネル日南でも放映され、連携10周年を町民にアピールできた。

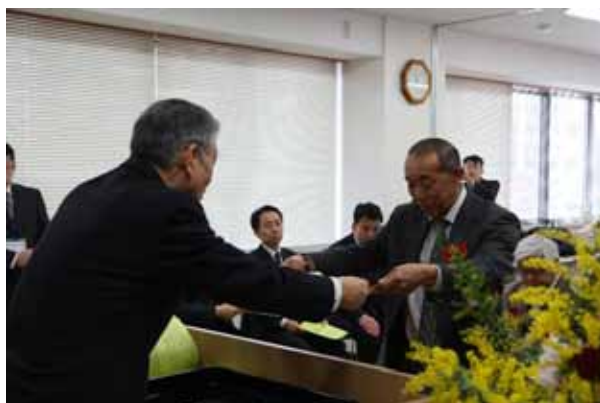


WG会議が鳥取大学学長表彰「社会貢献賞」を受賞

鳥取大学日南町連携事業ワーキンググループが2月29日、平成27年度鳥取大学学長表彰「社会貢献賞」を受賞した。

「日南町からの派遣職員を中心にした緊密なコミュニケーションに基づく地域課題の抽出と、部局横断的な教職員と町職員・住民等の協働による課題解決に取り組み、にちなん町民大学、サマー・ウィンタースクール等の教育事業、福万来ヒメボタル、森林のFSC認証、まめな水生産事業等の地域資源の発掘・活用、大宮町づくり協議会との協働による住民の生きがいがづくり事業など日南町の地域活性化に大きな成果を挙げている」こと等が評価された。

同日開催された授賞式では、同グループを代表して座長の日置教授（農学部）が豊島学長より表彰状を受け取った。



過疎に向き合う出発点としての日南町

鳥取大学工学部 谷本圭志

私にとっての日南町は、中山間地域における過疎化やその延長線上にあるわが国の人口減少・少子高齢化の課題に本格的に取り組もうと志を抱いた場所です。これまでに、公共交通、中心地域整備、地方創生など多くの政策に関与の機会をいただき、多くを学ぶことができました。それらの一端は、大学や日南町をはじめとする自治体職員の皆様とともに「過疎地域の戦略」という書籍で全国に発信することもでき、感謝に堪えません。直面する難題を町の皆さんが真摯に受け止め、未来を創っていく姿勢は目を見張るものがあります。これからも、「30年後の日本の姿」がわが国や世界にとって希望の多き姿になるよう、町とともに歩んでいければと思っています。



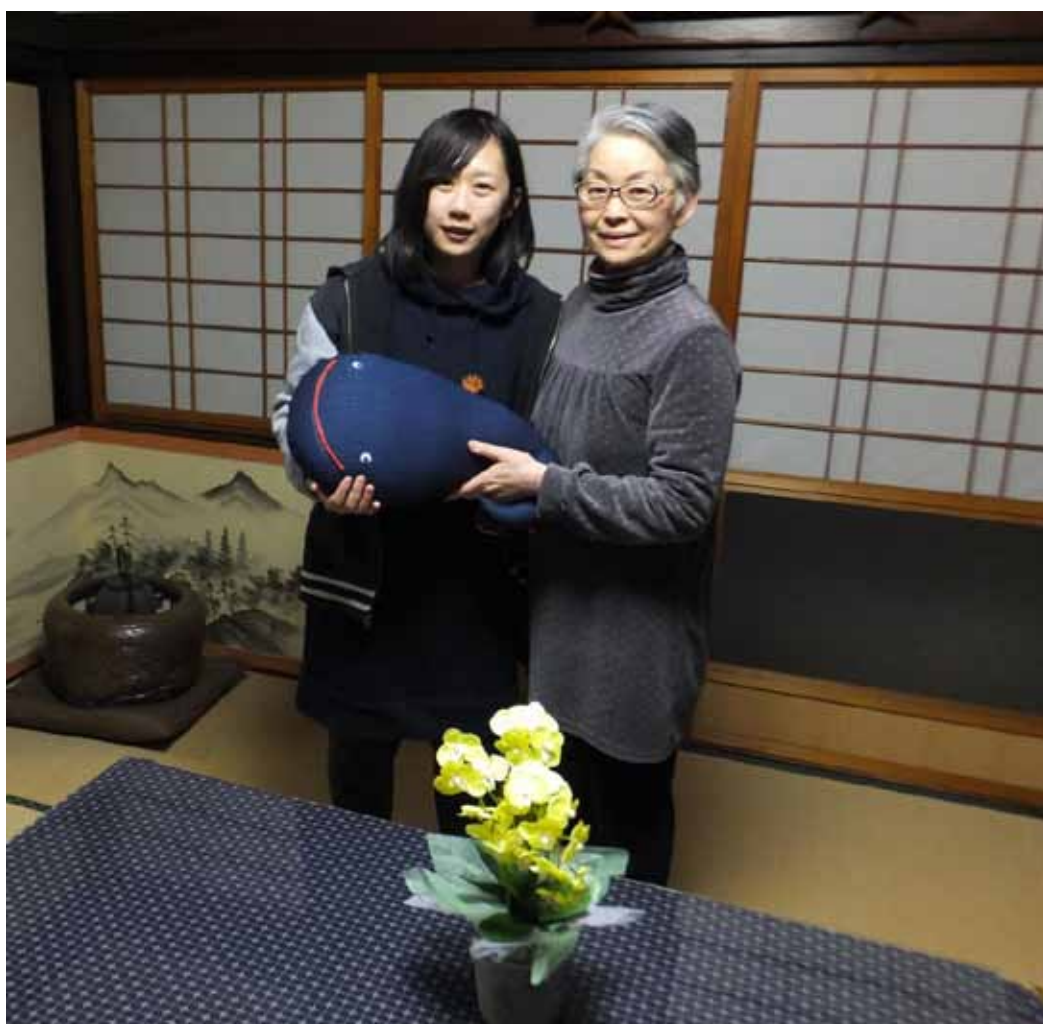
日南町連携事業「空き家の管理に関する町民意識調査」に取り組んで感じたこと

農学部 笠波春菜

日南町での調査を行うなかで、地域社会では想像以上に空き家が多く、深刻な状況であることが分かりました。同時に、地域の人々が自分たちで空き家の問題を解決しようと様々な取り組みを行っていることを知りました。空き家問題に限らず、現在の過疎地域で起こっている問題は、全国的な過疎化の進行によって将来的にさらに広範囲の地域で見られるようになる可能性があります。今後全国各地で起こりうる問題を先取るために、今こそ、日南町のような地域社会が抱える問題と取り組みに目を向けた研究を行っていく必要があると感じています。

事業を通じて感じた町の良いところは？

日南町の一番良いところは住民の方々がとても親切なところでした。調査期間中、私は日南町内の民家に数日間泊めていただくことを繰り返していました。どのお宅でも私を温かく迎えてくださり、毎日楽しく過ごすことができました。その結果、おいしいお米や野菜、赤い実がたわわに実った林檎園、綺麗な星空、希少なヒメボタルにオオサンショウウオなど、調査を行いつつ日南町を満喫することができました。私は空き家調査を通じて、日南町のことが大好きになりました。



私の宝物

つくし工房 代表 段塚英美

人と交流するのが大好きで、10年前から大宮に来られる鳥取大学の先生と学生さんに食事とお風呂を提供してきました。

はじめて筒井先生が大宮に来られて、50人分ぐらいのお弁当を作ってもらえないかと頼まれたときはビックリしましたが、私たちの地域では22年前から「給食ボランティア」というお年寄りにお弁当を作って配る活動を続けてまいりましたので、すんなりと協力することができました。こういう活動を続けてきて本当に良かったなーと思いました。

学生さんが宿泊していた地域の自治会館に布団は置いていなかったもので、筒井先生がわざわざ多里まで借りに行かれるなど、苦勞されておりました。「大変だなあ」と思いまして、10組ほど用意して寄付いたしました。

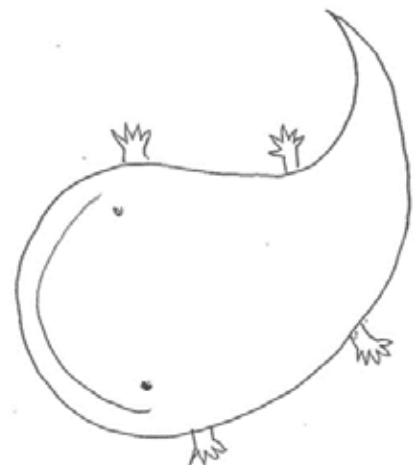
鳥取大学の学生さんを受け入れたり、外国人のホームステイを受け入れたり、山村留学の小学生を受け入れたり、「そんなことよくできるねえ」とかよく言われるんですが、受ける側としましても、本当に若いエネルギーを頂き、こちらも楽しくさせてもらっています。

2009年に日南町でオオサンショウウオの全国大会が行われた際には、多里のまち協から電話があり「ハンザケに関するものをなにか作ってくれないか」と言われて、ハンザケのクッションを作りました。

あんな気持ち悪いものをどうやって作ろうか思いましたが、思い切って可愛くしたら、なかなか人気の商品になりました。よく売れているんですよ。

お世話する中で出来た人とのつながりが私の宝物になりました。若い学生さんたちとおしゃべりをしたり活動したりすると、パワーがもらえますし、孫がいっぱいできたという感覚にさせてくれます。また、学生さんは地元の人が気づいていなかった地域の魅力や歴史を発掘・再発見してくれました。これらはこれからも地域の宝です。ありがとうございました！

清流と森に囲まれた
日南町には僕の仲間が
いっぱい棲んでいるんだよ。
すごいだろ！！



「日南町のおいしい水と名水調査」を終えて

鳥取大学医学部医学教育学分野 祝部 大輔

平成 23～25 年度地域貢献支援事業(日南町のおいしい水と名水調査)において、日南町の全簡易水道(15 箇所)と、日野川の源流や船通山の「金明水」、鳥木山の「長命水」など 53 地点を調査し、ミネラル成分から「おいしい水指数」と「健康な水指数」を科学的に算出しました。その結果、日南町の水は、硬度が低く、すっきりとしたおいしい水であることを確認することができました。その過程で、日南町は湧き水の中に町があると言えるほどあちこちにおいしい水があり、湧き水の精がいるようで驚きました。



このような湧き水を求めて共に歩いた日南町役場の久城隆敏氏との 3 年間の調査は、私にとって非常に有意義な時間であり、日南町の大自然の中で過ごさせて頂いたことに感謝いたします。ある時は八岐大蛇伝説で有名な船通山の天狗岩付近にある、須佐ノ男命も飲んだであろう金明水を頂き、ある時は神話に彩られる聖なる滝の聖滝の中に身を置き、水の流れる音を肌で感じてリフレッシュし(写真左)、またある時は三国山を端とする日野川源流の水を求め道なき道を進み、滝のような川を横断し、日野川源流の碑に辿り着き、日野川が持つ下流地域への意義を感じました(写真右)。このように、日南町は正にどこか懐かしい日本のふるさとの風景であり、湧水を巡る旅は非日常の世界でした。

この調査は、多くの方々の協力の上に成り立っています。この調査にご協力下さった日南町役場の皆さん、森林インストラクターの坪倉敏氏、そしてご協力下さった多くの日南町民の方々に感謝しています。



1 度失った自然環境は 2 度と戻ってきません。今後も森林などの環境を守り、今回の調査でも判明した良質な地下水資源を後世に伝え、町民の健康で快適な生活環境の確保に努めていただきたいと強く望んでいます。郷土の豊かな水資源を次世代に受け

継ぐことは、この地に暮らすことの意味、誇りに転化するはずです。また、水質調査を元に、豊かな自然環境を後世に伝えるための基礎的資料を作成したことで、水資源を活用した地域経済が活性化し、保全活動や価値を高める取り組みを推進し、日南町が益々発展されることを心より願っています。

5 4 枚の名刺の重み

日南町住民課 久城隆敏

これまで私が関わった鳥取大学との連携事業は、平成18～19年度の森林認証取得支援事業、平成19～20年度の小・中一貫校プロジェクト、平成19年度のグリーン・ツーリズムによる過疎地域活性化プロジェクト、平成21～22年度の「日南町におけるハーブ栽培のための土壌実験と圃場実施調査」、平成23～25年度の「日南町のおいしい水と名水調査」、そして、芸術文化センターと一緒に取り組ませていただいた平成18年度の劇団サダリ公園、19年度のオペラ「アマールと夜の訪問者」公演、平成19・20年度と平成24・25年度のフッペル平和祈念コンサートなどがあります。また、直接の担当ではないにせよ、この10年間、多くの地域貢献支援事業、持続的過疎社会形成研究プロジェクトに関わらせていただきました。

中でも、フッペル平和祈念コンサートは、フッペル社製のピアノと戦争にまつわる悲しいエピソードを世に知らしめることになった事業として、名水調査は、町のおいしい水のボトリング事業へと繋がっていった事業として、強く印象に残っています。

さて、自称「名刺コレクター」の私ですが、現在、手許には3千枚を超える名刺があります。その内、お世話になることが多い大学の先生とマスコミ関係者の名刺は、別様で整理しています。このたび、そのフォルダーにある鳥取大学の先生方の名刺を数えてみましたら、その数、なんと54枚。因みに、母校の先生の名刺はわずか2枚でした。これだけの先生方にお世話になったんだと改めて実感いたしました。

こんな私の特技は、たった一度しかお会いしてない先生方であっても、まるで恩師でもあるかのように、その名刺を頼りに図々しく電話をさせていただくことです。この拙文を読まれて、「そう言えば…」と頷かれた先生もいらっしゃることでしょう。（逆に、町のデータ提供等の依頼があった際には、私のできる範囲でお応えしてきたつもりです。お役に立てたかどうか自信はありませんが…。）

と、ここまで書いて、何か懐古的な文章になっていることを少し反省です。まだ、やらなければならないことが、山積みです。退職前にもうひと仕事、どうぞ、今後ともよろしく願います。

誰でも安心してかけられる地域医療体制を目指したコミュニティーづくり事業

医学部 河合康明

平成 18-20 年度に、お年寄りも子供も、男も女も、障がいを持っている人も持っていない人も、日本人も外国人も、誰でもが主役になれる「ふれあい囲碁」活動を通して、地域コミュニティーづくりのお手伝いをしたいと考えました。地域医療の維持が困難になっていく中で、住民が安心して生活できる地域づくりが目的でした。ご協力いただきました高見徹日南病院長（当時）、山内崇史福祉保健課長（当時）、梅林千恵保健師（当時）、長谷川照子保健師（当時）の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成 18 年度



外国人と視覚障がい者

平成 19 年度



中学校で団体戦

平成 20 年度



小学校で保護者と

フッペルは知っている

鳥取大学地域学部附属芸術文化センター長 新倉健

日南町と地域学部附属芸術文化センターの連携事業で最も印象に残り、また意義深いと感じられるのは、なんといっても貴重な文化遺産フッペルピアノの発掘と、この1台のピアノから大きく広がって行った音楽を通じた日南町のみなさんと鳥取大学および鳥取のみなさんとの人間的なつながりであったと思います。

三森先生をはじめ実行委員会のみなさん、コンサートのために奮闘していただいた久城さん、アシスト日南のみなさんに心から感謝いたします。鳥取男声合唱団エルダーブラザーズからは、「交通費の助成なんぞいらないから、毎年フッペル平和祈年コンサートで歌いたい」という声がしきりに上がっています。これからも日南町との交流と発信を続けて行きたいものです。



日南町河川の調査を行って

地域学部4年 森木翼

私は河川調査の為、約一年間日南町に訪れていました。初めて訪れた時は正直、山しかないなと感じました。しかし、夏には福万来でヒメボタルの鑑賞を、秋には紅葉、冬は雪景色になる等、私が普段生活している湖山町よりも季節の変化を感じやすく、これが日南町の魅力の一つであることに気づきました。そして徐々に日南町の魅力にひかれていきました。

さらに、自然だけでなく人々が生活している町の風景も一年で大きく変化していることが調査に行くことでわかります。調査の帰りにいつの間にか日南町役場近くにローソンが出来ていたことを知ったときは衝撃を受けました。その他、道の駅が完成に近づいているので春以降の調査の帰りにでも寄ってみたいと思います。今では調査に行くことで自然と触れ合えるだけでなく、風景や町の移り変わりを見ることも調査の楽しみの一つです。

今年度も調査の為、川の中や田んぼに入り、生物を捕まえていると思うので、町内の皆様引き続きよろしく願いいたします。



「日南町福万来におけるヒメボタル幼虫の調査」

農学部4年 向井 紳

私は秋から冬にかけてヒメボタル幼虫の調査をさせていただきました。この調査を行うにあたり、日南町の方には大変お世話になりました。まず、調査プロット設置の際には町役場の古川さんとそのお父様に助けていただきました。お仕事中にも関わらず、私の方を優先してくださった古川さんには感謝しています。また、泊りがけの調査の際には山上まちづくりの会の近藤さんは私を快く迎え入れてくださいました。

冬の厳しい寒さの中調査に向かったり、ヒメボタル幼虫が上手く捕獲できなかったりと大変なこともありましたが、このような支えがあったからこそ、私は最後まで頑張ることができたのだと思います。



※福万来 ヒメボタルの里

シミュレーションを用いた認知症教育プログラム

医学部 山本美輪

本事業は、平成 26 年 COC 事業として日南町で始まり、今年度は地域志向教育研究事業として 3 年目を迎えました。私は、平成 25 年 10 月よりこの鳥取大学医学部保健学科へ着任しましたので、この事業は鳥取大学教員として日南町の皆さんとの“歩み“そのものです。今後も、この地域志向教育研究事業が地域住民と共に鳥取大学が歩める場となるよう努力していきたいと思います。



初めての出前科学実験教室

医学部 中本幸子

この教室は鳥取大学教授田中俊行先生のご努力により9年前に開講され、私はその翌年からお手伝いさせていただいています。

私の初めての教室は『だれが一番手洗いじょうず？』でした。その頃はインフルエンザが大流行し、幼稚園や小学校では手洗いの指導に力を入れていました。会場に集まってくれた子供達は学校で習った手洗い法により丁寧に洗った手をブラックボックスに入れ、小窓から覗きます。すると「指の間が光つとる!」、「バイ菌が一杯残つとる〜!」と大はしゃぎです。しかし、光る原理や洗い方について話すと、しっかりと話を聞いています。子供達はその姿勢に安堵感と喜びをもらい、初めての教室を終えたことを覚えています。

それ以降、色々なテーマに挑戦しましたが、日南の子供達の「向き合う姿勢」は変わることはありませんでした。その事が私の活動に大きな力と、楽しさを与えてくれています。



説明を聞いてしっかりやってみましょう!



大人気のとりりん



会場の様子

地域をもっと好きになるきっかけに

青戸 麻記子

私は大宮の一住民としてワークショップや交流会等に度々参加させていただきました。また、一度は大学にお邪魔して、学生の皆さんだけの率直な話し合いの場を別室のモニターで見させていただくというまるでテレビのような経験をさせていただいたりもしました。この数年間で色々なテーマの活動に関わらせていただきましたが、どれも自分たちの実生活に活かせることばかりで、とても有益なことを日々学んでおられるのだなと感心しました。

これまで地域の中では、いつもと同じことをなんとなく続けていたり、やる前からこれはダメ、あれはダメと思いがちな空気がありました。学生の皆さんの柔軟な発想や前向きな姿勢に触れて、私自身刺激をもらうことができましたし、地域としても新たな可能性を与えてもらえたのではないかと思います。

また、学生の皆さんとお話ししたり共に一つのことを考えていく中で、いつも顔を合わせている大宮の人達が実はこんな風に考えておられるんだな、こんなことが得意なんだなと、新たな一面を知ることができたことも、私はとてもうれしく思いました。

学生の皆さんとの活動を通して、また少し大宮と大宮の人達を好きになることができたと思っています。大宮の人達とこんなことができるかもしれない、あんなことをやってみたいという想いを大事にして、今後地域での活動に活かしていけたらと思います。



「日本の良きふるさと」としての学びの場

地（知）の拠点大学による地方創生推進室 天野圭子

学生たちは日南町を訪問しますと、町の豊かな自然や町民みなさまの優しい人柄が印象に残るようです。なかには、自身のふるさとを日南町に重ねて思い起こす学生もいます。そんな「日本の良きふるさと」と呼べるような日南町で、これからも本学の学生を日南町でしかできない気づき、学びの場として受け入れていただけましたら大変ありがたく存じます。



発達障害児の包括的支援ネットワークの構築

医学部脳神経小児科 前垣義弘

この事業で何度か日南小学校の授業参観をしました。自分の子どもの授業参観から大分経っているせいか、とても新鮮でした。学校での子どもたちはとっても元気で、いるだけで元気になるような気がしました。学校をオープンにして、学校を中心にした街づくりも良いなとふと思いました。

学生ボランティアに助けられて・・

多里まちづくり推進協議会 秋末道江

「なんと、本当に学生がやってきた！」

日南町のはずれ、広島の方が近いこの多里の地に。正直最初は半信半疑。わざわざ？

船通山の険しい山道を宣揚祭の為に荷物運び上げる仕事から、柿泥棒の手伝い。提供された柿を採り、柿を使った特産品の試作。桜公園の整備では、伐採した木の運搬。火の祭りでは、エコ蠟燭の搬入、点火。若者の力を最大限に発揮。本当に感謝、感謝。

心ばかりのおもてなししかできないが、交流もお互いご馳走の一つのようだった。結構楽しんで帰ってくれたのでほっとした。

しかし、これからの地域は、力が弱まる一方だ。実動の力と同様に企画・プランを一緒に立ててくれる力が欲しい。イベントへの参加よりさらに高度にハードになる参画が地域の求める力の一つだと考えている。

おじさん・おばさん・イノシシが多いけど、メールを駆使して、たまには顔を見て「いっちょ、やっちゃいましょうか！」っていう主役を日南町は待ってるよ！！

『日南町とともに10年』

鳥取大学研究・国際協力部 社会貢献課長 原田剛

私自身、本課に来るまでは「日南町」といえば、天気予報の県内のアメダス観測地点としての「茶屋」を知る程度であった。しかし、島根県・岡山県・広島県との県境の町であり、鳥取キャンパスから約130Kmの位置にある日南町は、県内では一番連携を行っている町である。

日南町で事業を展開する教員の言葉として一番心に残っているのは、「現在の日南町は10年後、20年後の日本の姿であり、ここでの研究結果は、将来の日本のお手本となる」であった。鳥取大学の多くの教員の研究テーマのフィールドとして最適だったのであろう。ただ、日南町での教育研究を役場職員や沢山の町民の手厚い協力が支えていたことを忘れてはならない。

日南町からは、平成19年度から毎年1名、延べ6名の職員を派遣研修職員として本学で受け入れ、本学教員と町との架け橋役を担ってもらっている。そのことも、長年に渡り連携事業が継続できている要因の一つでもあると考えられる。私も、担当課として関係教職員と日南町に何度も足を運んだが、この関係は今後も引き継いでいただきたい。距離は遠くても、お互いがいつまでも近い関係でいてほしいものである。



笑顔の花

初代派遣職員 手嶋孝夫

平成19年、春、私は鳥取大学の門をくぐりました。といっても学生としてではありませんが。日南町から鳥取大学への派遣研修職員としてです。そういったご縁で結ばれた鳥取大学を、今では我が母校のように思っています。正直、右も左もわからないような状態での派遣、あれからはや9年が経ったのだとあらためて思うと、私も少しは年なりに成長したのだろうかと思いが身を振り返ってみます。私自身についてはもう少し様子を見ていきたいと思いますが、鳥取大学と日南町の絆は年を重ねるごとに強く固いものとなりました。連携が始まって10年という節目の年を迎えました。連携事業を通じて花開いた成果が、そしてこれから更に花開こうとしている成果が、少しでも多くの笑顔につながることを願わんばかりです。私も、日南町職員として、そして日南町民として、微力ではありますが、笑顔の花を咲かせる力添えができればと思います。



これからも 咲かせていこう 笑顔の花
鳥大・日南 手とりあって

有意義な一年間でした

二代目派遣職員 高橋裕次

日南町と鳥取大学との連携が軌道に乗り出した頃、派遣職員として声を掛けていただきました。少し不安もありながら、役場以外の仕事に関するのもおもしろいかなと考え、就職一年生の気持ちで取組んだことを懐かしく思いました。

短い期間ではありましたが、当時、派遣生活を気遣ってくださった林理事、社会貢献室と一緒に仕事した職員の皆さん、大学の先生や学生と連携事業で一緒に活動してくださった皆さんお元気でしょうか。またどこかでお会いしましょう。



大学での1年 ～得たものは腹まわりの脂肪だけではない～

企画課 古川則仁（平成27年度派遣職員）

私はつくづく幸せな人間だなあと 생각합니다。

35歳で役場に就職するまで、家族の脛をかじって自由気ままな生活をしてきたため、自分と同じぐらいの歳の社会人や行政マンなら当然身に着けている常識やスキルがすっぽりと抜け落ちていました。分かってはいたものの、社会貢献課で働く同年代の仲間たちがキャリアの中で身につけてきたスキル、仕事のさばき方や所作などを見るにつけ、痛いほどそれを感じさせられました。

しかし、幸運なことに、鳥取大学で出会った方々からは、大卒1年生の新社会人に指導するが如く、基本的なことから丁寧にご指導いただけました。（あきれ半分だったかもしれませんが。）また、社会貢献課の仲間たちは出世競争の相手でもないのだから、カッコつける必要も恥も外聞もなく色々なことが聞けました。本当に勉強になりました。そして本当に感謝しております。

私が鳥取大学に派遣されたことで、鳥取大学と日南町の連携に特別な進展があったわけではありませんが、私個人にとっては特別な経験になりました。この経験を社会へ還元できたとき、はじめて貴重な税金を使って私を大学へ派遣してくれたことの社会的意味が生まれます。その日に向かって、今は頑張るのみです。

法橋理事、今後の指針となるよう叱咤激励、ありがとうございました。

日置先生、事業計画を立てるうえでのアドバイスは頭に刻み込まれております。

原田課長、事務文書の書き方や会議の段取りの仕方を教えてください、ありがとうございました。

片野先生、今まで誰も本気で注意してくれなかった私の社会常識のなさを、論理的に指摘してください、ありがとうございました。

天野先生、増えた贅肉の1.5kg分は先生のせいです。

社会貢献課の皆さん、1.5kg分は皆さんのせいです。あと、昼食はもっとゆっくり食べた方が健康にいいですよ。

法橋理事、ご馳走していただいたバーボン、おいしゅうございました。

写真：

社会貢献課の仲間と足繁く通い獲得した「ビリーブ」のメンバーズカード。



『日南町との12年』

地域学部 永松 大

野生植物の生態を研究している私は、2003年10月に鳥大に採用された後、2004年5月にサクラソウを見に来たのが日南町とのご縁の始まりでした。その後も植物調査に訪れるなかで日南町の景観による印象を持っておりましたところ、日置先生を通じて森林組合のFSC森林認証取得にかかわるお誘いを受けたのが2006年の春だったと思います。その後は連携協定のお話が始まり、それまで全く不勉強だった森林認証についてたくさんの方のアドバイスをいただき、自身の研究の幅を広げることができました。さまざまなご協力をいただき、これまでに日南町をフィールドに4人の学生が森林管理のテーマで卒業研究に取り組んできました。2015年からは、オオハンゴンソウの抑制を目的とした学生実習を開始し、これは少し長くおつきあいが続きそうです。一方で学生と地域の方々との交流は、これまであまり深いものにできておらず、もう少しなんとかしたいとずっと感じているところです。鳥取大学と日南町と、双方にさらにメリットのある連携をめざしていきたいものです。

